

# 臨床心理学研究

東京国際大学大学院臨床心理学研究科

第 15 号

---

## 論 文

- 大学生の本来感と対象関係および  
自己受容・他者受容との関連 …………… 新井 和法…… 1
- 歴史的業績を残した人物に関する発達障害についての研究 … 綾田すみれ…… 17
- コラージュ作品に表現される母性イメージに  
関する探索的研究（第1報）…………… 申 ジンア…… 37  
——形式分析を中心に——
- 青年期の両親への信頼感・性別が対人欲求  
及び同調行動に与える影響について …………… 田村 茉菜…… 53  
——大学生を対象に——
- 青年期の SNS 利用における自己開示とその心理的要因 …………… 渡邊菜保子…… 79
- 青年期以降の移行対象（その2） …………… 王 怡今…… 97  
——女性ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の比較を通して——
- 

2 0 1 7



# 臨床心理学研究

東京国際大学大学院臨床心理学研究科

第 1 5 号





# 大学生の本来感と対象関係および 自己受容・他者受容との関連

新 井 和 法

## 要 旨

大学生という時期は日本では多くの場合が最後の学生としての時期を過ごす期間である。大学卒業後には環境・対人関係も大きく変わってくると考えられる。

そのような中でどのように生きるか等は“自分らしくある感覚”が保持できているか否かが自分自身の在りかたを決め、多くの活動の場面において自身の活動を円滑に進めるための一つの指標となるのではないかと考えられる。

本研究は、伊藤・小玉（2005）によって「自分自身に感じる中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義された本来感尺度を用いて、自己受容と他者受容と、その重要な関係性はどのような形のものかに焦点を当て、行った。その結果、自己受容と本来感の間での強い関連が示唆され、自己受容ができていものの方が本来感も高くなり、他者との関係性においても安定した関係性が築け、ある程度自己をその関係性において自由に出せているということが本来感を高めるといったことが示唆された。

Key Words : 本来感・対象関係・青年期・自己受容・他者受容

## I. はじめに

日本において、大学生時期というのは自己決

定の重要な期間であると考えられる。大学全入時代と言われる現代において、自身がどのような進路に進み、大学への進学を決定した際、その学生生活の中での決定をどのようにしていくのか、自身のその後の自立も含め、この時期に大きな選択をすることは少なくない。

大学生という時期は日本では多くの場合が社会にでる以前の最後の学生としての時期を過ごす期間である。それまでの小・中・高などのこれまでの学内での交友関係も含め、自身がそれまでにどのように他者と関わってきたのか、その繋がりがたや頻度はどの程度のものかなども、社会に出る依然と出てからで大きく変わってくると考えられる。学友として共に過ごしてきた友人と、社会に出て同僚として他者と知り合い、付き合うということは、これまでの関係とは大きく異なってくると考えられる。今まで自分自身が他者とどのように接してきたか、その中で自分自身がどのように在ったかを自分の中で保持していけることが大きく変容する環境において、その後様々な場面で活動するに当たり大きな役割と果たすと考えられる。

ことに、近年では電子機器でのやり取りの場面も増え、大きく他者との繋がりがたも変容してきた。顔や声も知らない他人と手近な端末で即座にやり取りができ、他者との繋がりが実際に会うといった機会のみにも留まらず、いつ何時でも他者と繋がれるようになったこの時代においてどのように他者と接し、その中でどのように生きるか等は“自分らしくある感覚”が保持

---

\* 臨床心理学研究科 博士課程（前期）

できているか否かが自分自身の在りかたを決め、多くの活動の場面において自身の活動を円滑に進めるための一つの指標となるのではないかと考えられる。

## Ⅱ. 問 題

エリクソン (Erikson, E. H. 1959) によれば、青年期はアイデンティティの確立の時期であるとされている。大学生はそのアイデンティティ確立の時期にあたる中でも社会に出る準備期間として、猶予をもつ特別な期間であると考えられ、特殊な立ち位置に属していると言える。日本において、大学生の自己決定はそのまま就職に繋がることも多く、ここでアイデンティティが確立されていくことは非常に大きな意味があると考えられる。

大学生時期においては、それ以後に対しての大きな決定といえるであろう就職、あるいは進学かといった、社会へ進むか否かが決まるという大きな決定ともいえる進路にも関係する事から、それまで以上に自分自身にも向き合う必要があると考えられる。そのためアイデンティティの確立が進んでいくのではないかと考えられる。女子大学生を対象に、行われた高木ら (1986) による研究では、同一性拡散群においては自尊感情の得点が有意に低くなっているとの報告がなされており、アイデンティティの拡散は、自尊感情の低下を招くと考えられる。また、伊藤・小玉 (2005) による本来感と well-being の関連をみる研究において、本来感と自我同一性の併存的・因子的妥当性をみた分析で中程度の相関がみられ、異なる因子構造がより当てはまりの良いモデルであったとしている。これらの事から自尊感情と本来感は近いものでありながらも異なったものとして併存していると考えられ、また、このことから自尊感情・アイデンティティ・本来感における関連性は存在しているものと考えられ、アイデンティティが確立していくにしたがって、本来感も高くなることが予想される。

本来感とは、高い自尊感情にあるとされる適応的なものと、不適応的なもののうち、適応的な自尊感情を指す。適応的な自尊感情とは、不適応的な自尊感情は自己価値が社会的な成功の有無など、外的な基準に左右されるのに対して、自分自身の内的な感情であり、外的な基準には左右されない。伊藤・小玉 (2005) は本来感の定義を「自分自身に感じる中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義し、その尺度を作成した。本研究においてもこの定義を採用し、本来感とする。

本来感と自尊感情が異なる影響を与えているという事の一つとしては、伊藤・小玉 (2005) による本来感と自尊感情が well-being に与えている影響をみる研究が挙げられる。well-being の下位因子において、本来感は、人生に対する満足以外 (抑うつ・不安・人格的成長・人生における目的・自律性・積極的な他者関係) に正の影響をあたえ、自尊感情は、抑うつ・人生に対する満足・人生における目的・自律性に対して有意に影響を与えており、自律性に対してのみ負の影響を与えたとしている。このことから、本来感は自尊感情に比べ、より well-being に広く影響を与えていると考えられる。自尊感情は自律性を低下させ、他者との関わり合いを促進させるなどの機能はないのに対し、本来感では自律性を高め、他者との関わり合いとの関連があると考えられる。本来感と他者との関わり合いとの関連をみた他の研究の一つとして、益子 (2010) による過剰な外的適応行動と内省行動が本来感におよぼす影響をみた研究が挙げられる。同研究において、本来感に対し過剰適応の内の自己抑制が負の相関を、よく思われたい欲求が正の相関を示したとしており、自己内省は弱い正の相関を示したとしている。このような結果から、自身をよく思われたい欲求と共に他者関係を積極的に持つ傾向が本来感に影響を与えていると考えられ、また、他者との関係をどう持つか、どのように関わっているかといったことの方が、自己に対する内省よりも、より大きな関連があると考えられる。本来

感は自律性を高めるということから、他者と融和的になるのではなく、自身を自身として受け止め、そのうえで他者に認められるよう自身を方向づけする影響を与えているのではないかと考えられる。また、他者との関わり合いにおいてどのように自身を表せるか、または他者をどのように受け止めるかにおいては、自身に対する受容や、他者に対する受容が関係してくるであろうと考えられる。

櫻井（2013）が女子大学生を対象に行った、自己受容・他者受容のアンバランスさと精神的健康の関係のみた研究において、全ての群間で有意に差があり、自己受容・他者受容高群>自己受容高群・他者受容低群>自己受容低群・他者受容高群>自己受容・他者受容低群の順に精神的健康が高いとの結果がでており、自己受容と他者受容のバランスにより差異があることが示された。また、同研究において、自己受容と他者受容は低い相関を示し、自己受容と精神健康は中程度の負の相関（低得点が精神健康が高い）を示し、他者受容と精神健康では低い負の相関を示したとしている。精神的な健康を保つためには自己の受容、並びに他者の受容が必要であることが示唆されたと言える。また、自己受容と他者の関連を取り扱った研究として、山田・岡本（2006）による青年を対象とした自己による自己受容と他者を通しての自己受容の研究がある。この研究では、自分自身が自分に対し受け入れる感覚である自己受容と、他者に受容されることを通して自身を受けいれられるようになるという自己受容を、自己による自己受容と他者を通しての自己受容とに分け、研究を行った。この研究によれば、自己による自己受容・他者を通しての自己受容の両尺度が受容してくれる他者の存在と自尊感情の両尺度に優位に弱い正の相関を示したとしている。また、全ての相関において、多少ではあるが他者を通しての自己受容よりも、自己による自己受容が強く相関を示したとの結果がでており、自身が他者に受け入れられているという感覚よりも、自分自身を受けいれられる感覚を持つ者の方がよ

り受け入れてくれる他者の存在があるという感覚をもち、自尊感情も高まるということが示唆されている。

対象関係の形と他者の関係性に関する研究として鶴田ら（2015）の青年期の対象関係と自己表明行動に関する研究がある。この研究において、対象関係尺度の内の親和不全因子と回避的自己表明行動の間に中程度の正の相関、希薄な対人関係因子と回避的自己表明行動の間に弱い正の相関がみられ、一体性の過剰希求と婉曲的自己表明・見捨てられ不安因子と婉曲的自己表明行動の間に弱い正の相関がみられ、希薄な対人関係とアサーティブな自己表明行動との間に中程度の正の相関がみられたとした。また、関係満足度と希薄な対人関係因子との間に有意な中程度の負の相関がみられ、アサーティブな自己表明行動と関係満足度の間に中程度の正の相関が、回避的自己表明行動と関係満足度との間に有意な弱い負の相関がみられたと報告されている。

このことから、他者との関係の持ちづらさ、親密性が低いことは率直に自身の考えを述べることと関連があると考えられ、他者関係が親密である者ほど自身の意見を言えるという関係性があることが示唆された。また、アサーティブで回避的でない自己表明ができるほど関係満足度が高いということから、他者全体と向き合い、他者の意見を吟味し、それに対して自身の意見を言えるといった、他者そのものの考えを受け止めることが必要であると考えられる。

以上のことから、自分自身を受けいれられるということや他者を受けいれられること、他者との関係性が安定しているということは自分が自分らしくあるという感覚を強めることにも繋がり、自分らしくあるという感覚が高まることは、人格的成長や精神的健康を助長する役割があると考えられる。そのような感覚を高めるには、自身の内的なもののみでなく、他者が自身に対してどのように関わっているか、どのような関係性であるか、その関係性を自身がどう受け止め、それに対しどうアプローチをしているか

といったことが非常に重要であると考えられる。

### Ⅲ. 目 的

上記の事から、自分らしくある感覚は自身や他者を受容することの他に、他者とどのような関係性を築いてきたかによる影響を受けている可能性が考えられる。また、他者関係において、よく思われたい欲求を抱くということは、その対象が存在しているという前提が考えられ、時には向き合う機会もある、ある程度親密な者の存在が考えられる。

本来感と自己受容・他者受容・他者関係の関連として、自分が自分らしくいられるという感覚は、他者と自身の対比が必要であると考えられる。他者の存在があり、自身との摩擦があったうえで、自身が他者と別の存在としてそこに在り、それを自分自身であると認められることが、自分が自分らしくあるという感覚を高めるのではないかと考えられる。他者を受容し、他者の個別性を認め、他者との関係性を見つめ、自身がその他者より良い関係を築けることによって、他者と自分が別の存在であり、自分も他者もそのままの存在でいいのだと感じられることが本来感を高めることに繋がると考えられる。しかし、その本来感との関連において、自身をどのような形で受容しているのか、他者とのような関係性を築いているのかをみた研究は行われていない。

本研究では、本来感はどのような他者関係との関連が強いのか、また、そのなかでの他者と自身の受容の関連やその形はどのようなものであるかの関連を検討していくことを目的とする。

自身のあるがままの姿を認め、自身を受けいれることができるという状態、他者を受けいれ、他者との関係性の不安定さに耐え（あるいは安定性を増し）、自分自身を他者との関係性においても表出できることが常に自分らしくあるという感覚に繋がる可能性が考えられ、また、先行研究から、他者受容と自己受容の働きは似通ったところが多いと考えられ、程度の違

いはあれど影響は同様に示すと考えられる。このようなことから本研究における仮説は以下の通り示す。①本来感は対象関係の各因子から負の影響を、自己受容の各因子・他者受容から正の影響を受けている。②本来感は自己受容・他者受容と正の相関関係を示す。③対象関係は本来感・自己受容・他者受容と負の相関を示す。

### Ⅳ. 方 法

#### 1. 調査対象および調査時期

調査は都内および埼玉県の私立大学に通う大学生を対象に、質問紙のフェイスシートにて、回答の有無により不利益は起こらないという趣旨の注意書きと、質問紙に対して協力するかどうかの同意・不同意を選択してもらい学部・学科・学年・性別を記入したうえで無記名・個別記入方式の質問紙を配布し、授業終了時に20～30分程度の質問紙回答記入時間をもらい、質問紙の配布・回収を即日で行った。回答は欠損値が認められたものを除き使用した。総回答数は276名、有効回答数220名（有効回答率80%、男性97名、女性123名、年齢平均19.8歳）であった。

調査機関は平成27年9月～同年10月である。なお、期間は総データ取得までの期間であり、質問紙配布から回収までは同日内に行われた。

#### 2. 質問紙

##### A. 対象関係尺度

対象関係の測度として、井梅ら(2006)によって作成された青年期用対象関係(以下対象関係)尺度を使用した。「私は、人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない」「私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある」など6項目からなる「親和不全因子」、[「本当の自分を理解してくれていると思える人がいる」「私には、ほんとうに困ったとき、助けてくれると思える人がいる」など5項目からなる「希薄な対人関係因子」、[「人を思い通りに動かすのは、私の密かな楽しみであ



る」「私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある」など5項目からなる「自己中心的な他者操作因子」, 「親しい人とは、何をするにも一緒に行動をしないと気が済まない」「親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい」など6項目からなる「一体性の過剰希求因子」, 「何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる」「ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある」など7項目からなる「見捨てられ不安因子」の5つの因子からなり、計29項目で構成され、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの6件法で回答を求めた。

#### B. 自己受容尺度

自己受容の測度として、櫻井（2013）によって作成された自己受容尺度を使用した。「現在の自分を受けいれている。」「良いところも悪いところも含めてこれが自分だと思える。」など7項目からなる「全体としての自己受容因子」, 「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる。」「自分の素敵なところを素直に良いと思える。」など7項目からなる「望ましい自己の受容因子」, 「これまでの人生をやり直したい。」「全体として自分のことが受けいれられない。」など5項目からなる「現状満足因子」の3つの因子からなり、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

#### C. 他者受容尺度

他者受容の測度として、櫻井（2013）によって作成された他者受容尺度を使用した。「他人の喜びを素直に喜べない。」「他人の長所を素直に認めることができる。」など17項目からなり、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

#### D. 本来感尺度

本来感の測度として、伊藤・小玉（2005）による本来感尺度を用いた。本来感を感じている個人の状態を記述した「いつも自分らしくいられる」「いつでも揺るがない「自分」をもって

いる」など7項目からなり、「当てはまる」から「あてはまらない」の5件法で評定を求めた。

#### E. 分析方法

対象関係尺度および自己受容尺度は因子構造を有し、因子構造をもつため、確認的因子分析を行い、各因子の信頼性の検定を行った。その後、本来感尺度・他者受容尺度・自己受容尺度・対象関係尺度の相関分析を行った。なお、因子構造のあるものは、尺度ごと・因子ごとに相関分析を行った。本来感に対し自己受容・他者受容および対象関係からの影響が予想されるため、独立変数を自己受容・対象関係の各因子・他者受容とし、本来感を従属変数においた重回帰分析を行った。また、本研究においては、全ての質問項目が得点が高いものが低い数値（1があてはまるなど）となっているため、逆転項目以外に逆転処理を行って分析を行った。なお、本研究においては、対象関係の総得点は、他者関係との総合的な不安定さの一つの指標として算出し、分析にも用いるが、主眼は各因子との関連における検討とする。

## V. 結果

### 1. 対象関係尺度因子分析結果

対象関係尺度は5因子の因子構造を持つため、これを確認するため因子分析を行った。分析方法は先行研究にならい、最尤法・プロマックス回転で5因子を仮定し分析を行った。その結果、負荷量を.35未満で切り、採択した際に質問項目が先行研究と同じ因子構造を示した。また、5因子構造での累積%は56%であった（表1）。

#### A. 親和不全因子

I 因子は、因子負荷量順に「私は人となかなか親しくなれない」「私は、人とどうやって会ったり話したりしていいのかわからない」「私は自分の心に壁を作ってしまい、周りをよせつけないところがある」「人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い」「私は他人と深くつき合う事を恐れている」「私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうと

表1 対象関係尺度 因子負荷量

N=220	I	II	III	IV	V
3. 私は人となかなか親しくなれない	.899	-.103	.051	-.004	.005
1. 私は、人とどうやって会ったり話したりしていいかわからない	.893	-.145	.136	-.041	-.051
2. 私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないところがある	.801	.053	-.097	.084	-.072
5. 人のそばにいると、緊張して落ち着かないことが多い	.752	.067	.083	.079	-.072
4. 私は他人と深くつき合うことを恐れている	.650	.144	-.018	-.071	.056
6. 私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうところがある	.430	.210	-.208	.299	-.158
29. 私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	.036	.842	-.096	.066	-.123
26. 親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく	-.151	.833	-.029	.029	-.020
25. 私は人と接する時、人の顔色をととても気にする	.012	.774	-.085	-.031	-.083
27. 身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく	-.149	.663	.192	.005	.087
24. ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくところがある	.225	.634	.109	-.110	.016
28. とても親しい相手であっても、いつか裏切られるのではという不安を感じることがある	.075	.553	.165	-.073	.194
23. 何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる	.253	.538	.175	-.081	-.015
17. 親しい人とは、何をしても一緒に行動をしないと思いが済まない	.177	-.280	.917	-.022	-.046
21. 私は常に誰かといっしょにいないと不安である	-.019	.136	.700	-.150	-.010
19. 私は完全に一心同体になれる人を求めている	.003	.166	.582	.055	-.020
20. 私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである	-.126	.164	.575	.181	-.101
22. 母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ	.004	.063	.524	.154	-.056
18. 親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい	-.036	.258	.432	-.041	-.127
13. 私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある	.126	.104	-.150	.801	-.121
12. 人を思い通り動かすのは、私の密かな楽しみである	.007	-.046	-.077	.788	-.069
14. 自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが、人とのつきあいで重要なことである	-.006	-.159	.207	.683	.003
15. 自分の欲望を満たすために、人を利用することは悪いことではないと思う	.009	-.021	.023	.605	.151
16. 人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである	-.075	.060	.285	.541	.126
8. 私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる	-.085	-.059	.009	-.021	.974
7. 本当の自分を理解してくれていると思える人がいる	-.166	.015	-.054	.088	.871
10. 私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている	.337	-.190	.032	.007	.508
9. 私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることが出来る	.256	.122	-.106	-.118	.455
11. 友人関係は比較的安定している	.328	.004	-.072	-.074	.445

ころがある」の6項目からなる他者と親しくい  
ることに対するの難しさや関係性の構築の困難  
さや緊張を表している「親和不全因子」。最も  
低い負荷量を示したもので.430であり、他因  
子にまたがって.35以上を示したものはなかつ  
た。また、同因子の信頼性をみるため、  
Cronbachの $\alpha$ 係数（以下 $\alpha$ 係数）を算出した  
ところ、 $\alpha = .891$ と問題のない値となった。

### B. 見捨てられ不安（見捨て不安）因子

II因子は因子負荷量順に「私は他人からの否  
定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやす  
い」「親しい人に自分の考えを否定されるとひ  
どく傷つく」「私は人と接する時、人の顔色を  
とても気にする」「身近な人が私以外のものに  
気をとられたら、拒絶された感じがして傷つ  
く」「とても親しい相手であっても、いつか裏

切られるのではという不安を感じるることがあ  
る」「ひょっとして大切な人から拒絶されるの  
では、という恐れをいだくことがある」「とて  
も親しい相手であっても置いてきぼりにされそ  
うで、よく心配になる」の7項目からなる親し  
い他者との関係性に対する拒絶、取り残される  
不安を表す「見捨てられ不安（以降見捨て不安）  
因子」である。同因子内において、最も低い負  
荷量を示したものは.538で、他因子への.35以  
上の重複はみられなかった。また、 $\alpha$ 係数を算  
出したところ $\alpha = .894$ と、問題のない数値と  
なった。

### C. 一体性の過剰希求（一体希求）因子

III因子は負荷量順に「親しい人とは、何をす  
るにも一緒に行動しないと気が済まない」「私  
は常にだれかといっしょにいないと不安であ  
る」「私は完全に一心同体になれる人を求めて  
いる」「私を本当に想ってくれる人なら、私の  
要求をすべて受け入れてくれるはずである」  
「母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ」  
「親しい人には、自分を“100%”受け入れても  
らいたい」の5項目からなる他者との心理的距  
離の過度の近さを表す「一体性の過剰希求（以  
下一体希求）因子」である。同因子内で最も低  
い負荷量は.432で、他因子への.35以上の重複  
はみられなかった。また、 $\alpha$ 係数を算出したと  
ころ $\alpha = .838$ と十分な数値であった。

### D. 自己中心性（自己中心因子）因子

IV因子は負荷量順に「私には、欲求を満たそ  
うとして、自分の思い通りになるよう相手を仕  
向けるところがある」「人を思い通り動かすの  
は、私の密かな楽しみである」「自分が思う通  
りに人の気持ちを仕向けていくことが、人との  
つきあいで重要なことである」「自分の欲望を  
満たすために、人を利用することは悪いこと  
ではないと思う」「人との関係で私が重点を置く  
ことは、常に相手より優位な立場になること  
である」の5項目からなる自分が優れているとい  
う独善的な思い、自分のために他者が動くこと  
が当然と考える「自己中心性（以下自己中心）  
因子」である。同因子内で最も低い因子負荷を

示したもので.541で、他因子への.35以上の重複はみられなかった。 $\alpha$ 係数を算出したところ  $\alpha = .825$ であった。

E. 希薄な対人関係（関係希薄）因子

V因子は負荷量順に「私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる」「本当の自分を理解してくれていると思える人がいる」「私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている」「私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることができる」「友人関係は比較的安定している」の5項目からなる。他者に対する評価が安定しない、相互理解、実質的な中身を伴う対人関係の交流の困難を表す「不安定で希薄な対人関係（以下関係希薄）因子」である。また、この項目はすべての項目が逆転項目であるため、本研究においては逆転処理を行わず研究を進めた。同因子内で最も低い負荷量を示したもので.445で、他因子への.35以上の重複はみられなかった。 $\alpha$ 係数を算出したところ  $\alpha = .894$ と十分な値であった。

2. 自己受容因子分析結果

自己受容尺度は先行研究によって3因子の因子構造が確認されている。本研究においても同じ因子構造を持つかどうかを因子分析を行い確認した。分析方法は先行研究にならない、主因子法・プロマックス回転で3因子を仮定して行った。負荷量を.35を基準としてみたところ、第I因子に一項目.35に満たない項目があり、第II・第III因子に、他因子とまたがって負荷量が高かったものがあつたが、その因子に属する他の負荷項目の結果が先行研究と同じとなったため、今回は同因子として扱う事とした。結果は以下の通り（表2）である。

A. 全体としての自己の受容（全体的自己受容）因子

第I因子は負荷量順に「自分の弱いところも自分の一部として認めることができる」「人は人、自分は自分だと思える」「良いところも悪いところも含めてこれが自分だと思える」「現

表2 自己受容尺度 因子負荷量

N=220	I	II	III
15. 自分の弱いところも自分の一部として認めることができる。	.843	-.199	.088
8. 人は人、自分は自分だと思える。	.761	-.175	-.183
6. 良いところも悪いところも含めてこれが自分だと思える。	.736	-.020	.032
7. 現在の自分を受けいれている。	.716	.071	.144
13. ありのままの自分でよい。	.644	-.005	.092
1. 自分自身を受けいれている。	.460	.228	.081
18. 自分の不完全な部分にあまりとらわれない。	.319	.118	.152
19. 物事を成し遂げたとき、自分の努力を認めることができる。	-.083	.748	-.188
10. 物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる。	.196	.702	-.394
12. 自分が他者から高く評価されたとき、半信半疑になる。	-.282	.594	.350
16. 自分の優れている部分を受けいれている。	.262	.587	-.024
4. 自分の長所を素直に認めることができる。	.186	.565	.056
5. 他者から好意を持たれたとき、しっかりとしない。	-.273	.545	.104
9. 自分の素敵なところを素直に良いと思える。	.229	.515	.075
3. これまでの人生をやり直したい	-.025	.045	.713
11. 「今は違う自分だったらなあ」と思う。	-.001	.043	.668
2. 自分の欠点や弱点はできることなら捨て去ってしまいたい。	.122	-.272	.657
17. 過去の自分が気に入らない。	.067	.009	.520
14. 全体として自分のことが受け入れられない。	.095	.378	.395

在の自分を受けいれている」「ありのままの自分でよい」「自分自身を受けいれている」「自分の不完全な部分にあまりとらわれない」の8項目からなる自分自身を全体的に捉え、受容できるかといったことを表す「全体的な自己の受容（以下全体的自己受容）因子」である。本研究では同因子内で最も低い負荷量を示したものは.319と.35に達しなかったが、因子負荷を示している質問項目が先行研究と同一であったため、本研究においても同因子と定めて分析を続行する。 $\alpha$ 係数を算出したところ  $\alpha = .834$ と十分な値であった。

B. 望ましい自己の受容（望自己受容）因子

第II因子は負荷量順に「物事を成し遂げたとき、自分の努力を認めることができる」「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる」「自分が他者から高く評価されたとき、半信半疑になる（逆転項目）」「自分の優れている部分をうけいれている」「自分の長所を素直に認めることができる」「他者から好意を持たれたとき、しっかりとしない（逆転項目）」「自分の素敵なところを素直に良いと思える」の7項目からなる、自分自身の望ましい事柄に関する「望ましい自己の受容（以下望自己

受容) 因子」である。同因子内で最も低い負荷量を示したもので.515で、他因子への.35以上の負荷は質問項目10「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる」(-.394)と、質問項目12「自分が他者から高く評価されたとき、半信半疑になる」(.350)と二項目みられたが、属する因子が先行研究と同様であり、負荷量が重複していた項目も二つと少なかったため採用し、信頼性を求めた。 $\alpha$ 係数を算出したところ $\alpha = .809$ と十分な値であったため、この因子を先行研究と同様に扱うこととする。

### C. 現状満足因子

第Ⅲ因子は「これまでの人生をやり直したい」「今とは違う自分だったらなあ」と思う」「自分の欠点や弱点はできることなら捨て去ってしまいたい」「過去の自分が気に入らない」「全体として自分のことが受け入れられない」(すべて逆転項目)の5項目からなる、自分自身の変化を希望する項目の逆転からなる、現状のままではよいということを表す「現状満足因子」である。同因子内で最も低い負荷量を示したものは質問項目14「全体として自分の事が受け入れられない」の.395であった。また、同項目が第Ⅱ因子に高い負荷量を示し.378となっていたが、因子を構成する項目が先行研究と同一であったため、これを採用し、同因子として扱うこととする。 $\alpha$ 係数を算出したところ $\alpha = .713$ と他因子と比べると若干低くはあるが、問題となるほどの値ではなく、先行研究と同因

子として使える範囲であると判断した。

因子構造をもつ尺度は以上となり、全ての因子構造が先行研究通りで使って問題ないと判断した。

## 3. 相関分析結果

各尺度と各因子において相関分析を行った結果、以下の通りとなった(表3・表4)。

### A. 尺度別相関分析結果

本来感と対象関係・他者受容・自己受容の相関関係をみた結果、全ての尺度間で $p < .01$ であり1%水準で有意であった。本来感と対象関係の間では-.430と中程度の負の相関が、他者受容と本来感の間では.181と弱い相関が、自己受容と本来感の間では.713と強い相関がみられた。対象関係と他尺度の間では、-.430～-.493と、どの尺度とも中程度の負の相関がみられ、対象関係の総得点を他者関係の不安定さの度合いとし、他者との関係性が安定しているものが、本来感・自己受容・他者受容が高まることを示唆したいえる。

自己受容と他者受容の相関においては、 $p < .01$ であり1%水準で有意に.262と弱い相関

表3 各尺度相関

N=220	本来感	対象関係	他者受容	自己受容
本来感	1	-.430**	.181**	.713**
対象関係	-.430**	1	-.451**	-.493**
他者受容	.181**	-.451**	1	.262**
自己受容	.713**	-.493**	.262**	1

\*\*  $p < .01$

表4 各下位尺度・他者受容・本来感相関

N=220	本来感	親和不全	関係希薄	自己中心	一体希求	見捨不安	全体的自己	望自己受容	現状満足
本来感	1	-.439**	-.378**	.063	-.106	-.414**	.624**	.582**	.599**
親和不全	-.439**	1	.481**	.131	.042	.441**	-.270**	-.459**	-.335**
関係希薄	-.378**	.481**	1	.107	-.049	.276**	-.255**	-.357**	-.231**
自己中心	.063	.131	.107	1	.265**	.194**	-.030	.067	-.081
一体希求	-.106	.042	-.049	.265**	1	.532**	-.228**	-.059	-.262**
見捨不安	-.414**	.441**	.276**	.194**	.532**	1	-.357**	-.323**	-.462**
全体的自己受容	.624**	-.270**	-.255**	-.030	-.228**	-.357**	1	.530**	.584**
望自己受容	.582**	-.459**	-.357**	.067	-.059	-.323**	.530**	1	.510**
現状満足	.599**	-.335**	-.231**	-.081	-.262**	-.462**	.584**	.510**	1
他者受容	.181**	-.264**	-.355**	-.364**	-.288**	-.236**	.272**	.212**	.161*

\*\*  $p < .01$

\*  $p < .05$





においても非常に信頼性の高い因子群となったと考えられる。

自己受容の先行研究で確認された因子は3つであり、「全体としての自己の受容」「望ましい自己の受容」「現状満足」の3つであった。本研究においても概ね問題はなく、こちらの因子構造も先行研究通りに使用するのに問題となるほどの値はでなかったが、因子構造において多少のブレが生じていた。

第Ⅲ因子における因子構造で特に目についたのは属すべき因子と異なる因子と属する因子とほぼ同等の負荷量を示した質問項目14についてである。14の「全体として自分のことが受け入れられない」(逆転項目)では、第Ⅱ因子の「望ましい自己の受容」に負荷量が高く算出され.395と.378と負荷量の差が.017の差と非常に小さいものとなった。これは、「自分を受け入れられない」という質問文に対し、現在の自分を受け入れないという事が、望ましい自分へ変化することに繋がる一端となっているためなのではないかと予想される。第Ⅱ因子では、第Ⅲ因子に負荷量が重複している項目が二つみられた。質問項目10の「物事がうまくいったとき、自分自身を自然に認めることができる」は-.394で、他因子へ高い負の負荷量を示している。また、重複していたもう一つの質問項目12「自分が他者から評価された時、半信半疑になる」も同様に.350で第Ⅲ因子に重複をしていた。第Ⅱ因子に属する項目で他の項目のものは概して第Ⅰ因子の「全体としての自己の受容」因子に負荷量が高めにでており、「望ましい自己」というものが自身を認めることを基礎とし、変容の間に在るという事が考えられる。信頼性 $\alpha$ の値も十分であったため、本研究では先行研究同様の因子として扱ったが、本研究においては2つの因子に高い負荷量を示した質問項目10・14は望ましい自己の受容・現状満足との関連性の高さが示唆され、項目の類似性が高いと考えられる。

## 2. 相関分析

### A. 尺度別相関分析

尺度間の相関分析においては、全ての尺度で有意に相関関係を示していた。とりわけ本来感と自己受容は.713と強い相関を示し、自身を受容できることは本来感を高めることと密接な関係があることが考えられる。比して、他者受容は本来感との間に非常に弱い相関関係を示した。他者を受容できるということは、自分自身の受容に比べ自分らしさを感じることとの関連性は高くないことが示唆された。

対象関係と本来感の相関においては、-.430と中程度の相関を示した。対象関係は、自己受容・他者受容においても中程度の負の相関を示した。また、わずかな差ではあるが最も強い相関関係を示したのは自己受容であった。他者と安定した関係性は、自分らしくあることや他者を受け入れることとの関連性も高く示されたが、関連の示された中でも自己の受容ができるものが他者との安定した関係性を持ちやすい傾向であることが示唆された。

### B. 因子別相関分析

尺度別ではすべてが有意に相関関係を持っていたが、因子別でどのような関係性との関連が高いのかをみるために因子別で相関分析を行った。本来感と相関関係を持たない対象関係因子は「自己中心」と「一体希求」であった。対象関係因子で最も強い相関関係を示したものは「親和不全」で-.439であった。次いで-.414見捨不安、-.378「関係希薄」であった。また、自己受容の因子とはすべて強い相関関係がみられた。

「一体希求」の質問項目では「親しい人とは、何をするにも一緒に行動をしないと気が済まない」「私は完全に一心同体になれる人を求めている」「私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである」「母親なら、私の望みを叶えてくれて当然だ」といった、他者は自身に対してこうあるべきである、という願望・希望の提示がなされている質問項目が多くみられる。また、「自己中心」

では「人を思い通りに動かすのは、私の密かな楽しみである」「自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが人とのつきあいで重要なことである」「自分の欲望を満たすために、人を利用する事は悪いことではないと思う」など、自身が対象に対しどのような行動を起こすのかといった質問項目になり、この二つの因子において共通すると考えられる点では対象に対しての願望・希望などの対象への「望むこと」を表している質問項目が多いと考えられる。対して、相関のあった他の因子では「親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく（見捨不安）」「私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる（関係希薄）」「人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い（親和不全）」など、対象との間にある“不安や緊張”が関係していることが考えられる。このようなことから、本来感に対し関連性を示した群として、他者への欲求や願望よりも、他者との関係を築くこと自体に対しての不安・難しさや他者との関係上での不安・緊張が少ないような選択項目という傾向があり、本来感との関係性を示していたのではないかと考えられる。

このことから、相関分析の結果においては、本来感とは他者関係において、他者をコントロールしたい、他者と密接になりたいという願望よりも、新しい他者との繋がりを作ることへの不安、現在交流関係のある他者との関係性の不安や、見捨てられてしまうのではないかと、といった緊張状態と負の相関を示しているということが示唆されたといえるだろう。

他者受容と他の因子の相関をみたところ、全ての因子・尺度と弱いながら相関を示している。他者受容は直接的に何かと繋がり、共に高まるという役割は強くなく、他者を受容するということは広く、基礎的なものとして他者との関わりに関連しているのではないかと考えられる。しかし、すべての因子・尺度と相関関係は示したが、中でも本来感と「現状満足」との間の相関関係は非常に弱いもので、対象関係因子の中で他者受容と負の相関関係で係数の高かったも

のは「自己中心 (-.364)」と「関係希薄 (-.355)」の二つであった。このことから、親密な関係を持つ他者に対しては受容が高まることが考えられ、自身を中心的に考え、その対象をコントロールしようとするという傾向が低下すること傾向にあると考えられる。他者受容が高まる状態としては、他者との関係性を優先しやすいと考えられ、他者との関係性を継続するうえで自身を中心として現状のままであること優先するよりも、他者との関係性を保持する事を優先する傾向があるのではないかと考えられる。

「一体希求」は多くの因子間で相関関係を示さなかったが、「見捨不安」とは正の中程度の相関を示した。この関係性は「一体希求」の得点が高くてもものは、見捨てられることに不安を抱き、過剰に他者の行動に反応してしまう傾向があるためと考えられる。その他「一体希求」と正の相関を示したのは「自己中心」であり、上記のことに加え、「一体希求」の高いものは、他者と一体になりたいという願望を持ちながら、自己中心的に他者と関わっていることが示唆された。このことから、他者と一体になりたいと感じることは、自身の感覚を他者に共有してもらいたいという感覚があると考えられる。

自己受容の各因子に関して、相関関係で特徴的であると考えられるものは「望自己受容」である。「望自己受容」は自己受容因子のなかで「親和不全」との負の相関が最も高く (-.459)、自己受容因子の中では唯一「一体希求」と相関関係を示さなかった。望ましい自己を受容することは、他者との関係をスムーズに持つことができることと関連していることが示唆された。他者とスムーズに関係を持てるということは、通常、社会的には望ましい状態であると考えられるため、望ましい自己の一反として捉えている可能性が考えられる。自身に対し、他者との新しい関係を持つことや、他者と親しくなりやすいといった評価を持つこと自体が望ましい自己を受容しやすいという傾向との関連性がある可能性も考えられる。また、スムーズに他者関係を持てるものは、一人の他者に固執せず、広

く他者関係を持つことが出来ることと関連するというを示唆していると考えられる。

全体を通して対象関係との間での相関係の強さが本来感と最も共通した特徴を持つのが「望自己受容」であった。このことは、望ましい自己の受容を高くできるものが、多くの面で本来感の諸特徴と共通するという可能性を示唆していると考えられる。本来感と異なった部分の相関の特徴に関しては、自己受容の他の因子と合わさることでより多くの特徴が共通してくる。このことから本来感は「全体的自己受容」「望自己受容」「現状満足」の自己受容の包括的な特徴を持っているものであると考えることができるだろう。

### 3. 重回帰分析

本研究において、他者受容と自己受容は同様の役割を果たすものと考え、本来感・他者受容・対象関係がそれぞれ本来感に対して影響を与えているという仮説を立て、ステップワイズ法にて分析を行ったが、その結果、採択された因子・尺度は自己受容の3因子、対象関係因子の「親和不全」「自己中心」「関係希薄」の3つの計6因子であった。当てはまりは.555で、最も高い回帰係数を示したものは全体的自己受容であった。

自己受容はすべての因子が採択され、対象関係から採択された因子からの回帰係数もすべてが自己受容各因子よりも低いものとなった。相関関係を示さなかった自己中心も、対象関係の下位因子の中で採択される結果となった。

この結果は、自己受容と本来感は強い関係性を示しているという事示唆していると考えられる。また、相関分析においては相関関係を示したものについても重回帰分析においては採択されなかったことから、擬似相関であったことを考慮し、今一度再考する必要があると考えられる。

因果関係を示した対象関係下位因子の中で「自己中心」のみ、正の回帰係数を示し、他者関係において、自分の思うように他者と接する

事が出来ることや他者に対してこうすべきである、こうしてほしいといった願望を抱くことは本来感を高めることに繋がっていることが示された。この結果から、他者と関わるうえで、自身がある程度他者との関わりにおいて優位に立ちたい、あるいは他者に自身の望み通りに動いてほしいという願望を持つことができるということも自分らしくあるということに繋がるという結果が示されたといえるだろう。

最も対象関係因子の中で高い回帰係数を示したものは-.149で「親和不全」であった。上述の「自己中心」や「親和不全」と同様に負の回帰係数を示した「関係希薄」を交え考慮すると、他者関係において、他者との間で自分自身が他者に対して願望を抱く、あるいは示しつつも、関係性は希薄にならないというような関係性を持っているもの、また、そのような関係性を作りやすいものが本来感を高く示すという可能性が示唆されたと考えられる。

自己受容の各因子については、それぞれが正の回帰を示し、相関でも示されたのと同様、包括的な自己受容が本来感を高めることに繋がる可能性が示された。その中でも最も高い回帰係数を示した自己受容は相関関係においても最も相関を強く示した「全体的自己受容」であった。「現状満足」と「望自己受容」は相関の強さは同程度であったが、回帰係数は「現状満足」が.263、「望自己受容」が.160と.10以上の差を有していた。このことから、本来感は自身を全体的に受容できるという状態と密接に関係しており、自身に対してこういったことが望ましい、と考える条件付きである自身の受容よりも、今現在の状態を受け入れられるかどうかといったことから影響を受けやすいと考えられる。また、最も回帰係数の高かった「全体的自己受容」に関しては、自分自身のネガティブな面を含めて受容できるかといった質問項目となっており、自身のポジティブな面・ネガティブな面の両方を受け入れることが出来るのが本来感により高い影響を与えていると考えられる。



## Ⅶ. 総合考察

本来感に対し、自己受容の各因子が強い正の相関関係を示し、対象関係因子において比較的強い負の相関関係を示していたのは「親和不全」「関係希薄」「見捨不安」の因子であった。重回帰において有意であったものは自己受容の各因子と対象関係因子の「親和不全」「自己中心」「関係希薄」であった。上記のことから、多少のずれはあるものの、本来感と自己受容に関しては密接な関係があると考えられた。また、自己受容および対象関係との関係性を示すと思われた他者受容に関しては自己受容各因子・対象関係各因子ともに弱い相関関係にとどまっており、重回帰分析の結果においては採択されなかった。相関分析においては自己の受容・他者との関係性の両者に対し、同程度に低いながら関連を持っている可能性が示唆されたといえるが、重回帰分析では採択されず、擬似相関であった可能性が考えられ、他者受容が高まる事が直接的な因果関係は存在せず、自己の受容や他者と接する場面が増えること、あるいは他者との接触場面の単純な増加やその他多くの要因を含み、それらに付随し、高まっている可能性が考えられた。

清兼ら（2013）による青年期における自己受容・他者受容のバランスと発言抑制をみた研究では、他者受容の高いものは、相手のために発言をしないという行動が少なく、自身のために発言を抑えるといったことが示され、自己受容・他者受容の両者が低いものに比べ、自己受容の高いものは自身の言いたいことは言うという、発言抑制が低くなるということが示されている。また、同研究において発言抑制による精神的健康に影響があるかどうかといった検討もされており、コミュニケーション力の低さによる発言抑制が多いほど精神的健康度が低いという結果が示されている。このことから、対人コミュニケーションに関連すると思われる親和不全と他者受容・自己受容に関連があると考えら

れる。また、石原（2013）による思春期・青年期のける周囲の他者からの被受容感と本来感の関連をみた研究では、本来感は中学生・高校生・大学生のどの年代においても、全体的に高く受容されている感覚を持つものが有意に本来感が高くなっていると示されている。伊藤・小玉（2006）によって行われた本来感に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討において男性では友人との交遊やサークル活動といった対人的で社会的な営みと本来感が関連しているとし、女性においてはのみ会などでみんなと騒ぐといったことが本来感と関連しているとした。このようなことから、他者と接すること、その活動の形や、他者から受容されているということは本来感との関連があると考えられる。

以上のことから他者とのどのような関係性を持つか、その関係性においてどの程度自己受容・他者受容を行うかで関係性の形が変容していくということが予想される。様々な他者と新しく関係を持つことのできる「親和不全」の低いものは、多くの場面において、自身の価値観を再検討できる機会が多いのではないかと考えられる。多くの他者と触れ合う機会が多くなることは、価値観の合う他者との出会いの機会も多くなるといったことの他に、一人ひとりに対しての関係性の比重が下がってくるといった可能性が考えられる。多くの異なる他者との出会いと、自身と近い価値観を持ったものとの出会いは、他者との安定した関係性を構築しやすい環境にあり、安定した関係性において自己を受容し、自身と他者の両方を受け止め、他者と自己の違いを認めることに繋がり、自分自身が自分らしくあるという感覚につなげることが出来るのではないかと予想される。

他者を受容することは、関係性を作るに当たりある程度必要なものと考えられ、我を通すことや、関係性を築くことの両方に関連があると考えられる。本研究において他者受容から本来感に対して直接的な影響はみられなかったが、どの程度他者のありのままを受け止めることが出来るのかは自身の在り様と、他者との関係性

の両方に関連するものと考えられる。

外的な基準に囚われず自分自身に中核的に感じられる自分らしさとされる本来感であるが、自分らしさの形成という観点において、他者との関係性は存在していると考えられるだろう。

本研究においては、他者との関係性の安定および自己に対する受容が本来感と大きく関わっていたことが示されたといえるだろう。とりわけ、他者との関わりにおいては不安や緊張状態が本来感との相関を示していると考えられる。他者の存在が得難く、自己の中で失われやすいものであると感じられやすい場合、その存在を失わないために、いかに外部との繋がりを保つかを重視し、自己価値を外的なものに依拠させやすくなるのではないかと考えられ、自己の価値観や意義も外部に影響されやすいのではないかと予想される。他者との関係性が得やすく、失われにくいものであり、自身もその中で自己中心的に振る舞えていると感じられている場合には、他者関係を翻弄され、そこに注力していた分の力を自己の内界に向けることが出来ることから、自己の中に内的な価値基準が出来上がってくるのではないかと考えられる。本来感を構築していくことは、他者との関係性において自身の中にどの程度入り込むことが出来る機会に恵まれるのか、といったことにも関連しているのではないだろうか。

## VIII. 今後の課題

本研究において、他者関係と本来感の関連を主にとりあつかったが、自己受容と他者受容が、それぞれどのような役割をもち、どのような場面においてより高められるかの精査と、その精査によって示されたものによる本来感の形成のさらなる細やかな対比・関連の検討がより本来感の形成の検討に有益であると考えられる。

本来感がどのように高められるか、どのよう

な影響を及ぼすかについては対人関係やストレスコーピング、内省などについても研究がなされてきており、近年では年齢別に研究されたものもあるが、他者関係や、周りとの状態に関して、ライフイベントや友人間でどのような問題があり、どのように解決をしてきたかなど、問題解決の行い方とも関係をしてくるのではないかと考えられる。他者との関係性のみにとどまらず、関係性の構築の手法や、そこに行きつくまでの経過を加えて対比をすることが出来ればより他者関係との密接な関わりがみえてくるのではないかと考えられる。

また、本研究においてはアイデンティティの形成と絡めて青年期を対象として研究を行ったが、更なる加齢によって本来感が高まるか、その年齢や、その年齢特有のライフイベント（就職・出産・子育て・介護など）とも関連があるか、また、その時期における他者との対比や関係性についての検討も自身の中核としての自分らしさをどのように構築していくのかを探ることに繋がるのではないだろうか。

## 付 記

本論文は2015年度提出の修士論文に加筆・修正を加えたものです。

## 謝 辞

本研究執筆にあたりご指導いただきました大矢泰士先生、副査をお引き受けくださいました溝口純二先生に深く感謝申し上げます。並びに、アンケート調査にあたり授業の貴重な時間を割き、ご協力くださった教授の方々、多くのご提案・助言・調査協力をくださった母校の指導教員・教授の方々、この場を借りて深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

また、アンケート調査にご協力くださった学生の方々、アンケートの調査実施に協力くださった同期院生の方々に深くお礼申し上げます。

文献

- Erikson, E. H. (1959) Identity and the Life Cycle. 小此木啓吾 (訳) (1973) 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房 130-133
- 石原由美 (2013) 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連. 九州大学心理学研究, 14, 117-124.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005) 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討. 教育心理学研究, No. 53, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006) 自分らしくある感覚 (本来感) に関わる日常生活習慣・活動と対人関係性の検討. 健康心理学研究, Vol. 19, No. 2, 36-43.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006) 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究, Vol. 14, No. 2, 181-193.
- 清兼 渚・鈴木友美・五十嵐哲也 (2013) 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要. No. 4, 22-32.
- 益子洋人 (2010) 大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感におよぼす影響. 学校メンタルヘルス, Vol. 13, No. 1, 19-26.
- 櫻井英未 (2013) 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係. 日本女子大学人間社会研究科紀要 No. 19, 125-142.
- 高木秀明・福森裕子・小沢一仁 (1986) 女子大学生の自我同一性 ——対人関係, 生き方, 自尊感情の面からの検討——. 日本教育心理学会総会発表論文集, No. 28, 342-343.
- 鶴田菜々・原口雅浩・重橋のぞみ (2015) 青年期の対象関係と自己表明行動に関する研究. 臨床心理学: 福岡女学院大学大学院紀要, No. 12, 73-79.
- 山田みき・岡本裕子 (2006) 現代青年の自己受容 ——自己による自己受容と他者を通しての自己受容の観点から——. 広島大学大学院教育学研究科紀要, No. 55, 339-348.





# 歴史的業績を残した人物に関する発達障害 についての研究

綾 田 す み れ

## 要 約

近年、発達障害は増加していると言われており、文部科学省の調査によれば通常の学級内に約6.5%程度は発達障害の可能性のあるような児童・生徒がいるという。本研究では歴史的業績を残した偉人や天才の中には発達障害を持っていた人物がいなかったのかを、高校の各科目ごとに歴史的に著名な人物を89名選定し、高校の教科書を用いて調査を行いその突出した部分や個性的な部分などプラス面に焦点を当てて見ていくことを目的とした。その結果、全科目の人物の中で発達障害と鑑別をした人物の割合は、89人中6人で6.7%という結果となった。発達障害の割合に関しては、6.7%と天才や偉人でも一般の人々と変わらない割合で発達障害だと思われるような人物がいるという結果となった。発達障害の人物は理系と、個性をそのまま突出させられるような美術に多く、言語的な能力が主となる倫理や国語といった科目には現れにくいのではないだろうかということが考えられる。

キーワード：発達障害

## はじめに

近年発達障害は増加していると言われており。例えば、文部科学省が平成24年に全国の

公立小中学校を対象に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、約6.5%程度（40人の学級で2～3人の割合）で通常の学級内に発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒がいる可能性が示されている。

発達障害の可能性のあるような「少し変わった人」というのは特別な存在ではなく、日常生活の中で誰の周りにもいるような存在であり、また、発達障害というものが一般的に表面化されてきた・身近なものになったのではないかと考えられる。

そして発達障害が表面化されてきたことに伴い、そのマイナスの面だけではなく、“発達障害であること”によるその独特な特性や個性などプラスの面にも目が向けられるようになってきた。その例として「発達障害＝脳の個性」と考える新たな教育法で、その子の個性としてある才能を伸ばそうとする教育や、障害ならではの特性を生かしたアウトサイダー・アートなどが挙げられる。過去には病跡学研究として様々な分野で優れた業績を残した偉人などの研究がなされてきた。こうした研究は、現在ではその対象となる人物の範囲も広がり、小説家・画家・音楽家・科学者などさまざまな分野の人物の研究がなされるようになってきている。過去の偉人や天才といわれるような人物たちの中には、その分野において明らかに他の追従を許さないような傑出した才能を持っていた人物も少

---

\*臨床心理学研究科 博士課程（前期）

なくないと思われる。しかしその傑出していた才能が発達障害によるものであった可能性はないだろうか。

そこで本研究では、近年身近になってきたと思われる発達障害・発達障害傾向を過去の歴史的業績を残したといわれるような人物が持っていた可能性はないのかを研究する。

## I. 問題と目的

近年になって発達障害が一般的に取り上げられるようになってきたことや発達障害が増加しているといわれていることは前述した。しかし発達障害は近年になって現れ始めたり増加したりしたものなのだろうか。それは近年になって注目されるようになっただけであり、発達障害の人物はその診断基準が確立される以前から居たはずではないだろうか。例えば石坂（2014）は『自閉症とサヴァンな人たち』の中で、江戸時代の自閉症や注意欠陥多動性障害の人物について触れている。そこで石坂は「江戸時代には、精神遅滞や自閉症の人は「障害者」として認知されていたのではなく、社会の一員として生活していたことが窺われる。しかし、彼らが、何らかの違和を醸し出していたであろうことは、予想できる。」と述べている。つまり1952年に初めてのDSMができる以前は、障害者というカテゴライズをされることなく、一般の人々の中に「違和を醸し出す人」というのが混ざって生活を営んでいたということである。こうした一部の人をある時には天才と呼び、今までその天才を対象として取り上げた数々の病跡学研究がなされてきた。

このようなことから、歴史上の人物で何かしらの分野において傑出した才能や特性・個性を持っていた人物が発達障害であった可能性はないのだろうかという疑問がまず浮かぶ。

### 1. 病跡学（パトグラフィー）とは

病跡学を心理学辞典（1999）で引くと、「主として精神的に傑出した人物（いわゆる天才）

の生涯や精神生活、性格、創造性、病気などについて、精神医学的、臨床心理学的な観点から事例的に研究する学問。精神病理学的に興味ある精神生活の側面と、人間の創造性にとってのその意味とを明らかにすることを目的としている。」と記述されている。

また、加藤正明（1993）の新版精神医学事典によると、パトグラフィーは「傑出した人物における精神生活と創造活動の関連を精神医学ないし精神病理学の立場から解明しようとする複合領域」とされている。

さらに日本大百科全書（1988）によると、ヤスパース（Jaspers, Karl）は「パトグラフィとは、生活誌あるいは伝記で、その目的とするところは、第一に、精神病理学者に興味ある精神生活の側面を記述し、その発生を論じることであり、第二にこのような人間の創造力の発生を精神病理学的な精神生活がどのような意味をもつものであるか明らかにすることである」と定義し、「精神病理学的に興味のある精神生活の側面を述べ、そういう人間の創造の原因に対してこの精神生活の諸現象・諸過程がどんな意義を持つかを明らかにしようとする生活記録」とも述べた。また、グルーレ（Gruhle, Hans Walter）は「パトグラフィとは、傑出人の異常な性格特徴、または精神的側面を知るための、特異な形式の伝記Biographieである」、「ある傑出した人の異常な本質特徴とその発展を、生活と作品を基にして提出しようとする伝記の一形式」と定義していると記載されている。

## 2. 発達障害について

### A. 発達障害概念の歴史

発達障害概念の歴史に関して「発達障害の基礎」（1999）によると以下のように説明されている。

それによるとまず、日本語で使用される発達障害にも Developmental Disorders と Developmental Disabilities という2つがあるという。

これら2つはともに発達障害と訳されるが、前者は医療を中心に置いた考えとして、国際疾

病分類 (ICD) やアメリカ精神医学会による疾病分類 (DSM) などで使われている。一方後者は、福祉や行政、リハビリテーション医療を中心に使用されている。そしてこの Developmental Disorders という語は、ジョン・F・ケネディ大統領が1961年に精神遅滞の予防、治療、対策を国のレベルにおいて考えるために28人の専門家を集めて委員会を作ったことに遡るとされる。この法律がアメリカで一般に広く認知され、WHOの国際障害分類のきっかけとなった。その後1963年、精神遅滞と精神疾患に関する疾患群への国家施策上での重要性を米国議会に訴え、初めて mental disability という言葉が使用された。この考えは1963年の母子健康に関するアメリカ公法を経て、以後の大統領に引き継がれ、アメリカ公法によって初めて世に出た。そしてこのアメリカ公法の中で「精神遅滞」が「発達障害」に、「臨床訓練」が「相互育成的訓練」に変わり、ここで初めて発達障害という言葉が公的に認知されることになった。そこでは発達障害は、「精神遅滞 mental retardation, 脳性麻痺 cerebral palsy, てんかん epilepsy, または精神遅滞と同様の状態にある個々人によって要求される治療・処置と同じ治療・処置を必要とし、保健・教育・福祉 (HEW) 長官によって認定された神経学的症状に限定した障害 disability を意味しており、その障害は18歳までに生じ、現在から将来にわたって本質的なハンディキャップを構成するものである」と定義されたとされる。

「発達障害の基礎」(1999) では以上のような歴史があった上で、発達障害という概念は原因論に基づいて作られたものではなく、子どもの頃に受けた障害が現在も継続して存在する子どもや成人の全てを含んでいたと説明している。そして、ここでは一時的な障害、リハビリテーションによって克服しうような障害、18歳以後に生じた障害、はっきりしない無力な障害などは含まれず、この用語は診断のためのものではなく、サービスを受ける適正を明確にするために用いられるものであった。

また、「発達障害の基礎」(1999) では日本における発達障害の概念も1970年のアメリカの公法に影響を受けたとし、以下のようにその歴史を説明している。それによると、1972年、発達障害という言葉を取り上げた愛知県の心身障害者コロニーの初代総長であった村上氏廣は、遺伝的、周産期、その後の環境の影響などによって脳障害を受けた精神遅滞や脳性麻痺などの心身障害を発達障害と述べたという。つまり発達障害を疾患や事故の後遺症、老化とは区別し、発生障害 (発育障害) と区別する概念と意識していたのである。

一方、同じ頃に医学領域でも特殊教育の領域に発達障害という概念が取り入れられた。そして研究の分野では1979年、「発達障害研究」(現日本発達障害学会機関誌) が刊行され、発達障害がはっきりと日本の歴史に入った。この頃の日本における発達障害の定義について松野 (1985) は「精神遅滞と同意語として用いられたこともあるし、精神遅滞および脳性麻痺、てんかん、自閉症ならびにその他の神経学的異常が原因で精神遅滞類似の障害をさす包括的な用語として用いられることもある。さらにもっと広く感覚障害、言語障害などの発達期に起こるいろいろの障害をさすこともある」と述べている。発達障害は多様な形態で現れる障害を総合的な体系でまとめる上で必要であるという考え方であった。

## B. 発達障害の概念

「発達障害の基礎」(1999) では、発達障害という言葉は一般的内容も含んでいたが、何が能力障害であるかを考える上で必要な言葉でもあったとし、それは正常の機構、能力、機能の発達に対する用語として捉えられ、発達遅滞、発達障害、発達能力障害などと表現されたと説明されている。そこで、疑われる機構に損傷はないが発達の期待に答えていない機能は「遅滞 delay」であり、機構の損傷に見合った機能の障害であれば「疾病 disorder」とされた。そして同時に遅滞であれ損傷であれ、それが人生を

通して続くならばそれは発達性の能力障害 disability と考えねばならず、発達障害はこのような概念として作られてきたと説明が加えられている。初めは疾病概念としてスタートをしたが、次第に発達障害は医学モデルから外れ、社会と個人の関係という障害モデルへと進むこととなったのである。

### C. ICD-10 (国際疾病分類第10版)の発達障害の定義

ICD-10 (2006) における発達障害は、心理的発達の障害として、「会話および言語の特異的発達障害」「学力[学習能力]の特異的発達障害」「運動機能の特異的発達障害」「混合性特異的発達障害」「広汎性発達障害」「他の心理的発達障害」「特定不能の心理的発達障害」とされている。そしてそれとは別に小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害として「多動性障害」「チック障害」が設定されている。

### D. 発達障害者支援法における発達障害

2004年12月に成立し、2005年4月に施行された発達障害者に対する支援を定めた法律である発達障害者支援法の中で第二条の定義文では発達障害は、「この法律において「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう」と定義されている。

### E. 本論文における「発達障害」の定義

本論文では偉人たちに発達障害傾向があるかどうかの鑑別をする際に用いる定義として、DSM-5 (2014) の「神経発達症群/神経発達障害群」の中から、「知的能力障害群」、「コミュニケーション症群/コミュニケーション障害群」、「運動障群/運動障害群」「他の神経発達症群/他の神経発達障害群」を除いた「自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害」、「注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害」、「限

局性学習症/極限性学習障害」を「発達障害」とする。また、本論文では発達障害傾向を調べることを目的とするため、「自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害」と「反応性アタッチメント障害/反応性愛着障害」、「注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害」と「脱抑制型対人交流障害」とを鑑別する。

### 3. サヴァン症候群について

Treffert (1990) によれば、サヴァン症候群は極めてまれな症状であり、「その障害とはあまりにも対照的に、驚異的な能力・偉才の孤島を有する」ものであるという。そしてその能力が現われる分野は限られており、計算や美術、暗記などの分野に現われる。また、現われ方にも、先天的なものや後天的なものなど幅がある。

本研究で取り上げる偉人たちはそれぞれの科目・分野で様々な業績を挙げ、後世に名を残した人物たちである。そういった偉人たちはそれぞれの分野に傑出した才能を持っていたのだと言えるだろう。こうした一般的に天才と言われているような人物の逸話として、幼い頃からずば抜けた能力を見せていたなどという話を耳にする。それは時に秀才や頭脳明晰、天才という言葉で納めて良いのだろうかという能力であったりするのではないだろうか。偉人たちがサヴァンの出現しやすい低い知能指数であったり、重度の知的障害や自閉症だった可能性は低い。しかし、美術や音楽・数学の科目での傑出した才能は、サヴァン症候群の人が持つサヴァンスキルに近いものであった可能性は無いのだろうか。天才と言われていても、何にも精通するような万能人であったということはないであろうと考えられる。そういった場合、その特定の分野に傑出した能力部分と言うのは何なのかを考えるために、サヴァン症候群・サヴァンスキルという概念についてを考えたいと思う。知的発達の遅れや重度のコミュニケーション能力の障害などがあるにも関わらず、その知的能力からは考えられないほどの優れた特異な能力を発揮することを「サヴァン症候群 savant



syndrome」という。Treffert (1989) によれば、サヴァン症候群は一般的に「全般的な知的障害を示す一方で、記憶、数学、芸術などの特定の領域で並はずれた能力・スキルを示す人」と定義される。サヴァン症候群の人は自閉症児者に多く、自閉症児者の10人に1人の割合で生じるとされる (Pring, 2005)。さらに脳損傷患者または知的障害者の2,000人に1人の割合で見られ、サヴァンと判明した患者のうち少なくとも半数が自閉症、残りの半分にも他の発達障害が見られる (Treffert & Wallace, 2002)。

#### A. サヴァンスキルの区分

Treffert (1990) は、サヴァンの技能を「天分のあるサヴァン」と「奇才のサヴァン」に分類した。「天分のあるサヴァン」とはその人の持っているサヴァンの技能が「当人の障害にひきくらべればすばらしい程度」のものであり、正常な人が持っていても見事とまではいえないようなものを言う。「奇才のサヴァン」とはその能力や偉才が「障害と比較して驚異的というだけではなく、通常の人間にそなわっていたとしても驚異的」なものを言い、この例はめったに見られないとした。

また、TreffertとWallace (2002) は、サヴァンスキルを①世界的にその分野において高く評価される能力を発揮している人を意味し、世界的に見ても傑出したスキルを有する“prodigious savant”，②その人の全般的な能力の中で音楽や美術、計算などある特定の領域で突出したスキルがあることを意味する“talented skill”，③特定の出来事（音楽やスポーツなど）について特異的記憶を有する“splinter skill”の三つに分けた。

#### B. 本論文におけるサヴァンの扱いについて

1877年にジョン・ラングドン・ダウンが「白痴のサヴァン idiot savant」として定義した時には知能指数25以下とされていたサヴァン症候群も、(Treffert & Wallace, 2002) によれば、現在では知能指数40～70の人に見られること

が明らかにされている。しかし例外的に知能指数114という人もいる。研究方法で挙げるが、本研究で対象となる人物を選ぶ際に使用した条件では、必ずしも社会的なコミュニケーションが必要であるとは言い切れないが、そういったものが必要とされるようなものが多いと思われる。そのため、前述したが、研究で使用した人物がサヴァン症候群が多いとされる重度の自閉症であったり、知的発達の遅れや重度のコミュニケーション障害をもっているようなサヴァン症候群であったことは考えづらい。

しかし、重度の障害を持っていないとも「天才」という語だけでは説明がつかないような Treffert & Wallace (2002) が主張した“prodigious savant”や“talented skill”のようなものを持っていた人物はいないのだろうか。また、アイランドの「特定の能力にかたよる傾向は、正常な知能の人あるいは天才の場合でも見られ、ときには全体的な能力の調和をくずすことさえある」という意見のようにサヴァン症候群と言えないまでもバランスを崩すような異様な能力の偏りを見せる人物はいないのだろうか。

本研究では、「頭脳明晰」や「天才」では説明できないような、あくまでもサヴァンスキルの傾向と見られるようなものがあつた場合にサヴァンスキル的な能力の傾向と判別をしたいと思う。

#### 4. パトグラフィーにおける発達障害研究

精神分析的な内容や精神病を扱ったパトグラフィー研究が多い中で発達障害はパトグラフィー研究としてどのように研究されてきたのであろうか。

天才と発達障害を扱ったものとして、岡南 (2011) の『天才と発達障害 映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル』という本がある。この本の中では視覚優位で映像思考のガウディをノートのスペル違いの多さや書字のあいまいさ・言語表現の少なさなどから軽度のディスレクシア (読み書き障害)、他者の気持ちに疎いエピソードからアスペルガー症候群的

傾向であったのではと考察し、ルイス・キャロルは聴覚優位であり、言語感覚に優れていたが吃音障害があったこと、数字をはじめとしたいくつものこだわり・収集癖があったこと、歩き方の異様さ、癲癇持ちということからアスペルガー症候群的要素があったことを考察している。

また、正高信男（2009）の『天才脳は「発達障害」から生まれる』では織田信長・葛飾北斎・南方熊楠・野口英世・中内功の5人の人物を、それぞれの抱えていた困難から脳の機能に障害があったのではないかという視点でパトグラフィー研究を行っている。同じく正高（2004）の『天才はなぜ生まれるか』という本では、トーマス・エジソン、アルベルト・アインシュタイン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ハンス・クリスティアン・アンデルセン、アレクサンダー・グラハム・ベル、ウォルト・ディズニーの個性と独創性に注目してパトグラフィーを行い、障害と創造性についてを考察している。

これらの発達障害と天才や偉人を結びつけた研究で共通して主張されている事は、障害のマイナス面を捉えるのではなく「障害があったからこそ」の功績があったということ、そして障害があったからこそその個性や発想というものが、「障害の強み（strength）」があるということ、現代の一般的な学校での教育は発達障害を持つ子どもにとってその才能が生かしきれずに学習しづらい現状があるということである。

## 5. 問題と目的

以上見てきたように、特定の分野で業績や功績を残した人物、天才として名が知られているような人物を対象とした今までのパトグラフィー研究は、その人物の個性としての病理や創造性、病理性と才能の研究などが検討されたものであった。そしてそれらの多くは精神病圏の研究が多い。しかしそのような研究では、何を持ってどこからを天才とするのかなどの「天才」という定義もあいまいであり、また、対象となる人物を複数の分野から定義づけを行って選考したり発達障害という一つの視点から多人

数を見たものは見当たらない。

発達障害は今、その増加が叫ばれていたり障害のスペクトラムや多様化など注目される問題である。そのことは発達障害に関する先行研究が、臨床研究としての薬物治療の報告から、発達障害のある子どもに関わる教師や親たちの問題の研究、特別支援教育の在り方についての研究、発達障害の当事者研究に至るまで多岐にわたり数え切れないほどたくさんの研究がなされていることから考えられる。

しかしこれだけ発達障害が注目される問題となり身近になったにも関わらず、注目されるのはそのマイナス面の方が大きいように感じられる。多くの先進国ではその子どもの能力や発達のでこぼこに合わせた特別な教育プログラムが存在する。例えば一例としてアメリカでは「2E（twice-exceptional）教育」というものがある。日本の教育はでこぼこの「ぼこ」の部分にばかり注目し、そこを補うことに力を注ぎ、「でこ」の部分への注目は外国に比べ少ないと考えられる。このことは障害のマイナス面にばかりとらわれ、その子どもの持っている個性や才能などを潰している可能性へとつながる。

しかし日本でも近年、「突出した能力」への注目がなされてきているような動きが出てきた。その一例として東京大学先端科学技術研究センターと日本財団が共同プロジェクトとして2014年に始めた異才発掘プロジェクト（Room Of Children with Kokorozashi and Extraordinary talents：ROCKET）が注目される。

以上のようなことを考えていくと、何かしらの分野で突出した才能を見せた過去の偉人たちの中には、発達障害傾向を持ちながらある分野で突出した部分を持っていた人物はいなかったのだろうかという疑問が浮かぶ。

そこで本研究では、条件を設けて定義づけを行い、複数の科目の分野から歴史的業績を残したといえるような研究の対象となる人物をリストアップし、その人物たちの発達障害傾向について検討したい。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象となる人物の選定

まず対象となる歴史的業績を残した人物の選定には、高校の各科目の10科目の教科書（数学・化学・科学・物理・生物・地学・倫理・国語・美術・音楽）を使用し、そこから、①印刷技術のできた1445年から明治以前である1868年までの間（文字情報を集められる限りの歴史に属すると考えられる期間）に功績・業績を上げている事、②重要な定理・法則などを発見または残している人物であること、代表的な作品のある人物であること、文化的貢献をした人物であること、③各科目の教科書の～史という年表に名前が載っていること、④日本語で読める状態のものとして自伝・または伝記・伝文があり、生育暦の調べられる人物であること、という4つの条件に当てはまる人物を対象とする人物とした。また、その際に対象となる人物は年代をまたいでいても1868年に20歳以上であれば対象の人物とした。また、本研究では分野ごとの偏りがあるのかなどを見るために複数の科目から人物をリストアップするが、「出来事ではなく業績を見る」ということで日本史・世界史・政治経済は外した。

### 2. 鑑別診断

選定をした人物たちの可能な限りの文字情報（伝記・自伝・伝文）を集め、成育歴をまとめた資料を作り、その資料を基にゼミの時間中に担当教員及び博士課程後期の大学院生を含む2名以上の人物によってDSM-5の診断基準に基づいて鑑別診断を行い、発達障害の可能性の抽出を試みた。

その後、さらに発達障害だったのではないかと鑑別をした人物たちについてその共通点を探る作業を行った。

## Ⅲ. 仮説

歴史的に業績を残した人物の中には発達障害の人物がいるのではないかと。そして、発達障害傾向による突出した部分が業績につながる可能性を考慮すると、数学・化学・科学・物理・生物・地学・倫理・国語・美術・音楽の10科目の中でも、①自閉症スペクトラムの人物には数字にこだわる人物が多いといったことから数学・化学・科学・物理には発達障害傾向の人物がいるのではないかと、②サヴァンスキルでは美術や音楽の才能現れやすいことを考えると、突出した才能として美術や音楽の才能を持っていた人物は発達障害傾向を持っているのではないかと、③言語的な能力が主となる国語と倫理には発達障害の人物はいないのではないかと、という3つが考えられる。

## Ⅳ. 結果

### 1. 量的視点から見た結果

今回の研究の結果では、科目ごとで発達障害があると鑑別をできた人物の割合は、数学10%、化学16.7%、科学14.3%、物理0%、生物0%、地学14.3%、倫理0%、国語0%、美術20%、音楽0%であった。詳細は以下で示す。

また、全科目の人物の中で発達障害と鑑別をした人物の割合は、89人中6人で6.7%という結果となった。障害ごとの割合としては、今回発達障害とした「自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害」、「注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害」、「限局性学習症/極限性学習障害」の3つそれぞれで、全体の中で自閉スペクトラム症が33.3%、注意欠如・多動症が50%、限局性学習症が16.7%であった。

さらに発達障害と鑑別をした6人のうち、外国人が5人、日本人が1人と、伝記や自伝を残すかどうかという文化の違いもあると考えられるが、外国人の方が多いという結果になった。今回の研究では鑑別を「健常」「発達障害」「発

達障害以外の何かしらの障害・病気」「鑑別不能」「鑑別はつかないが何かしら健常とは言い難い例外」の5つに分けたが、それぞれの割合は、健常が89人中31人で34.8%、発達障害が89人中6人で6.7%、発達障害以外の何かしらの障害・病気が89人中21人で23.6%、鑑別不能が89人中28人で31.5%、例外が89人中3人で3.4%という結果であった。

## 2. 発達障害の人物の分布

今回の研究で対象となった人物は、数学10人、化学6人、科学7人、物理3人、生物2人、地学7人、倫理27人、国語8人、美術10人、音楽9人の計89人であった。

そのうち発達障害があると鑑別のできた人物は、数学1人、化学1人、科学1人、物理0人、生物0人、地学1人、倫理0人、国語0人、美術

2人、音楽0人の計6人であった。また、生涯や業績は分かるものの、幼少期の記述や人となり分かるような記述が資料に十分に無い人物は鑑別が不能ということで除外とし、その人数は、数学6人、化学0人、科学0人、物理1人、生物1人、地学0人、倫理10人、国語6人、美術1人、音楽3人の計28人であった。

これらの人物の分布の仕方は、数学や化学・科学・物理といった理数系科目と美術や音楽に発達障害があり、国語や倫理といった言語的な能力が主となるような科目にはいないのではないだろうかという仮説にはほぼ当てはまる形になったと言えるだろう。

## 3. 状態・鑑別の詳細

各科目における鑑別の結果は以下の通りである。

表1 数学

名前	鑑別
Cardano, G. (1501~1576)	記述が少なく鑑別不能
Fermat, P. (1601~1665)	記述が少なく鑑別不能
関孝和(1642?~1708)	記述が少なく鑑別不能
Euler, L. (1707~1813)	記述が少なく鑑別不能
Fourier, J. (1768~1830)	記述が少なく鑑別不能
Gauss, C. (1777~1855)	健常
Babbage, C. (1791~1871)	記述が少なく鑑別不能
Abel, N. (1802~1829)	自閉スペクトラム症疑い
Hamilton, W. R. (1805~1865)	うつ病傾向、アルコール依存症
Riemann, B. (1826~1866)	健常

表2 化学

名前	鑑別
Boyle, R. (1627~1691)	神経症・心身症傾向
Lavoisier, A. (1743~1794)	健常
Volt, A. (1745~1827)	注意欠如・多動症
Pasteur, L. (1822~1895)	一時的な適応障害
Nobel, A. (1833~1896)	うつ病傾向
Rutherford, E. (1871~1937)	健常

表3 科学

名前	鑑別
Gutenberg, J. (1400?~1468)	健常
Leibniz, G. (1646~1716)	健常
Franklin, B (1706~1790)	健常
Lamarck, J-B (1744~1829)	一時的な神経症的傾向
Faraday, M. (1791~1867)	健常
Mendel, G. (1822~1884)	神経症・心身症的
Edison, T. (1847~1931)	注意欠如・多動症



表4 物理

名前	鑑別
Hooke, R. (1635~1703)	記述が少なく鑑別不能
Watt, J. (1736~1819)	鑑別はできないがサヴェンのスキルの可能性あり
Foucault, J. (1819~1868)	適応不全

表5 生物

名前	鑑別
Harvey, W. (1578~1657)	記述が少なく鑑別不能
Leeuwenhoek, A. (1632~1723)	精神病または強迫性障害

表6 地学

名前	鑑別
Copernicus, N. (1473~1543)	健常
Galilei, G. (1564~1642)	健常
Kepler, J. (1571~1630)	うつ病傾向
Steno, N. (1638~1686)	健常
Newton, I. (1642~1727)	反応性愛着障害
Smith, W. (1769~1839)	健常
Darwin, C. (1809~1882)	限局性学習障害

表7 倫理

名前	鑑別
Erasmus, D. (1469~1536)	健常
Luther, M. (1483~1546)	強迫神経症
千利休 (1522~1591)	記述が少なく鑑別不能
Montaigne, M. (1533~1592)	健常
藤原惺窩 (1561~1619)	記述が少なく鑑別不能
林羅山 (1583~1657)	健常
Descartes, R. (1596~1650)	反応性愛着障害傾向
中江藤樹 (1608~1648)	健常
熊沢蕃山 (1619~1691)	記述が少なく鑑別不能
山鹿素行 (1622~1685)	記述が少なく鑑別不能
Pascal, B. (1623~1662)	健常
伊藤仁斎 (1627~1705)	記述が少なく鑑別不能
松尾芭蕉 (1644~1694)	記述が少なく鑑別不能
Leibniz, G. (1646~1716)	記述が少なく鑑別不能
石田梅岩 (1685~1744)	うつ病傾向
賀茂真淵 (1697~1769)	記述が少なく鑑別不能
Rousseau, J.-J. (1712~1778)	鑑別はできないが倒錯の様子がみられる
Kant, I. (1724~1804)	健常
本居宣長 (1730~1801)	健常
杉田玄白 (1733~1817)	健常
Hegel, G. (1770~1831)	記述が少なく鑑別不能
平田篤胤 (1776~1843)	記述が少なく鑑別不能
二宮尊徳 (1787) 1856)	PTSD傾向
佐久間象山 (1811~1864)	健常
Marx, K. (1818~1883)	愛着性障害
吉田松陰 (1830~1859)	強迫神経症
福沢諭吉 (1835~1901)	鑑別はできないが現実検討の低さがみられる

表8 国語

名前	鑑別
契沖 (1640~1701)	記述が少なく鑑別不能
井原西鶴 (1642~1693)	記述が少なく鑑別不能
向井去来 (1651~1704)	記述が少なく鑑別不能
近松門左衛門 (1653~1725)	記述が少なく鑑別不能
与謝蕪村 (1716~1784)	記述が少なく鑑別不能
小林一茶 (1763~1828)	反応性愛着障害による行動障害
十返舎一九 (1765~1831)	記述が少なく鑑別不能
柳亭種彦 (1783~1842)	健常

表9 美術

名前	鑑別
Leonardo da Vinci (1452~1519)	自閉スペクトラム症
Michelangelo, B (1475~1567)	健常
長谷川等伯 (1539~1610)	記述が少なく鑑別不能
狩野永徳 (1543~1590)	過剰適応
伊藤若冲 (1716~1800)	健常
池大雅 (1723~1776)	健常
葛飾北斎 (1760~1849)	注意欠如・多動症
Constable, J. (1776~1837)	健常
渡辺崋山 (1793~1841)	ストレス障害の疑い
Morris, W. (1834~1896)	健常

表10 音楽

名前	鑑別
Bach, J. (1685~1750)	健常
Haydn, J. (1732~1809)	健常
Mozart, W. (1756~1791)	神経症
Beethoven, L. (1770~1827)	統合失調型パーソナリティ障害
Schubert, F. (1797~1828)	健常
Mendelssohn, F. (1809~1847)	記述が少なく鑑別不能
Chopin, F. (1810~1849)	記述が少なく鑑別不能
Smetana, F. (1824~1884)	健常
Dvořák, A. (1841~1904)	記述が少なく鑑別不能

#### 4. 発達障害だと鑑別をした人物のDSM-5鑑別内訳について

本研究で発達障害だと鑑別をした人物の、鑑別理由に繋がるような部分だと思われる自伝や伝記内での主な記述部分とそれに対応すると思われるDSM-5内での鑑別に用いた定義を以下に示す。

##### A. ニールス・ヘンリック・アーベル (数学)の鑑別

ニールス・ヘンリック・アーベルの鑑別は自

閉スペクトラム症とした。アーベルに関する資料の記述の中から主に以下の5点に注目をし、それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①あまりの数学に対する偏愛で、他の科目の宿題をなおざりにすることもあった：自閉スペクトラム症B- (3)
- ②句読点の使い方は下手であり、人に「まったく句読点を使わない」と冗談で言われるほどであった：限局性学習障害A- (4)
- ③あまりにも多くのアイデアを持っていた

ので、大学の教授たちの講義についてすべての注意を常に注いでいることはできなかった：自閉スペクトラム症A—(1)

- ④それにもかかわらず数学の試験では素晴らしい成績を取った：自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑤昼夜逆転をして夜に何時間も極度に働いたり疲労の中で苦しい仕事を続けたり日中早くにベッドに横になったりしていた：自閉スペクトラム症B—(4)

#### B. アレッサンドロ・ボルタ (化学) の鑑別

アレッサンドロ・ボルタの鑑別は注意欠如・多動症とした。ボルタに関する資料の記述の中から主に以下の4点に注目し、それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①4歳まで言葉がしゃべれなかった：限局性学習障害A—(1)
- ②7歳の頃に泉で砂金探しをしていて溺れかける、自分の家で絹や羊毛・松やに硫黄など手当たり次第のものを使って実験をする、細長い棒を絶縁体にしようと思いフライパンで炒めるなど、両親に心配をかけることもあった：注意欠如・多動症A—(2)—(c)(d)(e)
- ③ガットーニの実験室で様々な実験をし、ヨーロッパの名高い電気物理学者たちに片っ端から手紙を書き、多くの科学者と友達になっていった：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ④ボルタはよく劇場に行つて人に会い、気分転換をした。そんな折、劇場でマリアンナという女性を見て恋に落ちる。一旦恋に落ちたボルタはマリアンナの声、顔、演技や歌に魅了されており、マリアンナの事を考えると実験も報告も家の用事も手につかず、しばらくは気体や電気の事も忘れてしまうほどの状態になった：注意欠如・多動症A—(1)—(a)(d)

#### C. トーマス・エジソン (科学) の鑑別

トーマス・エジソンの鑑別は、注意欠如・多動症とした。エジソンに関する資料の記述の中から主に以下の8点に注目し、それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①小さい頃から放浪癖のあったエジソンはその折に探検と称して出かけてなかなか帰ってこず、家族を心配させたりしていた：注意欠如・多動症A—(2)—(d)(e)
- ②少年時代のエジソンは好奇心が強く、質問を次から次へと繰り返出し、どんなガラクタでも大切にしまい込む少年であった：注意欠如・多動症A—(2)—(f)
- ③幼いころから鋭い観察眼と優れた記憶力を持っており、そういったことを示すエピソードはたくさん残っている(例：寝室の窓から何時間も馬車の行列を観察する、木こりの歌を覚える、村中の商店の看板を精巧に模したなど)：自閉スペクトラム症B—(3)
- ④現象を究明しようとするあまりに、蜂の巣を調べようとして牧草地に入り雄羊に追いかけてまわされたり、スケート靴の紐を短くしようとして誤って中指の先端部分を切り落としたり、鳥が空を飛べるのはミミズを食べるからだと思い込み、ミミズをすりつぶした液体を近所の女の子に飲ませて鞭で叩かれたりといった失敗も多くやっていた：注意欠如・多動症A—(1)—(a), A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症A—(1)
- ⑤学校でのエジソンは注意力散漫で空想にふけるところがあり、いつも上の空で気が利かず、授業中に居眠りをしたり単純な課題をさぼってノートにいたずら書きをしたりしており、勉強向きの子どもではなかった：注意欠如・多動症A—(1)—(b)(c)(d)(f)
- ⑥少しでも時間があれば眠れる居眠りの達人であったエジソンは電信機の連絡を逃してしまい、「けん責」処分を受ける：注意欠如・多動症A—(1)—(a)(b)(d)

- ⑦生活が安定すると再び旅に出たくなる：注意欠如・多動症A— (2) — (e)
- ⑧次から次へと勤務先を変えた：注意欠如・多動症A— (2) — (e)

D. チャールズ・ダーウィン（地学）の鑑別  
チャールズ・ダーウィンの鑑別は限局性学習障害，自閉傾向の疑いとした。ダーウィンに関する資料の記述の中から主に以下の7点に注目をし，それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①幼かったころは長い時間一人歩きをするのが大好きだった：自閉スペクトラム症A— (3)
- ②物思いにふけることも好きだった：自閉スペクトラム症A— (3)
- ③学校に通う頃にはすっかり博物好き・収集好きになっており，イギリスの田舎を歩き回っては植物の名前表を作ろうとしたり貝殻や封筒のシール・貨幣・鉱物など何でも集めていた：自閉スペクトラム症B— (3)
- ④集めたものには色々な思いを巡らし，名前を調べて一つ一つにラベルを貼っていた：自閉スペクトラム症B— (3)
- ⑤一生の間でどんな言語もマスターすることができず，学校で作詩法に特別な注意が払われていたがそれが苦手であり，時には友達に手伝ってもらって題目を作っていた：限局性学習障害A— (3) (4)
- ⑥前日の課題を暗記することは得意で，その他の課題のホメロスなどの詩の40・50行程度ならば朝の礼拝の間にたやすくできた。しかし，覚えた詩はどんな詩でも丸二日の間には忘れてしまった：限局性学習障害A— (2)，サヴァン・スキルの可能性
- ⑦いくつかのギリシア文字に至るまで前に覚えたことをほとんど全て忘れてしまっており，家庭教師について勉強をして通例の10月ではなく1828年の初めに入学：限局性学習障害A— (3) (4)

E. レオナルド・ダ・ヴィンチ（美術）の鑑別  
レオナルド・ダ・ヴィンチの鑑別は自閉スペクトラム症とした。レオナルドに関する資料の記述の中から主に以下の11点に注目をし，それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①動物に強い親近感を持っていた：自閉スペクトラム症B— (3)
- ②子ども時代人を驚かすために箱に入れてトカゲを飼っていた。そしてこのトカゲに翼や角やひげなどを水銀でできた合金でくっつけていた：鑑別不能だが奇異な行動
- ③書く字は鏡像文字であり，右から左へと逆に鏡文字として書かれていた：限局性学習障害A— (3)
- ④絞首刑として処刑されたベルナルド・ディ・バンディーノ・バロンチェッリのつるされた死体をその場でスケッチし，着ていた服などについての細かい記載をしている：自閉スペクトラム症A— (1)
- ⑤「最後の晩餐」作成時には，日の出から黄昏の時間まで筆を持ったまま黙然と座っていたかと思えば，寝食を忘れて描き続けたり，また3・4日壁画に触れずにただ熟考・観察をしていたかと思えば人体相互の姿体を調べては合点して何時間も時を過ごした。時には1・2筆描き加えたかと思うとどこかに急ぎ足で立ち去ったりもしていた：鑑別不能だが奇異な行動
- ⑥「鏡に映っているように描きだすこと」が最も優れた表現方法であるとしていた：自閉スペクトラム症B— (2)
- ⑦解剖の際には蠟燭の火のもとで人間の目を解剖したり，死体と同じ部屋で平然と過ごしたりしていたという：自閉スペクトラム症A— (1)，B— (3)
- ⑧徒弟に使った衣服代・徒弟が盗んだ金額などを全てノートに記録していた：自閉スペクトラム症B— (2)
- ⑨メモ書きには買おうと思っている書物の名前の一覧やそれを丹念に集めたり，単語帳の様なものも書かれていたりした。手稿の

大半は自然観察のメモであり、科学上の実験、論証、断想の類、絵画・彫刻などに関する理論的・技術的論述である。身近なメモや日常生活に関する記録は甚だ稀であった：自閉スペクトラム症B—(2)(3)

- ⑩ノートは大量にあり、その手稿の中ではレオナルドは自身の内面（感情）についてや身内、女性のことはほとんど語っていない。しかし、気になったことや大事なこと、親の死んだ時刻などについて書く文の時は、同じ文面を2回書くという癖がある：自閉スペクトラム症A—(1)
- ⑪若い時期から水や風に対する興味が強く、絵で描いてみたり飛行機を考えてみたりとしていた。その水に対する関心の強さから水流の変化を克明に描いたスケッチを何枚も残している：自閉スペクトラム症B—(3)

#### F. 葛飾北斎（美術）の鑑別

葛飾北斎の鑑別は注意欠如・多動症とした。北斎に関する資料の記述の中から主に以下の10点に注目をし、それぞれの事柄に対して鑑別を以下の表のように行った。

- ①酒も煙草も茶も嗜まず、菓子の類は好きだが日々の食事に関心はなく、破れた衣服もいとわず、ただひたすらに絵を描く人物だった：自閉スペクトラム症B—(3)
- ②四方を駆け回り、暇があれば貸本の挿図を見て絵の勉強をしていた：注意欠如・多動症A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症B—(3)
- ③春朗期約15年間に残した作品は浮世絵版画約200点以上、挿絵本約50種類以上、絵暦など膨大な数がある：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ④50歳を過ぎたころからは種々の鳥を画題とする作品を多く手掛けているが、その大半は通常の絵師が好んだ華麗な鳥類ではなく、鷲や鷹などの猛禽類であった：鑑別不能だが奇異な行動
- ⑤自ら調合した漢方薬（柚子と極上の酒を煮

詰めて白湯で割ったもの）によって回復した。また、北斎は長寿の薬というものも調合している（龍眼肉、砂糖、焼酎を壺に入れて60日間置いたもの）：鑑別不能だが奇異な行動

- ⑥引く波と寄せる波の違い、波の表と裏側の相違などまで追求をした。また、色々な滝を描き、落下する水の表現にこだわった：自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑦常に作画への執念を燃やし続けた人生を送り、読本挿絵・絵手本・錦絵・肉筆画など様々な分野で役者・美人・風景・古典など様々な題材に目を向け、和・漢・洋の画法を広く学んで飽くなき探究心で自己の画風完成を追い求めた：注意欠如・多動症A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑧立ち止まることを知らず、一つの事に熱中し、あるレベルに達するとすぐに新たなジャンルに挑戦をする人物だった：注意欠如・多動症A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑨生涯の中で引越越しと改号を繰り返した。特に引越越しの回数はおびただしく、90年の生涯のなかで93回も転居をした。そのうち新宅を構えたのは一度のみであり、あとは借家住まいだった：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ⑩部屋の中は門人の描いた図によると、散らかし放題の室内に家財道具といえば炬燵や日蓮像を納めた蜜柑箱くらいという飾り気のない質素な暮らしだった：注意欠如・多動症A—(1)—(e)

#### 5. 鑑別した障害と定義ごとの個数

DSM-5における診断基準と照らし合わせてみたところ、自閉スペクトラム症ではB—(3)、注意欠如・多動症ではA—(2)—(e)の多さが特に目立ち、限局性学習障害に関しては目立って特に高い項目はないという結果となった。

特に自閉スペクトラム症のB—(3)の項目



は、診断名自体を自閉スペクトラム症としていない人物にも見られ、これは天才や偉人と言われるような人物の中で発達障害であった人物たちの要因として共通する所と考えることもできるかもしれない。

一方で、DSM-5の診断基準の中には該当しないようなものであっても、明らかに奇異な行動や突出した能力の高さを見せる人物もいたことも注目に値するのではないだろうか。これらの能力はDSM-5上では診断する項目は無いが、その人物のエピソードとしては、その人物の個性的な面や特性を表していると考えられる。

## V. 考 察

今回の研究では、歴史的に業績を残した人物の中にも発達障害の人物がいるのではないだろうかという仮説を立てたが、結果は89人中6人発達障害だと思われる人物がおり、仮説通りであったと言えるであろう。また、仮説では数学・化学・科学・物理の理系科目と美術・音楽に発達障害の人物がおり、国語と倫理にはいないのではないだろうかと想定した。この科目別の内訳に関しては、数学・化学・科学・美術に発達障害の人物が見られた他、物理と音楽には発達障害の人物はおらず、地学にも発達障害の人物が見られるという結果となった。この結果から、やはり発達障害の人物は理系と個性をそのまま突出させられるような美術に多く、言語的な能力が主となる倫理や国語といった科目には現れにくいのではないだろうかということが考えられる。

そして文部科学省が平成24年に実施した調査で通常の学級に6.5%の割合で発達障害の子どもがいるという結果が出ていたが、歴史的に業績を残すような偉人・天才の中にも発達障害の人物は一般の人達と同じようにいた。

また、その内訳を見てみると、DSM-5に記載されている発達障害のそれぞれの有病率を見ても、自閉スペクトラム症の有病率は

1%、注意欠如・多動症の有病率は2.5%、限局性学習障害の有病率は4%とされている。一方、本研究でのそれぞれの割合は、自閉スペクトラム症が2.2%、注意欠如・多動症が3.4%、限局性学習障害が1.1%であった。文系と理系の科目の発達障害人数の分布の違いを見ても、やはり言語的な能力が携わるものには発達障害はおらず、天才や偉人と言われるような功績を残した人物の中には、限局性学習障害を持った人物は一般よりも少ないと言えるであろう。しかしその一方で、自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症は一般よりも多少多い割合と出た。

また、今回の研究での発達障害の6人の障害の割合は、自閉スペクトラム症2人、注意欠如・多動症3人、限局性学習障害1人と注意欠如・多動症が一番多かった。しかし発達障害と鑑別をした人物6人の発達障害らしいエピソードをDSM-5の定義に当てはめてみると、注意欠如・多動症の人物にも自閉スペクトラム症のB—(3)という項目が見られ、この項目は今回発達障害とした人物の中で一番多い項目であった。このことから天才には何かしらの異常なこだわりや執着が見られるという共通点があると考えられ、直接鑑別名になる程度までいっていても、自閉的要因を多かれ少なかれ持っているのではないかということが考えられる。また、注意欠如・多動症のA—(2)—(e)という項目も続いて多く、このことからDSM-5内の項目では診断されない、注意欠如・多動症の動きの多さによる生産性の面が伺える。この二つの項目が目立って多かったことから、自閉症的な異常なこだわり・執着の部分を持ち、それを何かしらの分野に向けて研究などを行い、注意欠如・多動症的な行動の多さを生産性へとつなげられた人物が偉人や天才と言われるような人物になる可能性が高いのではないだろうか。当たり前と言えれば当たり前のことであると思われるかもしれないが、他の人物から一歩抜きん出た領域にまでいき、そこで業績を残せるほどにまでいけるというのも発達障害ならではのこだわりや生産性といった特性が

あったからだと考えられることもできるのではないだろうか。

しかし、その一方でDSM-5の診断基準に当てはまらないが明らかに奇異な行動・特出した能力を見せる人物もいた。アーベルの数学の能力やダーウィンの異常な記憶力の良さ、他にも発達障害ではなかった人物でも小さい頃からの異常な秀才ぶりなどがそれにあたると考えられる。これらはDSM-5の定義にはない「能力の高さ」という状態像があるということになる。発達障害を持つ人物の中で時として異様に高い記憶力や大人顔負けの専門知識を持っていたり、何かしらの突出した部分を持つ者が見られることは、先に述べた東大のROCKETプロジェクトなどで知られる所となっている。しかし、DSM-5上では障害を鑑別する項目はあっても、こうした能力の高さを説明・診断する項目は存在しない。この突出した能力の部分こそ、サヴァンのスキルの傾向なのではないだろうか。また、天才と言われるような人物に自閉的な傾向が多かれ少なかれ要素としてあったとすると、サヴァン症候群という診断がつくまでの状態で無くとも、自閉的な傾向のある人物にサヴァンスキルの能力が出現するのではないだろうかということも考えられる。サヴァン症候群やサヴァンの能力のカテゴリーはDSM-5には存在しない。しかし発達障害でありながら明らかに能力のでこぼこの「でこ」の部分の能力を示す人物は存在する。それにも関わらず、DSM-5上では能力のでこぼこの「ぼこ」の部分に注目をされ、それにだけ名前がつくのである。障害名がつくことで薄れがちになるこの能力の高さは本来その人物の個性であり、そこをどう扱うか・どう活かすかによってそれは障害のプラスの面にもつながり得ることは、今回の研究で見たような「ちょっと変わった人」であった人物たちの業績が示すのではないだろうか。こうした能力の突出した部分を正式に命名しようとする、恐らくどの程度まで突出していればいいのかなどという問題になってしまうと考えられる。そのため、能力の突出部分に名称を

付けることは必ずしも必要なことではないだろう。しかし、このようなDSM-5上の診断基準では測れない側面があり、そこに目を向けることも重要だと思われる。診断を付けるための項目で後ろに隠されてしまっているその能力自体が発達障害のプラスの側面となり得るのではないだろうか。発達障害の出現の仕方によって多様だとも言われる。しかし診断は項目に当てはめられて行われてしまう。そこで、全てを項目に当てはめてみるのではなく、その個人のマイナス面だけではないプラス面にも目を向け、その個人を見ていくことが、十人十色の能力を示す発達障害の新たな可能性となるのではないだろうか。

## VI. おわりに

本研究では歴史上で功績・業績を残し、現代に偉人や天才として名前が知られるような人物の発達障害傾向についてを研究した。

近年、教育現場や家庭など様々な場所で発達障害が問題とされ、その増加も指摘されている。それらは発達障害であることのマイナス面に多くの目が向いているからであると考えられる。現在では型にはまったような集団の中で過ごすことが多く、その中で「変わっている」ということがマイナスに捉えられることの方が多いのではないだろうか。そこで、本研究では発達障害であることのその特性や個性などプラス面に注目をしたいと考え、発達障害ならではの特性を活かしてプラスの業績へとつなげた「変わった人」というのはいなかったのだろうかということ想定した。

そこで人物を選定していったわけであるが、資料の集め方が甘かったと考えられ、それにより十分に鑑別・検討をできなかった人物もいたことが悔やまれる。

そして今回発達障害の鑑別をするためにDSM-5を使用した、DSM-5では能力のでこぼこの内、いわゆる「ぼこ」の部分しか測る項目が存在せず、発達障害であっても高い能力

を有していたり突出した能力があるような場合でも、それを測る項目は存在しない。発達障害であっても突出した能力を持っている事を経験上知っていたとしても、それは診断名という裏に隠されてしまい、薄い存在となってしまう。それは、その能力のアンバランスさこそがその個人の個性であったとしても、それを表せないことになってしまうのではないだろうか。また、DSM-5では、一つのエピソードを鑑別の項目に当てはめる際に、かなり主観的な印象などで鑑別を振り分けているのではないかという問題が今回の研究で考えさせられた所でもあった。今回複数人で鑑別を行った際に、そういったことが顕著に現れており、一つのエピソードに対しても複数の鑑別がつくということがあった。さらに、DSM-5では注意欠如・多動症の動きまわることによる行動の生産性などについての項目もなく、鑑別する際にみている面の偏りが感じられた。このようなことから、すべてをDSM-5に当てはめて考えるということは、個人個人でかなり幅のある発達障害の個人・個性を隠してしまうことにつながる懸念される。もちろんDSM-5による診断名も必要であるだろう。しかし、ただ診断名にとらわれるのではなく、必要なことは発達障害を持っていてもその個人のDSM-5の項目で鑑別されるような面だけではなく、特性や個性的な面、

それによって現れる可能性のあるプラスの面に目を向けることなのではないだろうか。現在、東大のプロジェクトやメディアで発達障害の子どもの特集が組まれるなど、その個性や特性に注目をする動きも出てきている。発達障害の人物のマイナスの面をできるだけ少なくしたり抑えたりしようとするのではなく、プラスの面に気づき伸ばしてあげることが必要になってくるのではないだろうか。

また、今回の研究は発達障害を主として研究したものであったが、その結果に付与して出てきた「発達障害以外の何かしらの障害・病気」という結果の人物が89人中21人おり、23.6%がそうであったということも注目に値するのではないだろうか。これは一般の人たちと比べて高い有病率であるといえるのではないだろうか。発達障害の人物を含めると3人に1人だけが健常ということになる。つまり、発達障害の割合は天才と言われるような人達と一般の人々で変わらなくても、何らかの障害・病気である率は天才と言われるような人達の方が高いと考えられる。今回の研究では発達障害を主として扱う内容であったため、これについての詳しい考察はできないが、発達障害の病理性だけでなく、精神病などの病理性も天才と言われるようになる業績に何かしら関与している可能性も考えられる。

## 文献

- 阿部喜三男 (1986). 人物叢書71 松尾芭蕉. 吉川弘文館.
- Aczel, A. D. (2004). *Pendulum: Leon Foucault and the Triumph of Science*. 水谷 淳 (訳) (2005). *フーコーの振り子 科学を勝利に導いた世紀の大実験*. 早川書房.
- Adamczewski, J. (1974). *Nicolaus Copernicus and His Epok*. 小町真之・坂元 多 (訳) (1983). *コペルニクス*. 恒文社.
- 会田倉吉 (1974). 福沢諭吉. 吉川弘文館.
- 有馬正高 (1999). *発達障害の基礎*. 日本文化科学社.
- Baldwin, N. (1995). *Edison Inventing the Century*. 椿 正晴 (訳) (1997). *エジソン——20世紀を発明した男*. 三田出版会.
- Bardoe, C (文)・Smith, Jos A. (絵) (2006). *Gregor Mendel: The Friar Who Grew Peas*. 片岡英子 (訳) (2013). *グレゴール・メンデル～エンドウを育てた修道士*. BL出版.
- Bell, E.T. (1986). *Men of mathematics*. 田中 勇・銀林 浩 (訳) (2003). *数学をつくった人びとⅢ*. 早川書房.
- Birch, B. (1989). *Louis Pasteur*. 菊島伊久栄 (訳) (1992). *伝記 世界を変えた人々10 パストゥール 微生物の研究により、はじめて伝染病の原因をつきとめたフランスの科学者*. 偕成社.
- Bjerknes, C.A. (1885). *Gauthier-Villars*. 辻 雄一



- (訳) (1991). わが数学者アーベル. 現代数学社.
- Bouveresse, R. (1994). Leibniz. 橋本由美子 (訳) (1996). ライプニッツ. 白水社.
- Brown, P. (1993). Ludwig Van Beethoven (World's Greatest Composers). 橋高弓枝 (訳) (1998). 伝記 世界の作曲家④ ベートーベン. 偕成社.
- Cassirer, E. (1918). Kants Leben und Lehre. 門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文 (訳) (1986). カントの生涯と学説. みすず書房.
- Cardano, G. (1576). De vita propria. 清瀬 卓・澤井茂夫 (訳) (1995). カルダーノ自伝 ルネサンス万能人の生涯. 平凡社. *De vita propria*, 1576.
- Carson-Turner, B. (1995). Franz Schubert: the World's Greatest Composers. 橋高弓枝 (訳) (1998). 伝記 世界の作曲家⑤ シューベルト. 偕成社.
- 崔 善愛 (2010). ショパン. 岩波ジュニア新書.
- Cutler, A. (2003). The seashell on the mountaintop. 鈴木豊雄 (訳) (2005). なぜ貝の化石が山頂に? 地球に歴史を与えた男ニコラウス・ステノ. 図書印刷.
- Darwin, C. (2000). Barlow, N (編). 八杉龍一・江上生子 (訳). ダーウィン自伝. 筑摩書房.
- Delange, Y. (1984). Lamarck, sa vie, son oeuvre. Actes Sud. ベカエール直美 (訳) (1989). ラマルク伝——忘れられた進化論の先駆者. 平凡社.
- 童門冬二 (1998). 小林一茶. 毎日新聞社.
- Edelson, E. (1999). Gregor Mendel: And the Roots of Genetics (Oxford Portraits in Science). 西田美緒子 (訳) (2008). オックスフォード 科学の肖像 メンデル. 大月書店.
- 遠藤徹他 (2013). 高校音楽 I Music View. 教育出版.
- Franklin, B. (1791). Benjamin Franklin's Autobiography. 松本慎一・西川正身 (訳) (1982). フランクリン自伝. 岩波書店.
- 藤原正彦 (2002). 天才の栄光と挫折 数学者列伝. 新潮社.
- 福田歓一 (2012). ルソー. 岩波書店.
- 富永裕久 (1999). フェルマーの最終定理. ナツメ社.
- 古川 薫・岡田嘉夫 (2006). 佐久間象山 誇り高きサムライ・テクノクラート 時代を動かした人々. 小峰書店.
- 古川 治 (1966). 中江藤樹. 明德出版社.
- Gray, C. (1994). Johann Sebastian Bach (World's Great Composers). 秋山いつき (訳) (1998). 伝記 世界の作曲家② バッハ. 偕成社.
- 芳賀幸四郎 (1963). 千利休. 吉川弘文館.
- Hamann, B. (1990). Nichts als Musik im Kopf: Das Leben des Wolfgang Amadeus. Mozart. 池田香代子 (訳) (1991). 伝記 モーツァルト——その奇跡の生涯. 偕成社.
- 浜野卓也 (1998). おもしろくてやくにたつ子どもの伝記15 福沢諭吉. ポプラ社.
- Harvey, W. (1628). Exercitatio anatomica De motu cordis et sanguinis in animalibus. 暉峻義等 (訳) (1961). 動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究. 岩波書店.
- Heilbron, J.L. (2003). Ernest Rutherford And the Explosion of Atoms. 梨本治男 (訳) (2009). オックスフォード 科学の肖像 アーネスト・ラザフォード・原子の宇宙の核心へ. 大月書店.
- ひのまどか (1996). ハイドン——使い捨て作品と芸術作品. リブリオ出版.
- ひのまどか (2004). スメタナー音楽はチェコ人の命!. リブリオ出版.
- ひのまどか (2006). ショパン——わが心のポーランド. リブリオ出版.
- ひのまどか (2009). メンデルスゾーン——美しくも厳しき人生. リブリオ出版.
- 久松潜一 (1963). 契沖. 吉川弘文館.
- 平木幸二郎他 (2007). 倫理. 東京書籍.
- Honolka, K. (1974). Antonín Dvořák. 岡本和子 (訳) (1994). ドヴォルザーク. 音楽の友社.
- 堀 勇雄 (1959). 山鹿素行. 吉川弘文館.
- 堀 勇雄 (1964). 林羅山. 吉川弘文館.
- Huxley, R. (2007). The great naturalists. 植松靖夫 (訳) (2009). 西洋博物学者列伝——アリストテレスからダーウィンまで. 悠書館.
- 兵藤申一・福岡 登・高木賢志郎 (2006). 高等学校 物理 I 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 市古夏生・藤江峰夫 (1989). 江戸人物読本 井原西鶴. ぺりかん社.
- 一坂太郎 (2015). 吉田松陰——久坂玄瑞が祭り上げた「英雄」. 朝日新書.
- 伊狩 章 (1965). 柳亭種彦. 吉川弘文館.
- 伊馬春部 (1952). 芭蕉. 偕成社.
- 異才発掘プロジェクトROCKET (2015). 異才発掘プロジェクトROCKET. <https://rocket.tokyo/news/> (2015年12月2日取得)

- 石田一良 (1960). 伊藤仁斎. 吉川弘文館.
- 伊藤俊太郎・村上陽一郎 (1989). 科学の名著 第Ⅱ期8 (18) ボイル. 朝日出版社.
- Jacobs, R. (1977). Mendelssohn. 作田 清 (訳) (2010). メンデルスゾーン. 作品社.
- 片桐一男 (1971). 杉田玄白. 吉川弘文館.
- Kaulbach, F. (1888). Immanuel Kants Grundlegung zur Metaphysik der Sitten. 井上昌計 (訳) (1978). イマヌエル・カント. 理想社.
- 河竹繁俊 (1958). 近松門左衛門. 吉川弘文館.
- 木下長宏 (2013). ミケランジェロ. 中央公論新社.
- 小林計一郎 (1986). 小林一茶. 吉川弘文館.
- Koestler, A. (1959). The sleepwalkers: A History of Man's Changing Vision of the Universe. 小尾信彌・木村 博 (訳) (2008). ヨハネス・ケプラー 近代宇宙観の夜明け. 筑摩書房.
- 小町谷照彦他 (2006). 新編国語総合. 東京書籍.
- 近藤鋼三 (1984). ノーベル. ポプラ社.
- 神津朝夫 (2009). 茶の湯の歴史. 角川学芸出版.
- 杵掛良彦 (2014). 岩波現代全書032 エラスムス 人文主義の王者. 岩波書店.
- 黒田泰三 (2010). 長谷川等伯 生涯と作品. 東京美術.
- 桑田忠親・小和田哲男 (監修) (2011). 千利休. 宮帯出版
- Leslie, C.R. (1951). Memoirs of the life of John Constable: composed chiefly of his letters. Jonathan, M. (編). 斎藤泰三 (訳) (1989). コンスタブルの手紙——英国自然主義画家への追憶——. 彩流社.
- McLellan, D. (1974). Karl Marx: his life and thought. 杉原四郎 (訳) (1976). マルクス伝. ミネルヴァ書房.
- 正高信男 (2004). 天才はなぜ生まれるか. 筑摩書房.
- 正高信男 (2009). 天才脳は「発達障害」から生まれる. PHP 研究所.
- 松田時彦・山崎貞治他 (2006). 高等学校 地学 I 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 松永俊男 (1987). ダーウィンをめぐる人々. 朝日新聞社.
- 宮西正宜他 (2009). 高等学校 数学 A 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2009). 高等学校 数学 I 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2010). 高等学校 数学 B 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2010). 高等学校 数学 II 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2011). 高等学校 数学 C 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2011). 高等学校 数学 III 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮崎道生 (1995). 熊沢蕃山——人物・事績・思想. 新人物往来社.
- 文部科学省 (2012). 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm) (2015年12月2日取得)
- 村井康彦 (1990). 千利休追跡. 角川書店.
- 村田 全 (2008). 数学をきづいた人々. さ・え・ら書房.
- 永井一正他 (2009). 高校美術1. 日本文教出版.
- 永田生慈 (2005). アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品. 東京美術.
- 中川鶴太郎 (1991). ラヴォアジエ 人と思想101. 清水書院.
- 中島秀人 (1996). ロバート・フック ニュートンに消された男. 朝日新聞社.
- 中野 雄 (2006). モーツァルト 天才の秘密. 文藝春秋.
- 中村禎里 (1977). 血液循環の発見. 岩波書店.
- 中田 力 (2002). 天才は冬に生まれる. 光文社.
- 長澤源夫 (1993). 二宮尊徳のすべて. 新人物往来社.
- 奈良本辰也 (1985). 佐久間象山 人と思想48. 清水書院.
- 奈良本辰也 (1993). 二宮尊徳. 岩波書店.
- 成澤勝嗣 (2012). アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい狩野永徳と京狩野. 東京美術.
- Nicholl, C. (2004). Leonardo da Vinci: Flights of the Mind. 越川倫明・松浦弘明・阿部 毅・深田麻里亜・巖谷睦月・田代明甚 (訳) (2009) レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯 飛翔する精神の軌跡. 白水社
- 日経サイエンス編集部 (2002). 別冊日経サイエンス SIENTIFIC AMERICAN 日本版 脳から見た心の世界. 日経サイエンス社.
- 野田 章 (1969). 子どもの伝記全集・25 ニュートン. ポプラ社
- Novelli, L. (2008). Volta e l'anima dei robot. 関口英子 (訳) (2009). ボルタ 未来をつくった電池の発明 (天才!? 科学者シリーズ6). 岩崎

- 書店。
- 野添絹子 (2010). 2E教育の理念を英語の授業に活かすための基礎的調査——英文記憶における有効なストラテジーの検討——. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊18号-1 181-192.
- 相賀徹夫 (1988). 日本大百科全書19. 小学館.
- 小川鼎三 (1973). 杉田玄白. 国土社.
- 岡南 (2011). 天才と発達障害 映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル. 講談社.
- 大久保康明 (2007). モンテニユ 人と思想169. 清水書院.
- 小野二郎 (1973). ウィリアム・モリス. 中公新書.
- 大野進 (1991). ノーベル. 講談社.
- 太田昌孝 (2006). こころの科学セレクション 発達障害. 日本評論社.
- 太田青丘 (1985). 藤原惺窩. 吉川弘文館.
- 大谷晃一 (1996). 与謝蕪村. 河出書房新社.
- 大内初夫・若木太一 (1986). 俳諧の奉行 向井去来. 新典社.
- Paul de Kruif. (1959). *Microbe Hunters*. 秋元寿恵夫 (訳) (1980). 微生物の狩人 (上). 岩波書店.
- Rodis-L, G. (1995). *Decarte: biographie*. 飯塚勝久 (訳) (1998). デカルト伝. 未来社.
- Russell, C.A. (2000). *Michael Faraday: Physics and Faith (Oxford Portraits in Science Series)*. 須田康子 (訳) (2007). マイケル・ファラデー——科学をすべての人に (オックスフォード科学の肖像). 大月書店.
- 三枝康高 (1962). 賀茂真淵. 吉川弘文館.
- 齋藤孝 (2006). 齋藤孝の天才伝8 モーツァルト 人を幸せにする「無邪気力」. 大和書店.
- 桜井正信 (1982). 少年少女伝記読みもの 十返舎一九. さ・え・ら書房.
- 佐佐木杜太郎 (1978). 叢書・日本の思想家⑧ 山鹿素行. 明德出版社.
- 佐藤康宏 (2006). アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい伊藤若冲 生涯と作品. 東京美術.
- 佐藤昌介 (1986). 渡辺崋山. 吉川弘文館.
- 佐藤満彦 (2000). ガリレオの求職活動 ニュートンの家計簿. 中央公論新社
- 柴田実 (1964). 石田梅岩. 吉川弘文館.
- 下村寅太郎 (1983). ライブニッツ. みすず書房.
- 下中直人 (2007). 世界大百科事典. 平凡社.
- 白木茂 (1971). 児童伝記シリーズ41 ワット. 偕成社.
- 城塚登 (1997). ヘーゲル. 講談社.
- Specht, R. (1966). René Descartes. 中島盛夫 (訳) (1983). デカルト. 理想社.
- Steele, F. (2007). Isaac Newton: The Scientist Who Changed Everything. 赤尾秀子 (訳) (2008). ビジュアル版伝記シリーズ アイザック・ニュートン. BL出版.
- Steele, F. (2008). Galileo, The Genius Who Faced the Inquisition. 赤尾秀子 (訳) (2008). ビジュアル版伝記シリーズ ガリレオ. BL出版.
- 菅沼貞三 (1977). 池大雅 人と芸術. 二玄社.
- 裾分一弘 (1983). レオナルド・ダ・ヴィンチ——手稿による自伝. 中央公論美術出版.
- 鈴木健一 (2012). 林羅山——書を読みて未だ倦まず. ミネルヴァ書房.
- 鈴木喜代春・阿部誠一 (絵) (1995). 吉田松隆30年の生涯——わたしの人間発見. あすなろ書房.
- 高橋昌義 (2010). パスツール. 講談社.
- 田辺保 (1999). パスカル伝. 講談社.
- 高野敏夫 (1988). 本居宣長. 河出書房新社.
- 田原嗣郎 (1963). 平田篤胤. 吉川弘文館.
- 竹内均 (2002). 数学の天才列伝. ニュートンプレス.
- 田村三郎 (1989). フランス革命と数学者たち. 講談社.
- 田中康二 (2014). 本居宣長. 中央公論新社.
- 田中善信 (1996). 与謝蕪村. 吉川弘文館.
- 田中隆莊他 (2012). 高等学校 改訂 生物I. 第一学習社.
- 坪村宏・斎藤烈・山本隆一他 (2005). 高等学校 化学II. 新興出版社啓林館.
- 戸叶勝也 (1997). グーテンベルク 人と思想150. 清水書院.
- 徳善義和 (2012). マルティン・ルター——ことばに生きた改革者. 岩波書店.
- 融道男・中根充文・小見山実・岡崎祐士・大久保善朗 (2006). ICD-10 精神および行動の障害——臨床記述と診断ガイドライン——. 医学書院.
- Treffert, D. 高橋建次 (訳) (1990). なぜかれらは天才的能力を示すのか——サヴァン症候群の驚異. 草思社.
- 上田誠也・竹内敬人・松岡正剛他 (2003). 理科基礎 自然のすがた・科学の見方. 東京書籍.
- Wheen, F. (2001). Karl Marx: A Life. 田口俊樹 (訳) (2002). カール・マルクスの生涯. 朝日新聞社.
- Winchester, S. (2001). The Map That Changed The World: William Smith and the Birth of Modern Geology. 野中邦子 (訳) (2004). 世界を変

えた地図 ウィリアム・スミスと地質学の誕生. 早川書房.  
山田一枝 (1969). 子どもの伝記全集・24 ガリレオ. ポプラ社.  
山内志朗 (2003). シリーズ・哲学のエッセンス

ライプニッツ なぜ私は世界にひとりしかいないのか. NHK出版.  
吉永良正 (2011). 神が愛した天才数学者たち. 角川学芸出版.

# コラージュ作品に表現される母性イメージに 関する探索的研究（第1報） ——形式分析を中心に——

申 ジン ア

## 要 約

本研究は、妊娠や出産の経験のない青年期後期及び成人期の発達段階にいる未婚女性を対象に、母性をテーマとしたコラージュ制作を試み、コラージュ作品を通してどのような母性イメージが見られるのかについて調査を行った。なお、本稿においては、母性イメージを探るための第1歩としてコラージュ作品を通して表現された母性イメージの表現特徴を主な色彩、主な切り方、中心性の3つの形式的な側面に焦点を当てて、検討を行った。その結果、母性イメージとして表現されたと思われるいくつかの表現特徴を明らかにすることが出来た。主たる色彩においては、青、橙・白の順に多く使用され、これらの色彩の特徴と母性イメージとの関連可能性について考察を行った。主な切り方としては、一般的な大人の表現特徴と異なる楕円・円形の切り方の使用が多く見られ、母性イメージの表現特徴の一つとして明らかとなった。最後に、作品の中心に置かれた切り抜きを分析した結果、母性イメージの表現特徴と母性をテーマとした作品の台紙の中心には作品のキーワードとなる母性イメージや最も母性を感じる切り抜きが置かれやすい傾向が明らかとなった。

## I. 背 景

育児や子育てと関連されてよく使われていた「母性」という言葉は、今日一般的な日常用語としても頻繁に使われている。我々が最も接しやすい国語辞典における一般的な母性の定義をみると、広辞苑第6版（2008）は「母として持つ性質。また、母たるもの」と定義されており、日本国語大辞典（2001）では、「母性とは女性が母親として持つ性質、子どもを守り育てようとする母親の本能的な性質」と記されている。つまり、母性とは子どもを守り育てようとする、女性が生得的に持つ性質であると言える。しかし、その定義からは、母性がどのようなものなのか掴むには不明確で漠然と感じる。実際、大日向（1988）と石崎ら（1996）は、これらの母性に対する定義は、曖昧で不明確であり、漠然としているため各人各様の解釈の余地があると指摘している。また、松村（2005）も、母性概念の解釈が様々で、母性という用語に含まれる意味について統一した見解があるわけではないと述べている。このように、漠然で曖昧である定義の中から、母性をどのように認識しており、どのようなイメージを持って使っているのだろうか。一方、石崎ら（1996）は、心身症の発症には、小児期からの親子関係、特に母子関

\*臨床心理学研究科 博士課程（前期）



係が深い関わりを持つ可能性が指摘されているため、患者の母性性のイメージの把握が必要であると述べている。そうした側面からも、母性イメージにどのようなものがあるのかについて探ることは、臨床場面でクライアントの母性イメージを理解するための一つの手掛かりとして大事であると考えられる。

## Ⅱ. 問題

日本人を対象に行われた母性イメージに関するいくつかの調査（石崎ら、1996；寺田ら、1986）により、「やさしさ」、「愛情」、「あたたかさ」のような情緒的な抽象語や、受容と安心感を表すような言葉が連想されやすいことが分かった。しかし、どうやら我々の中に有する母性イメージにはそれらが全部ではないようである。心理療法の場面で表れる箱庭や夢、描画等、イメージを介して表現される母性イメージをみると、上述されているようなすぐ思い浮かぶイメージのみではなく、それとは程遠いと感じるイメージが母性イメージとして表現されることもある。その一つの例として、河合(2009)は、実際相談に来られた学校恐怖症の少年の事例を通して、少年の夢に表れた「渦」のイメージと母性イメージとの関連について述べている。勿論イメージは多くのことを集約しているため、その意味は極めて多義的である。よって、あるイメージに一義的なことは言い難い側面もある（河合、1991）。しかし、多義的であるからこそ、イメージを用いた表現によって言葉では表現しきれないイメージも得ることが出来ると考えられる。

しかし、実際母性イメージに関する先行研究には、イメージを媒介としたイメージ調査は少ない。いくつかの研究を見てみると、まず、1986年に寺田らは女性の発達段階に伴い、母性の捉え方に微妙なズレがあることに着目し、母性イメージの相違から母性意識を把握する手掛かりを得るため、女性の発達段階を代表とすると考えられる青年期女子47名、妊婦68名、3

歳児の母親91名の3群を対象に、母性から連想する言葉、または母性行動を表していると思われる言葉を記述してもらい言語連想法による母性イメージについて調査を行った。その結果、母性から連想される言葉として3群共に共通的に多く見られた言葉には、「やさしさ」、「愛情」、「あたたかさ」という順の情緒的な抽象語と、それに続いて「授乳」、「抱く」順の母性行動を表す言葉が見られた。また、3群の間における母性イメージの相違も見られ、母性発達段階または子どもの成長発達に則して漠然とした母性のイメージは具体的なものへと推移することが明らかとなった。

そして、この研究結果を基に、女性性の肯定と否定につながる文章への反応を見る質問紙と絵に表現されるイメージを知るための描画テストを用いた調査が青年期女子106名を対象に、翌年に行われた（寺田ら、1987）。その結果、質問紙の結果からは女性性ないしは母性イメージを肯定的に受け止めている回答が多くみられた。また、自分と子どもの絵を描いてもらう描画テストの結果からは、子どもを抱いている姿が多くみられた。この「抱く」イメージは、1986年の言語連想法を用いた調査でも多く見られた母性行動を表す言葉の1つであり、よって、「抱く」イメージは青年期女子における一般的な母性イメージとして考えられると考察している。

今関(1994)は、これらの調査結果から得られた、母親という言葉からイメージされる表現を基に、250項目の質問紙を構成した。そして、青年期女子の母性イメージの特徴を探ることを目的とし、作成した質問紙を用い、思春期女子の高校生147名、青年期女子の短大生145名、1歳から3歳児を持つ母親89名の3群を対象に調査を行い、高校生から短大生にかけて短期間に母性イメージが肯定的に発展し、短大生は肯定的反応の著明な時期であるという結果を得た。この結果から、性同一性の獲得期にある女子大学生は、母性を十分認識し、母性意識を備えていることが言えると共に、青年期女子の母性性

を採る他の先行研究と一致した結果を得たと述べている。

一方で、一般人と心身症患者との母性イメージに相違があることを明らかにした研究もある。石崎ら（1996）は、母子関係に問題を有する心身症の問題発見や病態把握の指標の開発を目指すための基礎的調査として、現代の日本人の持つ母性性のイメージを調査した。その結果、母性性のイメージとして最も多い回答として「やさしさ」であり、その他には「愛情」、「包み込む愛」、「温かさ」、「思いやり」、「微笑み」などの回答が多く得られ、この結果は1986年の寺田らの研究結果と共通してみられたと報告している。それに続き、同年に行われた石崎らの研究である「心身症患者の母性性イメージ」の研究では、心身症患者と健康であるとされる一般人とを対象に母性イメージを調査した結果、両群ともに母性性を女性性とは異なるイメージを持っている一方、心身症患者群と一般人群との間に母性イメージにおける相違点もいくつかあることが明らかとなった。その一つとして、一般人群には見られる年齢による母性イメージの傾向の違いが、心身症患者群には見られないことが分かった。一般人群には、年齢による社会的価値観の変化や育児経験により、高年齢になるにつれ母性イメージに対して「温かさ」「包容力」の回答が少なくなり、「厳しさ」「忍耐」の回答が多くなることに対して、心身症患者群においてはこのような傾向が見られなかったと報告している。これについて、心身症患者の心理的な背景として社会的価値観の変化に対処しきれない側面が母性イメージの年齢差が見られなかった一つの原因として考えられると考察しており、心身症患者と一般人の母性イメージは異なる部分があることが明らかにされた。

これらの研究から、母性イメージとして「優しさ」、「包み込む」のような情緒的な抽象語が多いこと、女性の発達段階に伴って母性イメージも変化すること、心身症患者と一般人との母性イメージに相違があることが明らかとなった

ことが分かる。しかし、これらの研究の調査方法は、性役割と関連のある質問項目で構成された質問紙を用いた調査と言語連想法であり、言葉を用いた調査が主に行われている。言葉の持つ意味は回答者により異なるイメージを持つ場合も考えられるし、同じ言葉でも違うイメージを抱いている可能性も考えられる。よって、母性イメージに関する研究として、絵画のように視覚的イメージの表現を用いた調査を試みることは意味を持つと考えられる。一方、描画テストを用いた寺田ら（1987）の研究は、現在の母子画に当たるものであり、回答者にとって最初から子育てや乳幼児を世話する母親の姿に限定されやすく、幅広い母性イメージを得ることは難しいと言えよう。よって、母性イメージを探るためには、より広い母性イメージが見られる方法が必要であろう。

そこで、本研究では、イメージ表現の一つであるコラージュ・アクティビティを用い、母性をテーマとしたコラージュ制作を試み、コラージュ作品を通してどのような母性イメージが見られるのか、母性イメージにどのような表現がなされるのかを明らかにしたい。なお、既に述べたように、母性イメージの先行研究により、母性イメージは育児経験や女性の発達段階によって異なることが明らかとなっている。よって、本研究では、調査対象者を妊娠や出産の経験のない成人期の発達段階にいる未婚女性に限定して調査を行う。

### Ⅲ. 目 的

妊娠や出産の経験のない青年期後期を含めた成人期の発達段階にいる未婚女性を対象に、母性をテーマとしたコラージュ制作を試み、コラージュ作品を通してどのような母性イメージが見られるのか、また、母性イメージにどのような表現がなされるのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本稿においては、イメージ表現を通して表れる母性イメージを探るための第1段階と

してコラージュ制作を通して表現された母性イメージの表現特徴をコラージュ作品の形式的側面に焦点を当てて、検討していくことにする。

## Ⅳ. 方 法

### 1. 作品収集

A. 調査協力者：関東圏在住の妊娠や出産の経験のない青年期後期を含めた成人期の発達段階にいる未婚女性20人（平均年齢：26.7歳，SD：8.88）

B. 実施期間：2015年7月～10月

C. コラージュ作成用具：八つ切り画用紙，ハサミ，スティック糊，統制された素材（下記）

D. 素材の統制：全ての調査協力者に共通の素材を用意した。共通素材の内容は箱庭療法の使用玩具，ロールシャッハ・テスト等を参考として作成された内容分析項目（杉浦，1993）と，西村（2015），池野谷（2007），磯田（2004）の研究などを参照し，宇宙，自然・風景（山，海，滝，洞窟，大地，等），植物（花，木，等），動物，食べ物，小物，物体，インテリア用品，家具，その他（仮面，キリスト像，イラストなど）等の項目を考慮し，既存の雑誌や写真集から調査者が選び出した。さらに，選び出した雑誌記事や写真をカラーコピーし，項目別に冊子状にしたものを提示した。また，本研究で提示した共通素材の中には，親子の姿の写真や育児関連用品は含まなかった。従来の研究で得られなかった母性イメージを探るために，親子の姿を含めた写真や乳幼児の子育ての関連用品（赤ちゃんの靴や洋服，哺乳瓶，ゆりかごなど）の写真など，直接的な子育ての関連素材をあえて選択せず，自然風景や動物，物体などのような子育てと直接関連がなさそうに見える素材を主に共通素材として提示することにした。そうすることで，それらの素材のどのような特徴が母性のどのような側面やイメージに結びつき，どのような表現がなされるのかを見ることができると考えた。但し，人のイラストやシルエットまたは風景の中に一緒に写っている人の素材は

特に制限せず素材として提示した。また，人の母親と子どもの姿は提示しなかったものの，動物の写真において親子の姿が写っている素材が含まれており，素材の偏りをできるだけ少なくすることを心掛けて素材を選択した。

E. 手続き：関東にある大学の心理相談センターの一室及び図書館の会議室，会議室，調査参加者勤務先のうち調査参加者の希望に合わせて個別法により調査を行った。母性をテーマとしたコラージュ制作を行った後，コラージュ作品に関する半構造化面接を行った。コラージュ制作に費やす時間と制作方法は，自由とし，半構造化面接の際には調査参加者の同意を得た上で録音を行った。

### 2. 分析方法

#### A. 作品に対する評定

(1) 評定者：筆者を含む臨床心理学を学ぶ大学院生9人が作品ごとに評定を行った。評定項目は，母性をテーマとしたコラージュ作品の表現特徴を捉えるために，杉浦（1992），滝口ら（1999），西村（2015）の研究で用いられた形式分析の項目を参考にし，その中から本研究では，主な色彩と切り方，中心性の3つの評定項目を取りあげ，評定を行った。

(2) 手続き：主な色彩と切り方，中心性の有無の評定項目により構成された評定質問紙を作成し，質問紙を用いて作品ごとに評定してもらった。

#### (3) 評定項目と内容

①主な色彩：主な色彩の評定においては，杉浦（1992），西村（2015），滝口ら（1999）の研究を参考に13色を色彩の評定項目として設定し，作品を代表とする主たる一色とそれに次ぐ2色の，計3色を作品ごとに選択してもらった。

②主な切り方：切り抜きをどのように切っているかについて調べるため，主な切り方について評定を行った。切り方は，西村（2015），杉浦（1992），滝口ら（1999）の研究を参考に，四角（切片が四角形のもの），円形・楕円（切片が円形または楕円なもの），物の形（対象物に沿っ

た切り方をしているもの)、不定(どちらにも該当されない切り方)の4つの項目を設定し、主たる切り方(主に使用された切り方)一つ、それ以外に使用されたと思われる切り方を作品ごとに評定してもらった。

③中心性：杉浦(1992)、滝口ら(1999)の研究を参考に、切り抜きの構成が中心性を持っているか否かについて評定を行った。評定は、作品ごとに中心性があると判断した場合には、「中心性がある」のところに○を、ないと判断した場合には、「中心性が無い」のところに○を付けてもらい、評定を行った。

#### B. 補足資料

補足資料として録音によるインタビュー内容を逐語化し、分析に用いた。また、コラージュ制作中に行う制作者に関する調査実施者のメモも補足資料として用いた。

### V. 結果・考察

#### 1. 主な色彩

本研究においては9名の評定者に、それぞれの作品について主たる色彩1色(その作品を最も代表する色彩)とそれに次ぐ色彩2色、計3色を選択してもらった。そして、選ばれた3色のうち過半数の5名以上に選ばれた色彩の中で、主たる色彩においても一番多く選ばれた色彩をその作品の主な色彩として採用し、集計を行った。その結果を基に、主な色彩として選ばれた色彩について、イエーツの修正式を用いたカイ二乗( $\chi^2$ )検定を行った結果、5%以下の有意水準で、有意差が認められた( $\chi^2 = 13.213, df = 6, p < .05$ )。

表1は主な色彩の順位を示す。主たる色彩として青が20名中9名(45%)と最も多く使用されており、次に橙と白がそれぞれ3名(15%)、緑が2名(10%)、水色、黒、灰色が1名(5%)と続いた。そして、主たる色彩として使用されなかった色彩は、紫、赤、桃色、茶、ベージュ、黄であった。

主な色彩として多く使用されたのは、青とそ

表1 主な色彩の順位

順位	使用人数 (20人中の%)	色名
1位	9 (45%)	青
2位	3 (15%)	橙・白
4位	2 (10%)	緑
5位	1 (5%)	水色・黒・灰
8位	0 (0%)	紫・赤・桃色・茶・ベージュ・黄

の次に橙と白であり、主にこの三つの色彩について考察を行った。

青色は最も多く使用された色彩であり、青が主な色彩として評定された作品には、作品A, B, C, E, G, I, N, Q, T(付録)がある。これらの作品からすると、多く使用された理由として、青色を含む水との関連のある素材が多く使用されたためだと考えられる。水と関連のある素材は青と評定されていない作品にも多く使われており、青色の海は20作品中11作品に使用され(作品A, B, C, E, I, K, N, Q, R, S, T)、滝が3名(作品E, N, O)、その他、間欠泉の切り抜きが1名(作品N)と、20作品中15作品に海や滝などの青色の水と関連のある素材が使用されていることが分かる。そして、青色と評定された作品の中で水と関連のあるもの以外の素材として使われたのは、空(作品C, I)と青色の洞窟(作品G)の切り抜きであった。

このように多くの作品で使われた青色はどのような母性イメージとして使用されたのだろうか。青は、落ち着き、沈静、安息、静寂、平和、平静等の感情を引き起こす(松岡, 1995)。特に、本研究で多く使われた海の素材は暗い背景の夜の海や深い海の中の素材であり、実際インタビューでこれらの切り抜きに対して「落ち着く」(作品R)、「安心できる感じ」(作品E, R)「静かな感じ」(作品R)、「穏やかにみえる」(作品T)、「優しい感じがする」(作品Q, T)などが語られた。これらの語りから、青色から引き起こされた安心感や落ち着きなどのような感情が母性イメージと一致したため、青色の素材が多く使用されたと考えられる。また、海の



素材に対して「羊水のように見える」（作品A, B, C, G, I, K）と語られた制作者が多く、暗い青い海から「羊水」が連想されやすかったという素材の特徴により、青い海の素材が多く使用された可能性も考えられる。よって、このように、青い素材の色とその素材の特徴から引き起こされた感情が母性イメージとして表現されたと考えられる。

次に多く使用された色彩は橙と白である。橙色は青と同様に、主たる色として評定されなかった作品においても多くみられた色彩であった。発達によるコラージュ表現特徴について調査を行った杉浦の研究（1992）では、成人における橙色の使用は3.5%を占め、幼児、小学生、中学生、高校生、高齢者を含めた全年齢において主な色彩としてあまり使用されなかった色である。本研究の調査対象者の大きさなどが異なるため、割合の差について明確に述べ難いが、本研究では、15%の使用割合を占め、2番目に多く使用されており、主たる色として評定されなかった作品においても使用頻度が多くみられ、母性イメージとして表現された可能性について検討してみる必要があると考えられる。橙色は、暖色系に分類され、暖かい感じを与えると言われている。また、橙色が連想されやすい単語として、家庭や幸福、愛、等が選ばれ、家庭や愛のようなイメージにも結び付きやすい（大山, 1994）。実際インタビューで多く語られた内容の一つとして、家族と関連する語りが多かったことから、橙色と家族に関連する母性イメージとの繋がりについての可能性も考えられる。また、本研究で使用された橙色の素材をみると、ロウソク（作品B, C, F, H, L, M）、橙色のライト（作品E, F, I, M, O, Q, R）、夕暮れの空（作品O）、夕暮れの海（作品J）、橙色の宇宙（作品I, T）などがあり、橙色の光が多い。インタビューでこれらの素材について、「温かく感じる」（作品B, H, J, L, M, T）、「ほっとする感じ」（作品F, S）、「色のトーンが落ち着く感じがする」（作品F, S）、「優しい感じがする」（作品H, O, Q）、「柔らかい」（作

品R, T）と感じ、このような感覚が母性イメージと一致したと語られた。これらのことから、母性がテーマであるコラージュ制作において、母性イメージで多く語られた「ほっとする」、「温かい」、「優しい感じがする」、「落ち着く」などのような感覚が橙色のイメージで引き起こされた感情と一致して母性イメージの表現として多く使用されたと考えられる。

橙色と同じ割合で多く使用された色は白である。白色は純潔、素朴、清潔さ等の感情を引き起こすと言われており（松岡, 1995）、3つの作品（作品F, H, S）が白を主たる色彩として使われたと評定された。この3つの作品で使用された白色の切り抜きをみると、白い食器（作品F）とリネンのテーブルクロスとナプキンなどが写った切り抜き（作品H）がある。作品Fの食器の素材は大きいサイズで台紙の中央に貼られている。そして、作品Hに使用された白の素材であるリネンの切り抜きもかなり大きいサイズで貼られており、二つの切り抜きは評定者に強いインパクトを与えた可能性が考えられる。また、インタビューでは、リネンの素材について、制作者自身のお母さんが好きな物であると語っており、食器に対しては食べ物を意味すると語られ、素材の色よりは素材の内容が母性イメージと繋がりやすかったため選択されたと考えられる。そして、主な色が白と評定された残り一つの作品である作品Sを見ると、他の作品より空白が多く、白い素材の使用としてではなく、空白により主たる色彩として評定された可能性が高いとみられる。よって、これらの作品からは白色が母性イメージと何らかの繋がりを持っていると考えるのは難しい。

一方で、白色の切り抜きを使用した他の作品を見てみると、作品Iで使用された白色の月と作品Tで使用された白色の花に対して語られたインタビュー内容から共通的に語られた内容として「白の色が、凜としてしっかりしている母性のイメージが感じられる」があった。つまり、「凜としてしっかりしている母性イメージ」が白色から引き起こされた感覚と一致し、使用さ



れたと考えられる。また、全体のインタビューを通して、母性イメージとして「素朴な感じ」（作品O）、「ぎらぎらしないイメージ」（作品O, R, T）、「強い色よりは、落ち着いている色の方が母性のイメージにつながる」（作品I, R, T）という語りが多く、このような感覚が白色により引き起こされる清潔さ、純潔、素朴な感覚と繋がり、母性イメージとして表現された可能性も考えられる。

これまで、母性イメージをテーマとしたコラージュ作品に多く使用された色彩と母性イメージとの関連の可能性を述べてきた。しかし、既に述べたように、インタビューの内容から、多く使用された色彩はその素材の色だけで選択されたというよりは、素材の内容も選択に影響を与えている。そのため、本研究で多く使用された色彩が母性を感じさせる色であると判定するより、それらの色がどのような母性の側面に結びつきやすく、それらの色の持つ特徴が母性イメージとしてどのように表現されるのかをつかむための手掛かりとして考えられよう。

## 2. 主な切り方

切り方の評定においては、9名の評定者に、それぞれの作品について主たる切り方（主に使用された切り方）一つと、それ以外に使用されたと思われる切り方を選択してもらった。そして、選ばれた切り方のうち過半数の5名以上に選ばれた切り方の中で、主たる切り方においても一番多い評定者に選ばれた切り方を作品の主な切り方として採用し、集計を行った。その結果、20名中13名（65%）と四角が一番多く使われ、次いで円形（楕円を含めた）が20名中6名（30%）と次に多く使用された（表2）。また、使用された主な切り方（四角、円形、物の形）に対して、イエーツの修正式を用いたカイ二乗（ $\chi^2$ ）検定を行った結果、5%以下の有意水準で、有意差が認められた（ $\chi^2 = 9.113, df = 2, p < .05$ ）。

コラージュ制作をするとき、最初に制作者は、用意された雑誌類の中から欲しいパーツを

表2 主な切り方

	四角	円形	物の形	不定	計
人数	13	6	1	0	20
(%)	(65)	(30)	(5)	(0)	(100)

選択し、ハサミで切り取る作業をする。そして、切り取ったパーツをさらに四角や円形など、素材の形を決め、もう一度ハサミでパーツの中からいらぬ部分を切り除く。このような「切る」という行為について、中村（1999）は、治療関係場面における切る行為はクライアントの思い入れの感情が動いており、自我の投影的な選択機能の動きを内包していると考えられると述べている。また、台紙については、箱庭の砂場、描画法の画用紙枠が心の機能する場であるように、コラージュ技法における台紙空間は心理的空間を投影する場であると述べている。さらに魚住（2008）は、素材の切り出す体験を明らかにすることを目的に行った調査では、素材を切り出すことは、いらぬ箇所を排除する目的のみではなく、素材の印象を変える、素材の印象を活かす、違うイメージを作る等のような目的もあることを明らかにしている。これらのことから、治療場面に限定されずコラージュ制作における表現の一つの方法として切り方は、作品を理解するにあたって大事な意味を持っていると言えよう。

本研究で最も多く使用された切り方は四角（65%）で、その次が楕円を含めた円形（30%）である。杉浦の研究（1992）では、成人の切り方において、四角が45.6%で一番多く、次に物の形が36.5%、不定が12.3%、手でちぎる3.5%、円形が0%の順であった。また、統合失調者と一般成人のコラージュ表現の違いについて調査を行った今村（2001）の研究では、切り方の評定項目をより細かく設定している（四角形、物の形、不定形、丸、三角形、多角形、手でちぎる、創作、その他）ものの、一般成人の主な切り方として最も多く見られたのが86.8%を示した四角形で、その次に物の形が61.4%、

不定が58.8%の順であり、丸は7%で、最も少なく使用された切り方であった三角形、手でちぎる、創作、その他の2.6%の次に少ない割合を占めている。これらの二つの調査は、調査人数と評定項目は異なるものの、使用割合の順位からすると、同じ傾向を表していることが分かる。つまり、一般成人において最も多くみられる切り方として、四角形があり、円形または丸の切り方はそれほど大きい割合を占めていないと言える。この結果からすると、本研究において四角の切り方が一番多く見られたのは、成人において多くみられる傾向が本研究においても見られたと考えられる。一方で、一般日本人において使用頻度が少ない円形の切り方が本研究においては30%で2番目に多く使用されたことは、注目する必要があるだろう。実際、主な切り方として円形と選ばれた作品の中でも四角と円形の両方の切り方を使用された作品が多く、逆に主な切り方として四角と選ばれた作品でも、円形を使用された素材も存在している。すべての素材を丸く切ったり、または一つあるいは、いくつかの素材のみ丸く切ったりした作品のインタビューで語られた内容には、「角がない、丸い方が母性っぽいかなと思って」（作品O）、「角があるより丸い方が良かったので」（作品M）、「尖ったよりは丸みがあった方が柔らかい優しいイメージがして」（作品L）、「包まれている表現をしたくて」（作品P）、「丸い方が優しい感じがして」（作品Q）、「母性イメージにはあまりトゲトゲしないイメージ」（作品M,R）等が語られた。特に作品Rでは「個人的に家事があまり好きじゃないこともあって、役割的な仕事のような家事を表す素材として洗濯板とほうきを四角に切った」と述べたり、「海は冷たくも見えるから四角に切った」と語り、四角の切り方を否定的な意味合いの表現として使用していることが分かった。これらのインタビューの内容から円形の切り方は、柔らかく、優しい印象を与え、その印象が母性イメージとして表現されたため、本研究では円形の切り方が多く使用されたと考えられる。まとめる

と、四角のように、尖ったり、角が存在する切り方より、丸い円形の方が柔らかく、優しい雰囲気を感じやすく、それが母性イメージとして繋がったため、円形の切り方が多く見られたと考えられる。

### 3. 中心性

切り抜きの構成について中心性を持っているか否かについて評定を行い、9名の評定者のうち、過半数の5名以上に選ばれた評定を採用した。その結果、20作品中、中心性が有る作品と無い作品の割合がそれぞれ50%であった（表3）。

杉浦（1992）の研究で中心性が見られた成人のコラージュ作品は28.1%で、中心性のある作品は幼児から高校まで、学年が上がるに従って増加し、大人で少し減少した。この傾向は滝口ら（1999）のコラージュ作品の発達の研究においても同様に見られた。また、成人の具体的な割合は示していないものの、滝口ら（1999）が示した中心性に対する結果のグラフからすると、10%前後を示し、中心性が有意に少なかった小学校4年生と近い結果を示していることが確認できる。これらの研究から、幼児から学年が上がるに従って、中心性のある作品の出現は多くなるが、大人からは減少する傾向があることが言える。また、その割合としては、どちらの研究も30%を超えていない。これらの結果からすると、本研究における中心性の出現の割合が50%であることは母性をテーマとしたコラージュ作品の特徴として注目して見る必要があると思われる。

コラージュ技法における台紙空間は心理的空間を投影する場である（中村、1999）。よって、治療場面でないところで表現された作品であっても、台紙の中心に置かれた切り抜きは、作品

表3 コラージュ作品の中心性

	中心性が有る	中心性が無い	計
人数	10	10	20
(%)	(50)	(50)	(100)

を理解するにあたって大事な情報を持っていると考えられる。それでは、中心性のある作品として評定された作品の台紙の中心にはどのような意味合いを持った素材が置かれたのだろうか、そして、中心性のある作品がこの研究ではなぜ多く見られたのだろうか。

中心性のある作品として評定されたのは、作品B, I, L, P, C, Q, T, N, O, Dの10作品であった。これらの作品の中心に置かれた素材とその意味内容、中心性があると評定した人数、そして最も母性を感じる切り抜きとして選ばれた作品の4項目について作品ごとにまとめた結果、表4の通りであった。その中で、評定者の全員に「中心性のある作品」として選ばれた作品B, I, Lを中心にみると、まず、作品Bでは、中心に貼った海について「ぐるぐる回っている海の中心から命が感じられる」と語っており、命が生まれるようなイメージが母性イメージに繋がったと語った。そして、その上に貼ったマリア像については、「包み込む包容力」を表しており、この切り抜きを最も母性を感じる素材として選んだ。また、制作後、母性について気づいた点として「自分の中で、命が誕生することが母性イメージに繋がっていることが分かった。」と語ったことや、タイトルが「命と包容力」であることからわかるように、この作品は母性を「命と包容力」という面から捉えていると考えられる。そして、それを表す切り抜きとして海とマリア像が台紙の中心に貼られていることが分かる。次に、作品Iでは、「自分の中で、丸く回っている中心に何かがあるイメージが母性イメージに繋がるため、魚がぐるぐる回っている海と、その中心に花を貼った」と説明し、これらの素材を最も母性を感じる素材として選んだ。このようなインタビューの内容から、この制作者にとって丸い円とその中心に何かあるイメージが母性イメージとして繋がりがやすいこと、そしてそれがこの作品のキーワードであることが分かる。作品Lでは、母性イメージとして一番に思い浮かんだものが料理であり、食べるためには皿がないと困

るため、土台のように大事な存在として皿を中心に貼ったと語った。また、この素材を最も母性を感じる素材として選んだ。このようなインタビューの内容から、中心に貼った皿の切り抜きは、制作者の中で土台のような大事な意味合いを持っていると共に、最も母性を感じる切り抜きであることが分かる。その他にも、中心に貼ったリネンの切り抜きについて、「白くて大きいリネンが大きな優しさの大元のような感じが」母性イメージに繋がったと説明している作品P（評定した人数8人）や、中心に貼ったロウソクに対して、「必要不可欠な存在である意味として母性イメージに繋がりました。」と語る作品C（評定した人数7人）などがある。

これらのことから、母性をテーマとした作品の台紙の中心には、制作者の中で母性を考える時に、キーワードとなる意味合いを持つ切り抜きや、最も母性を感じる切り抜きが置かれやすいことが言える。

それでは、なぜこのような大事な意味合いを持った切り抜きが中心に置かれ、それを他の切り抜きが囲むような中心性のある作品が、本研究では多く見られたのだろうか。「中心のあるイメージ」が母性イメージに繋がったと語られたインタビュー内容は、中心性のある作品として評定された作品（作品B, I, N, Q）のみならず、評定されていない作品においても（作品K, S）見られた。特に、中心性のある作品として評定された作品Iでは、「丸い形が母性イメージに繋がりがやすく、貼っていくのもこの中心を貼ってから周りが円になっているような感じで貼った」と語り、中心のあるイメージを切り抜きの構成においても使用していることが分かった。また、母性を考える時、「妊婦が大事そうに抱えている膨らんだお腹が思い浮かんだため、丸い形と臍のようにその中心に何かあるような形が自分の中で母性イメージに繋がったかもしれない」と語り、中心のあるイメージが母性イメージとして繋がりがやすかったと語っている。一方、本研究において、包まれるイメージが母性イメージに繋がったと語った制作者は

多かったが、そのイメージを構成において表現したのが作品Pである。作品Pの制作者に、真ん中にハムスターを貼った理由を尋ねたところ、「母性を表す周囲の切り抜きに囲まれて、それらに包まれているハムスターを表現しなかったため」であると語り、最も母性を感じる素材として選んだ。

これらの作品とインタビュー内容からすると、母性イメージに繋がりやすい「中心のあるイメージ」または、「包まれるイメージ」が切り抜きの構成にも影響を与えたため、中心とそれを囲み、包むような、中心性のある作品が本研究では多く見られたのではないかと考えられる。

まとめると、母性をテーマとした作品の中心には、一番母性を感じる切り抜きや、制作者の中でキーワードとなる切り抜きが置かれやすい傾向があることが分かった。また、本研究で中心性のある作品が多く見られた結果については、母性イメージに繋がりやすい「中心のあるイメージ」と「包まれるイメージ」が台紙の構成にも影響を与えた可能性があると考えられる。

## VI. まとめと今後の課題

本研究は結婚や出産の経験がない青年期後期及び成人期の発達段階にいる未婚女性を対象に、「母性」をテーマとしたコラージュ制作を実施し、母性イメージがコラージュ作品にどのように表現されるのかについて調査を行った。なお、本稿においては、母性イメージを探るための第1歩としてコラージュ作品を通して表現された母性イメージの表現特徴を主な色彩、主な切り方、中心性の3つの形式的な側面に焦点を当てて、検討を行った。その結果、主な色彩においては、青が最も多く使用され、次に橙・白の順に続いた。本研究で青が最も多く使用された理由としては水との関連の素材が多く使用されたことと、青により、落ち着き、沈静、安息等、の感情を引き起こされ（松岡、1995）、それらの感情が母性イメージと繋がり、多く使

用されたと考えられる。次に多く使用された色は橙色であり、橙色は、先行研究では大人の表現特徴として、多くは使用されない色の一つである。しかし、本研究では2番目に多く使用されたことから、母性イメージの表現特徴として明らかとなった。橙色は、暖色系に分類され、温かい感じを与えられている。大山（1994）の調査では、橙色が連想されやすい単語として、家庭や愛、等が選ばれており、本研究により母性イメージにも結び付きやすいことが明らかとなった。また橙色の素材の多くはロウソクとライトなどであり、素材の特徴からも温かいイメージの表現が多く、このようなイメージや感覚が母性イメージと繋がりやすいことが考えられる。しかし、これらの多く使用された色彩はその素材の色だけで選択されたというよりは、素材の内容も選択に当たって大事な意味を持っており、これらの色が母性イメージを表す色であると考えるのは難しいであろう。

主な切り方においては、四角が一番多く見られ、その次に楕円を含めた円形が多くみられた。先行研究により、大人の一般的傾向として四角の切り方が多く出現することが明らかとなっており、本研究においても同じ傾向がみられたが、先行研究には使用頻度の低い楕円を含めた円形の切り方が本研究では四角の次に多く見られ、丸いイメージが母性イメージとして表現されたことが明らかとなった。

切り抜きの構成に関する中心性の分析においては、母性をテーマとした作品の台紙の中心に置かれる素材には、最も母性を感じられる素材や作品のキーワードとなる母性イメージが置かれやすい傾向が明らかになった。また、母性をテーマとしたコラージュ作品に中心性が多く見られた可能性として、母性イメージに繋がりやすい「中心のあるイメージ」と「包まれるイメージ」が台紙の構成にも影響を与えた可能性があることが分かった。

一方、母性イメージの表現としてどのような素材が用いられ、どのような母性イメージが表現されたかを分析することで母性イメージを探



ることが出来ると考えられる。そのため、次の研究では、使用された素材の分析を行い、使用された素材の意味合いや特徴に注目し、母性イメージを探ることを試みる予定である。

表4 作品ごとの中心の切り抜きとその説明

作品	中心性が有ると評定した人数 (全9人中)	中心に置かれた切り抜き	切り抜きの説明	中心に貼ったものが最も母性を感じる切り抜きとして選ばれた作品
B 命とか生命力	9	海と聖母マリア	海はお腹の中の子官のイメージ、そして、その中を魚がたくさん丸く回っているのは生命力が感じられ、お腹の中に命があるようなイメージです。マリア様は包み込む包容力、大きさのようなものを表しています。	○
I 母性の欠片	9	海とその中心に貼っている花	海の中に花があり、その花の周りをぐるぐる回っている魚がいる。このような中心が有ってその中心を回るイメージが母性イメージだと思う。	○
L 母なる大地	9	花が飾っている食器	母性というので、一番に思い浮かんだものが料理で、母がよく作ってくれる食事が洋食で、洋食を食べているイメージが繋がってこの食器を選んだのと、花が母性イメージとマッチして、また、花があることで無いよりは明るい母性のイメージがあって、真ん中に貼った理由は、お皿がないと食べられないので、土台のように大事な感じがしたからです。	○
P 優しさ、時間、理想	8	リネンのハンカチと寝ているハムスター	白いリネンの写真は、大きな優しさの大元みたいな感じで、優しさの中でも全部白だけじゃなくて、色んなものが混ざり合ったそういう大きな優しさというイメージです。ハムスターは優しい母性（リネンと周りの貼ってあるすべての素材）に包まれているイメージでまだ未熟で、守られないといけない存在、見守られているような感じ。	○
C 動物、自然、キャンドル…	7	ロウソク	暗闇からボワンと光りがある感じが、電気のように強い光りで自分の存在を主張しないけど、ボワンとその場所で明かりを照らしている、必要不可欠な存在である意味として母性イメージに繋がりました。真ん中に貼った理由は、周辺の動物を照らすイメージにしたかったためです。	
Q 優しさ	7	海と島	海は、色が優しい感じがし、海の中の島は、世間一般のお母さんのイメージで、偏見だけど、旦那さんが仕事に行って、ずっと住んでいたところから離れ、旦那さんの実家の近くに住んで周りに知っている人がいなく、一人で子育てしている孤立しているイメージ。	
T 愛	7	花	母というのは、育児をするには凛としてしっかりしていないといけないがあると思うんですが、白いお花って慈愛の心のようなイメージと、自立している女性であり、愛を持って私の目を癒してくれる感じがして、選びました。真ん中に貼った理由は、その凛とした一人の女性というのがあって、周りにその柔らかくて居心地よくて、人間がないと母性が無いかなと思って、お花ははじによけるのは違う気がしたためです。	
N 命	6	間欠泉	水がたまっており、湧き出てたまるように見えて、何かが生まれてくる感じがすると、海のように広がっているより、包まれてたまっている感じが良かったです。	○
O 母の愛の暖かさ	6	花	花は形が重なって、厚みがあるのと、優しい感じがして真ん中に花を貼りました。中心に貼った理由は、優しい物を中心に貼ったためです。	
D リラクッス	5	森	赤みのある暖かい感じと緑の静かなトーンが2つの母性を表していると思い、貼りました。	○



## 引用文献

- 池野谷美千代 (2007). コラージュ制作における女性性イメージに関する探索的研究——30代女性と中学生女子の制作を通して——. 東京国際大学大学院 臨床心理研究科修士論文.
- 今村友木子 (2001). 分裂病者のコラージュ表現——統一素材を用いた量的比較——. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 48, 185-195.
- 今関節子・行田智子・近藤好枝・真下由利子・金寿子・松岡治子・横田正夫 (1994). 青年期女子の母性イメージの特徴. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 15, 73-77.
- 石崎優子・石崎達郎・桂 戴作・織田正昭・日暮眞・原 節子 (1996). 母性性に関する心身医学的研究 (第1報) ——現代の日本人のもつ母性性のイメージについて——. 心身医, 36 (6), 468-474.
- 石崎優子・石崎達郎・桂 戴作・織田正昭・日暮眞・原 節子 (1996). 母性性に関する心身医学的研究 (第2報) ——心身症患者の母性性イメージ——. 心身医, 36 (6), 476-481.
- 磯田美深 (2004). 子どもを持つ女性の「自分」をテーマとした表現の研究 ——コラージュ母子同時制作と単独制作を通して——. 東京国際大学大学院 臨床心理研究科修士論文.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学. 青土社, pp. 24-40.
- 河合隼雄 (2009). ユング心理学入門. 岩波書店, pp. 70-78.
- 北原保雄 (2001). 日本国語大辞典第2版12 ほうほ～もんげ. 久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林 大・前田富禎・松井栄一・渡辺 実 (編). 小学館, p. 102.
- 松村恵子 (2005). 母性意識を考える. 文芸社, pp. 25-27.
- 松岡 武 (1995). 色彩とパーソナリティー——色で探るイメージの正解——. 金子誠司, pp. 90-132.
- 中村勝治 (1999). 現代エスプリ——コラージュ療法——. 森谷寛之・杉浦京子 (編). 至文堂, 386, 42-48.
- 西村喜文 (2015). コラージュ療法の可能性——乳幼児から思春期までの発達の特徴と臨床的研究——. 創元社.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究. 川島書店, pp. 245-247.
- 大山 正 (1994). 色彩心理学入門. 中央公論社, pp. 219-220.
- 新村 出 (2008). 広辞苑第6版. 岩波書店, p. 2589.
- 杉浦京子 (1992). コラージュ療法の基礎的研究 I ——表現特徴の発達に関するパイロット・スタディ——. 日医大基礎科学紀要, 13, 13-38.
- 杉浦京子 (1993). コラージュ療法の基礎的研究 II ——表現特徴の発達に関するパイロット・スタディ——. 日医大基礎科学紀要, 14, 11-34.
- 滝口正之・山本敏宏・岩岡眞弘 (1999). 現代エスプリ——コラージュ療法——. 森谷寛之・杉浦京子 (編). 至文堂, 386, 175-181.
- 寺田眞廣・今関節子・横田正夫・高田千恵子・田村文子 (1986). 女性の発達段階における母性イメージの推移. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 7, 115-130.
- 寺田眞廣・横田正夫・今関節子・田村文子・高田千恵子 (1987). 質問表と描画テストによる母性イメージの検討. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8, 109-115.
- 魚住広之 (2008). コラージュ制作過程において, 素材を選ぶ・切ること. 東京国際大学大学院 臨床心理研究科修士論文.

付録



作品A 母



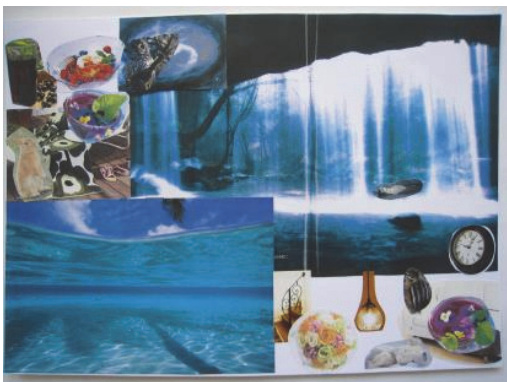
作品B 命とか包容力



作品C 動物, 自然, キャンドルと…



作品D リラックス



作品E 私の帰る場所



作品F お母さん



作品G 親と子



作品H 視線



作品I 母性の欠片



作品J あたたかさ



作品K 人類の創生と母性

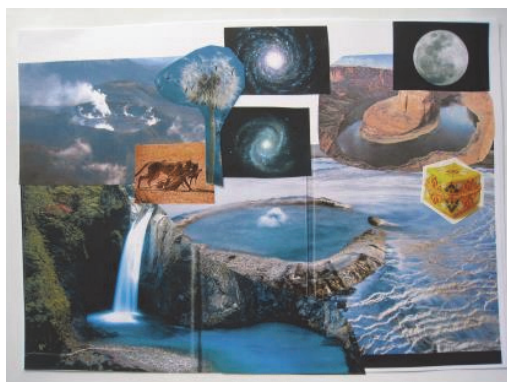


作品L 母なる大地





作品M お母さん



作品N 命



作品O 母の愛の温かさ



作品P 優しさ, 時間, 理想



作品Q 優しさ



作品R 理想



作品S表：愛



作品S裏：母なるもの



作品T 愛



# 青年期の両親への信頼感・性別が対人欲求 及び同調行動に与える影響について

## ——大学生を対象に——

田 村 茉 菜

### 要 約

“重要な他者”＝母親とした研究が多いが、父親との関係性も青年期の子どもたちに何らかの影響を及ぼすのではないかと考え、本研究では、大学生を対象に、青年期の両親への信頼感がどのように心理的側面・行動的側面に影響するかについて、対人欲求及び同調行動との関連から検討し、その際性別による影響も検討した。

結果、「仲間への同調」に及ぼす影響として、男子は「賞賛欲求」に正の有意値、女子は「回避欲求」に負の有意値がみられ、「自己犠牲・追従」に及ぼす影響として、男子は「賞賛欲求」に負の有意値がみられ、女子は「賞賛欲求」の関与がみられなかった。また、男子の両親への高い・低い信頼感は「仲間への同調」を取る際、「賞賛欲求」の関与をなくし、女子の両親への高い信頼感は「仲間への同調」を取る際、「賞賛欲求」に負の有意値を生じさせ、「回避欲求」の関与をなくすことがわかった。さらに、「自己犠牲・追従」を取る際、男子の両親への高い信頼感は「賞賛欲求」「迎合欲求」の関与をなくすこと、低い信頼感は「賞賛欲求」の関与をなくすことがわかった。女子の両親への高い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際、「迎合欲求」の関与をなくすことがわかった。このことか

ら、両親への信頼感や性別が対人欲求及び同調行動に影響を及ぼすことがわかった。

キーワード：青年期、両親、信頼感、対人欲求、同調行動

### 1. 問 題

#### 1. 現代青年の友人関係

青年期の友人関係は、青年を支えるだけでなく、親からの自立を促す役割もあり、青年の成長とともに変化していく関係である。友人を強く希求する青年期は、友人関係に関する悩みが増える時期でもある。第2次性徴などを伴う急激な心身の変化そして親からの独立というのは、不安や恐れを伴う。そのため、青年には悩みや考えを語り合う友人が必要となると考えられる。

大鷹・菅原・熊谷(2009)は、青年期の対人関係は、少子化と核家族化が進行したことで急激に希薄化・表面化したと示唆した。友人関係が深まると開示する情報量は多くなるだけでなく、そのレベルは深くなっていく。さらに、一方が自己開示することによって、他方はそれと同じ量・レベルの自己開示を行わなくてはならない。このことを、「自己開示の返報性」という。松永・岩本(2008)によると、1980年代

\*臨床心理学研究科 博士課程(前期)

半ば以降の青年期の友人関係のあり方は、自分自身の内面を開示するような関わりを避け、互いに傷つけあわないよう、表面的な楽しさの中で群れ、関係の深まりを避ける傾向が示唆されたという。

しかし、その後の研究において現代青年の友人関係は、全体的に「希薄化」しているのではなく、場面に応じて選択的に使い分けているということが明らかとなった（泉水・小池, 2011）。つまり、「友人との関係はあっさりしてお互いに深入りしない」といった表面的な関わり行動の一面と、「意見が合わなかったときには納得がいくまで話し合いをする」といった積極的な関わり行動の一面があるように、友人関係の中に「希薄」なものや「親密」なものとの混在しているのである。このことから、現代の青年の友人関係において、友人関係の深さと自己開示の深さがあまり関連しなくなっているといえる。また、現代では他者と出会い、関係を維持する機会が多様となったため、その場の文脈によって付き合い方を選択的に使い分けるよう変化しているのである。

しかしながら、友人関係は青年期において重要であり、社会化に影響を及ぼすといわれている（泉水・小池, 2011）。その機能として、「安定化」「社会的スキルの学習」「モデル」がある。「安定化」とは、悩んだときに話や相談を聞いてくれる友人の存在が精神的安定をもたらす、自我を支える機能である。「社会的スキルの学習」とは、友人との付き合い方を通して他者と良い関係を構築するための接し方を学習する機能である。「モデル」とは、友人から新しい考え方や生き方を学ぶことによって自己の人生観や価値観を広げ、尊敬や憧れから友人をモデルとする機能である。

さらに、青年期の友人関係は、精神的健康や学校適応との関連も示唆されている（中間, 2014）。このことから、青年期において友人関係はなくてはならないものといえる。

## 2. 基本的信頼感

子どもたちが健全な学校生活を送っていくためには親などの“重要な他者（significant other; Sullivan, 1953）”との間に基本的信頼感（Erikson, 1963）を形成していることが必要であると考えられる。基本的信頼感とは、Erikson（1963）によって提唱された「生後1カ年の経験から獲得される自分自身と世界に対する1つの態度のことであり、他人に対しては一般に筋の通った信頼を、自分自身に対しては信頼に値する感覚のこと」である。つまり、信頼感の原点は、必要な物を供給してくれる外的存在が常に同じで安定しており、連続性を有していること、そして様々な衝動に対処する自己の適応能力を信頼することといえる。また、菅原ら（2005）の研究から、他者に対する安定した信頼感の形成が自己に対する信頼に繋がるといった、信頼感獲得の順序も指摘されている。

基本的信頼感は、乳児期に形成され、思春期・青年期以降にも大きな影響を及ぼす。このことを内的作業モデル（Internal Working Model）という。内的作業モデルとは、乳児と養育者との関係の中で内在化されてできるモデルのことであり、他者との関係に関する一般的イメージである。そして、これらのモデルを現実世界のシミュレーションモデルとして使用することによって、外界からの情報を処理し生活上の様々な出来事を認知、安全感を得るのに有効な自分の行動プランを作成する。また、各個人が持つ内的作業モデルの様式に対応した行動スタイルが対人場面で現れることがこれまでの研究によって明らかにされてきた。

“重要な他者”との信頼関係が自尊心や孤独感、人生における満足感、ディストレスとの深い関係があることは多くの研究から示されている（金政, 2007; 丹波, 2005）。例えば、Bowlby（1976）の愛着理論では、乳幼児期に親との関係が適切で応答的な関係であるほど、その時期やその後の精神的な安定性が高いことが示されている。また、児童期に親との関係において暖かさの欠如が成人期の孤独感をもたらすといっ

た研究結果もある(浜崎ら, 2012)。したがって、親などの“重要な他者”との信頼関係が子どもの精神的健康や社会適応にとって重要であることがいえる。

### 3. 父親に関する研究

父親に関する研究は、母親研究に比べまだまだ少ない。橋本(2010)は、大学生における父親との愛着関係を研究したところ、父親との愛着関係の高い群は情緒が安定し社会スキルも高く、低い群は情緒不安定で自己中心的傾向があり、問題行動を起こしやすいことが示唆された。また、小林(2011)は、両親による養育態度の影響について研究したところ、父親の統制的な養育態度が自身・自律性の追求を直接低下させる傾向があり、無関心な態度は自己有用感を低下させる傾向があることがわかった。このような結果から、父親といった“重要な他者”との関係が子どもの精神的健康や社会化にとって重要といえる。

### 4. ソーシャルスキル

ソーシャルスキル(社会的スキル)とは、良好な人間関係を形成し、維持していくための人間関係に関する知識、そして具体的な技術・コツの総称のことである。ソーシャルスキルは、性格のような先天的なものではなく、生後の経験を元に後天的に習得されるものである。従って、ソーシャルスキルは学習を通じ獲得される行動であるといえる。

ソーシャルスキルを獲得する(学習する)場面には、家庭や学校など様々あると考えられているが、その中でも家庭は重要な場面といえる。なぜならば、子どもは家族という集団の中で親の行動を観察・モニタリングをし、親からのしつけを通じ基本的なソーシャルスキルを獲得するからである(青木ら, 2007)。

大鷹ら(2009)によると、母親の拒否的な養育態度は、子どものソーシャルスキルの獲得を低くし、罪や脅しを用い社会的行動をとらせようとする養育態度は子どもに恐怖心や怒りを引

き起こし、向社会的行動を育てないと報告し、母親の養育態度→内的作業モデル→ソーシャルスキルというモデルを探索的に支持した。また、青木ら(2007)の研究では、母親の積極的拒否傾向が強いほど、家庭における社会的スキル(関係向上行動、関係参加行動)の獲得が少ないこと、そして家庭における社会的スキルが学校における社会的スキル(関係向上行動、関係参加行動)に影響を与え、学校における社会的スキル(関係向上行動、関係参加行動)がクラス内地位を高めるよう機能していることを明らかにした。このような結果から、親などの“重要な他者”との関わりの中での養育態度は、ソーシャルスキルに影響を与えると見える。

### 5. 対人欲求

渡部(1999)は、我々の対人関係の背景には「他者から賞賛されたい欲求」「他者から拒否されたくない欲求」「他者との関係を回避する欲求」といった3つの異なる対人欲求を想定する必要があると述べた。また、渡部(1999)は、「賞賛されたい欲求」の強い者は積極的に行動し他者の注目を集めることによって、「拒否されたくない欲求」の強い者は個性を殺し周囲との軋轢を最小限にすることによって、集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとし、「回避したい欲求」の強い者は他者からの積極的な拒絶や批判を回避し自己を防衛していると述べている。

田島・山崎・岩瀧(2015)は、対人欲求と社会的スキルや認知された対人的コンピテンスの関係を検討した。その結果、社会的スキルや対人的コンピテンスが高いと認知している人は他者から賞賛されたい欲求が強く、逆に社会的スキルや対人的コンピテンスが低いと認知している人は他者との関係を回避する欲求が強く、他者から拒否されたくない欲求をもつ人はその中間に位置することがわかった。つまり、他者から賞賛されたい欲求の強い人は、対人場面で自己顕示的に行動することで、自己の存在を集団の中に確保しようとすると考えられる。また、

他者との関係を回避する欲求の強い人は他の2つの欲求の強い人と比べ、社会的スキルが最も低く、対人的コンピテンスも低いと認知しているため、対人関係を回避することで自己防衛をするのに対し、他者から拒否されたくない欲求の強い人は対人関係を維持しようとする欲求をもち、実際に対人関係を維持することが可能であることが示唆された。このことから、養育態度が影響を与えるソーシャルスキル（社会的スキル）は、対人欲求との関連があるといえる。

## 6. 同調行動

同調行動とは、「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められた時、迷いながらも周囲の意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」のことである。五十嵐ら（2014）や葛西・松本（2010）によると、同調には内心から他者の意見・行動を受け入れる「内面的同調」、表面的には同調しているが内面では異なっている「表面的同調」があるという。また、同調行動の効果には、社会的な適応の促進や、集団との葛藤を回避することによる内的緊張の低減といったポジティブな側面と、内心の自己意見と集団意見に同調して呈示した自己意見との間に葛藤が生じ、ストレスフルな状態を招くというネガティブな側面があるという。

田島ら（2015）の研究から、対人欲求の「賞賛」は、同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示し、対人欲求の「非拒否」「回避」は、同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。この結果から、他者から賞賛されたい者は積極的に仲間と同調する行動をとることが多く、他者から拒否されたくない者・他者との関係を回避する者は自分を抑えて仲間と同調する行動をとるといえる。また、対人欲求の得点を平均値で高群、低群に分類し同調行動得点を比較した結果、対人関係において「他者から褒められたい」と意識する者の方が、積極的に仲間と同じ行動をとりたいという意識が高く、対人関係において「拒否されたくない思いが強い者・他者との関係を回避する者」の

方が、自己を犠牲にし、積極的に周囲に同調する傾向が高いことがわかった。つまり、対人関係において「他者から褒められたい」と考える者は、積極的に仲間と同じ行動をとるが自己を犠牲にする傾向が低く、「他者から拒否されたくない」と考える者は、自分を抑え積極的に仲間と同じ行動をとる傾向があり、「他者との関係を回避する者」は、自己を犠牲にし仲間と同じ行動をとる傾向があるといえる。このことから、対人欲求は同調行動との関連があるといえる。

## II. 本研究の目的

親への信頼感が及ぼす影響はこれまでの研究で多くなされているが、その大半が母親、心理的側面（自尊心・孤独感等）に関するものである。しかしながら、同調行動と関連のある心理的側面の対人欲求と親への信頼感との関連を検討した研究はあまりない。

よって、本研究において、両親への信頼感や性別が現代青年の心理的側面の対人欲求、行動的側面の同調行動にどのような影響を及ぼすのか検討する。仮説として以下のことを挙げる。

### 仮説1

男女における母親・父親への信頼感の高さは、対人欲求の「賞賛」を生じさせ、同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼす。

### 仮説2

男女における母親・父親への信頼感の低さは、対人欲求の「非拒否」を生じさせ、同調行動の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼす。

## III. 方法

### 1. 研究対象

東京国際大学に通う大学生の男女を対象とし、男子76名、女子82名の計158名の質問紙を得た。そのうち不備回答を除いた、男子63名、女子74名の計137名の有効回答を得た。



## 2. 調査期間

2015年7月から10月に実施した。

## 3. 調査形式

本調査は講義時間内に教室で行い、受講している学生に質問紙を配布し、集団法の形式で実施した。回答時間は15分程度であった。

## 4. 質問紙の構成

### (a) フェイスシート

調査の目的、諸注意、筆者の連絡先等を明記し、回答者には性別、年齢、学年の記入を求めた。

### (b) 親子間の信頼感に関する尺度

酒井(2005)が作成した親子間の対人的信頼感を測定する尺度。子どもが母親・父親への信頼感を評定するものと、母親・父親が子どもへの信頼感を評定する2種類から構成されているが、子ども用の高校生以上版を用いる。母親・父親との関係における質問がそれぞれ8項目からなり、「4:あてはまる」「3:ややあてはまる」「2:あまりあてはまらない」「1:あてはまらない」の4件法での回答を求めた。

### (c) 対人欲求尺度(渡部, 1999)

渡部(1999)が作成した、「賞賛」「非拒否」「回避」の3因子26項目で構成された尺度。「5:とてもあてはまる」「4:あてはまる」「3:どちらともいえない」「2:あてはまらない」「1:まったくあてはまらない」の5件法での回答を求めた。

### (d) 同調行動尺度(葛西・松本, 2010)

葛西・松本(2010)が作成した同調行動尺度を大学生向けに語句を変更し使用した。表現の変更の際は、大学院生数名で検討をした。「仲間への同調」「自己犠牲・追従」の2因子22項目で構成されている。「5:とてもあてはまる」「4:あてはまる」「3:どちらともいえない」「2:あてはまらない」「1:まったくあてはまらない」の5件法での回答を求めた。

## IV. 結 果

### 1. 信頼性の検討と因子構造の確認

#### A. 親子間の信頼感に関する尺度

青年期の子ども本人が母親・父親それぞれとの関係における信頼感を評定するために、酒井(2005)が作成した親子間の信頼感に関する尺度子ども用高校生以上版を使用した。

母親・父親との関係における質問が8項目からなり、「4:あてはまる」「3:ややあてはまる」「2:あまりあてはまらない」「1:あてはまらない」の4件法での回答を求めた。

尺度の構造を確認するため主成分分析を行ったところ、母親に抱く信頼感尺度に関しては、第1成分の寄与率が62.86%と高く次元性のもので解釈した。父親に抱く信頼感尺度についても同様に次元性が確認され、寄与率は68.81%であった。両尺度における項目の内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、母親に対するもので $\alpha = .91$ 、父親に対するもので $\alpha = .93$ であった。そのため、これ以降の分析では被験者が母親・父親に抱く信頼感として各8項目を加算した得点を、青年期の子どもが母親に抱く信頼感尺度の得点、子が父親に抱く信頼感尺度の得点とした。

#### B. 対人欲求尺度

対人欲求を測定するために、渡部(1999)が作成した「賞賛」「非拒否」「回避」の3因子26項目で構成され、5件法で回答を求める尺度を使用した。

26項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った結果、先行研究と同様の3因子構造が得られた(Table. 1)。また、因子負荷量が.35以上のものが25個抽出されたので、それを採用した。.35未満の項目は、項目21「断られるのが心配なので、誰かに頼みごとをあまりしたくない」の1つであった。それぞれの因子における $\alpha$ 係数に関しても、.73～.88の値が得られたため、使用に十分と判断した。



第1因子は10項目で構成 ( $\alpha = .88$ ) されており、「何か気の利いたことを言って人を感心させたい」、「みんなの注目をあびたい」、「社会で高く評価されるようなことをしたい」など他者からの賞賛を得たいという欲求を捉える項目群から構成されているため、先行研究と同様「賞賛欲求」と命名した。第2因子は11項目で

構成 ( $\alpha = .82$ ) されており、「例えば人から批判される可能性の高いいざごごのような場面には、最初からなるべく近づきたくない」「自分を嫌っている人とはなるべく顔を合わせたくない」など他者との関係を回避したいという欲求を捉える項目群から構成されるため「回避欲求」、第3因子は4項目で構成 ( $\alpha = .73$ ) され

Table. 1 対人欲求の因子分析の結果 (主因子法・Promax回転)

項目	負荷量
<b>第1因子 賞賛欲求(<math>\alpha = .88</math>)</b>	
5. 人に自分を印象づけたい	.79
3. 何か気の利いたことを言って人を感心させたい	.75
2. みんなの人気者になりたい	.71
8. みんなの注目をあびたい	.69
10. みんなから尊敬される人になりたい	.69
9. 社会で高く評価されるようなことをしたい	.67
4. 自分の得意なこと(例:勉強、スポーツ)をまわりの人に見てもらいたい	.64
1. 有能な人間だと、まわりから認められたい	.60
1. 人前ではいつもかっこよくありたい	.53
26. みんなに喜んでもらえる素晴らしいことをしたい	.51
<b>第2因子 回避欲求(<math>\alpha = .82</math>)</b>	
19. 例えば人から批判される可能性の高いいざごごのような場面には、最初からなるべく近づきたくない	.68
22. 何かにつけて批判するような人たちとのつきあいは、できるだけ避けたい	.68
25. 自分を嫌っている人とはなるべく顔を合わせたくない	.57
11. 人と深く関わるほど自分の嫌な部分を相手に知られそうで、積極的に人と深く関わりたいとは思わない	.56
14. 人の批判めいたことはあまり言いたくない	.55
16. 出来るだけ敵は作りたくない	.50
12. 誰からも嫌われたくない	.47
13. 人の感情を害しないかと心配なので、他の人の言うことに強く反論することはしたくない	.43
24. 一緒にどこかに行こうと誘っても断られたら、もう一度誘ってみる気にならない	.43
23. 人からの拒否や批判を避けるためには、たとえ人とあまり関わるのが出来なくなってもしょうがない	.42
2. どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	.42
<b>第3因子 迎合欲求(<math>\alpha = .73</math>)</b>	
20. 自分を変える努力をしても周囲の人と上手くやっていきたい	.74
15. 自分がしたいように行動するよりも、周囲の人から好まれるよう行動したい	.72
18. 自分の考えよりも自分の所属する集団の和を優先させたい	.62
17. みんなから変な人だと思われたくない	.54
累積寄与率(%) 第1因子	24.96
第2因子	39.83
第3因子	46.76

ており、「みんなから変な人だと思われたくない」、「自分の考えよりも自分の所属する集団の和を優先させたい」など他者から拒否されたくないという欲求を捉える項目群から構成されているため、「迎合」と命名した。

### C. 同調行動尺度

同調行動を把握するために、葛西・松本(2010)が作成した「仲間への同調」「自己犠牲・追従」の2因子22項目で構成され、5件法で回答を求める尺度を使用した。同調行動尺度の項

目内用を一部改変(例:「4. クラスや部活動などでみんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる」→改変後:「4. 学部・学科やサークル・部活動などでみんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる」)して質問紙調査を行ったことから、再度因子構造の確認を行った。

22項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った結果、2因子構造が得られた(Table. 2)。また、因子負荷量が.35以上のものが20個抽出されたので、それを採用した。.35未満の項目は、項目19「一人であると

Table. 2 同調行動の因子分析の結果 (主因子法・Promax回転)

項目	負荷量
<b>第1因子 自己犠牲・追従(<math>\alpha=.82</math>)</b>	
7. 自分の考えや意見を言うのを抑える	.80
4. 学部・学科やサークル・部活動などでみんなと意見が違うときは、自分の意見を取り下げる	.74
17. 多くの場合、人と議論するより、相手に従う	.69
5. 自分の意見を主張するより相手の考えや意見を聞く	.57
2. あまり目立つようなことはしたくない	.49
1. みんなと同じようにしようと思う	.51
3. 人と違ったことはしないでおこうと思う	.49
18. 友達に嫌な思いをさせてまで、自分の意見を通したくない	.46
6. いじめの場面を目撃しても、「いけないこと」とは思いながらも傍観者になってしまうことがある	.45
11. 何かをするとき、みんなと一緒にだと安心する	.43
<b>第2因子 仲間への同調(<math>\alpha=.80</math>)</b>	
12. 親しい友達と同じような格好や行動がしたい	.81
15. 私は、私の友だちがすることを私もする	.79
8. 友だちがブランド品・流行の商品などを持っていると、自分もほしくなる	.59
16. 友だちに、自分の味方になってくれるよう頼むことが多い	.53
21. 友だちとは趣味や好みが一致していてほしい	.50
14. 出来るだけ仲間と同じように行動したい	.50
20. 流行遅れになるのは嫌だ	.48
10. 何かを決めるときには誰かに相談する	.40
13. 自分で決断することは嫌いだ	.38
9. 話題になっているTVや漫画・小説などは見たり読んだりする	.38
累積寄与率(%)	第1因子 27.59
	第2因子 39.72

何となく不安で心細くなる」, 項目22「嫌だと思ってもその意見に従うことがある」の2つであった。それぞれの因子における $\alpha$ 係数に関しても, .80～.82の値が得られたため, 使用に十分と判断した。

第1因子は10項目で構成されており, 「自分の考えや意見を言うのを抑える」, 「人と違ったことはしないでおこうと思う」など自分を犠牲にしても友人に合わせようとする結果であったため「自己犠牲・追従」と命名した。第2因子は10項目で構成されており, 「親しい友達と同じような格好や行動がしたい」, 「友だちとは趣味や好みが一致してほしい」など積極的に他者と同じ行動を取りたいという思いからきている結果であったため「仲間への同調」と命名した。

## 2. 各尺度別性差の検討

### A. 親への信頼感

男女によって, 親への信頼感得点に差があるか検討した (Table. 3)。その結果, 父親信頼得点に有意な差は見られなかったが, 母親信頼得点には男女で有意な差 ( $t(135) = 3.35, p < .001$ ) が見られ女子の方が男子に比べ母親信頼得点が高かった。

Table. 3 親への信頼感による男女の $t$ 検定結果

	男子		女子		$t$ 値	比較
	$M$	SD	$M$	SD		
母親信頼得点	21.4	5.38	24.7	5.37	3.54***	男子<女子
父親信頼得点	21.3	5.53	20.4	6.64	.840	

\*\*\* $p < .001$

Table. 4 対人欲求の諸変数による男女の $t$ 検定結果

	男子		女子		$t$ 値	比較
	$M$	SD	$M$	SD		
賞賛	30.9	7.18	31.8	7.00	.716	
回避	35.3	7.18	38.7	5.76	3.06**	男子<女子
迎合	11.8	3.43	13.0	2.60	2.23*	男子<女子

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

### B. 対人欲求

下位尺度別に尺度を構成する項目の得点を加算し尺度得点を算出した後, 男女によって対人欲求の諸変数の得点に差があるか検討した (Table. 4)。

その結果, 賞賛に有意な差は見られなかったものの ( $t(135) = .716, n.s.$ ), 回避 ( $t(135) = 3.07, p < .01$ ), 迎合 ( $t(135) = 2.24, p < .05$ ) において男女で有意な差が見られ, 共に女子の方が男子に比べ回避, 迎合の得点が高かった。

### C. 同調行動

下位尺度別に尺度を構成する項目の得点を加算し尺度得点を算出した後, 男女によって同調行動の諸変数の得点に差があるか検討した (Table. 5)。

その結果, 仲間への同調に有意な差は見られなかったが ( $t(135) = .834, n.s.$ ), 自己犠牲・追従において有意な差 ( $t(135) = 2.44, p < .05$ ) が見られ, 女子の方が男子に比べ自己犠牲・追従の得点が高かった。

以上の結果から, 女性は男性に比べ母親への信頼が高く, 他者との関係を回避したいが関係を持つ際は自分を抑え他者の言うとおりに行動をとる傾向が高いといえる。このような結果

は、山本ら（2008）が示す、女性のほうが男性に比べ母親との結びつきが強く、甘えや親和傾向があるが故に他者からの傷つきへの耐性が弱く心を開くことに不安があると考えられる。このような不安から、女性は他者との関係を回避する傾向や他者の気に入るように調子を合わせる傾向が高くなり、自分を抑え他者の言うとおりに行動しやすいと推測される。この事実を明らかにするため、以下のような検討を行った。

### 3. 対人欲求と同調行動の関連

被験者全体を対象とした対人欲求と同調行動の関連について検討を行うため、まず、下位尺度別に尺度を構成する項目の得点を加算、尺度得点を算出し、相関分析を実施した（Table. 6）。

対人欲求の「賞賛」は、同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示した。また、対人欲求の「回避」「迎合」は、同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

対人欲求が同調行動に及ぼす影響をより具体的に検討するため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「回避」「迎合」を独立変数、同調行動の2つの下位尺度である「仲間への賞賛」

「自己犠牲・追従」を従属変数としたステップワイズ重回帰分析を行った（Table. 7, Figure. 1）。

①同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求「迎合」においてのみ有意であり、 $\beta$ （標準化偏回帰係数）は正に有意な値（ $\beta = .55, p < .001$ ）であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .30$ であり、有意であった（ $F(1, 135) = 59.1, p < .001$ ）。

②同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求「賞賛」の $\beta$ （標準化偏回帰係数）は負に有意な値（ $\beta = -.17, p < .05$ ）であり、対人欲求「回避」の $\beta$ （標準化偏回帰係数）は正に有意な値（ $\beta = .39, p < .001$ ）であった。また、対人欲求「迎合」の $\beta$ （標準化偏回帰係数）は正に有意な値（ $\beta = .43, p < .001$ ）であった。したがって、同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は、対人欲求「賞賛」「回避」「迎合」において有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .46$ であり、有意であった（ $F(1, 133) = 37.4, p < .001$ ）。

この結果から、以下のことが解釈できる。他

Table. 5 同調行動の諸変数による男女のt検定結果

	男性		女性		t 値	比較
	M	SD	M	SD		
仲間への同調	26.1	5.92	27.0	6.05	.834	
自己犠牲・追従	31.1	6.17	33.4	5.15	2.44*	男性 < 女性

\* $p < .05$

Table. 6 対人欲求と同調行動の相関係数（被験者全体）

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.24**	.23**	.18*	.02
回避		—	.48**	.19*	.55**
迎合			—	.55**	.58**
仲間への同調				—	.41**
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table. 7 対人欲求と同調行動の関連 (被験者全体)

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調			.55***	.30***
自己犠牲・追従	-.17*	.39***	.43***	.46***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

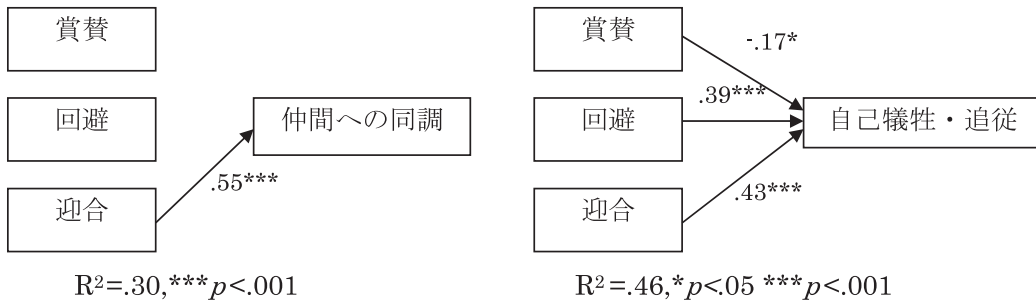


Figure. 1 対人欲求と同調行動の関連 (被験者全体)

者の気に入るように調子を合わせたい傾向が強い場合は、積極的に仲間と同じ行動をとる傾向が高いと考えられる。また、対人関係において他者から褒められたい欲求が弱く、他者との関係を回避したい欲求や他者の気に入るように調子を合わせたい傾向が強い場合は、自分を抑え他者の言うとおりに行動をとる傾向が高いと考えられる。対人欲求と同調行動に関連が見られたことから、性別による影響は見られるのか検討を行った。

#### 4. 性別と対人欲求及び同調行動の関連

各尺度別性別差の検討において、女性は男性に比べ対人欲求の「回避」「迎合」、同調行動の「自己犠牲・追従」が高かったことから、性別によって対人欲求及び同調行動の関連に違いがあるのか検討するため、男女別に相関分析を実施した (Table. 8)。男子において、対人欲求の「賞賛」は同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示した。また、対人欲求の「回避」「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

女子において、対人欲求の「回避」は同調行

動の「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。また、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

性別によって対人欲求が同調行動に及ぼす影響をより具体的に検討するため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「回避」「迎合」を独立変数、同調行動の2つの下位尺度である「仲間への賞賛」「自己犠牲・追従」を従属変数としたステップワイズ重回帰分析を行った (Table. 9, Figure. 2)。

##### ①同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

男子において、対人欲求の「賞賛」において有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に有意な値 ( $\beta = .25, p < .05$ ) であった。また、「迎合」においても有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に有意な値 ( $\beta = .59, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .48$  であり、有意であった ( $F(2, 60) = 28.1, p < .001$ )。女子においては、対人欲求の「回避」において有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に有意な値 ( $\beta = -.22, p < .05$ )



Table. 8 対人欲求と同調行動の相関 (男女別)

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.13	.26*	.40**	-.14
回避		—	.56**	.40**	.65**
迎合			—	.65**	.59**
仲間への同調				—	.45**
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

女子	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.34**	.18	-.01	.17
回避		—	.32**	-.06	.38**
迎合			—	.45**	.51**
仲間への同調				—	.37**
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table. 9 対人欲求と同調行動の関連 (男女別)

男子	独立変数			
	賞賛	回避	迎合	R <sup>2</sup>
仲間への同調	.25*		.59***	.48***
自己犠牲・追従	-.31***	.45***	.42***	.59***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

女子	独立変数			
	賞賛	回避	迎合	R <sup>2</sup>
仲間への同調		-.22*	.52***	.25***
自己犠牲・追従		.25*	.44***	.32***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

であった。また、「迎合」においても有意であり、 $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に有意な値 ( $\beta = .52, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .25$  であり、有意であった ( $F(2, 71) = 11.5, p < .001$ )。したがって、同調行動「仲間への同調」に及ぼす影響は、男子は対人欲求の「賞賛」「迎合」、女子は対人

欲求の「回避」「迎合」において有意であるといえる。

②同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

男子において、対人欲求の「賞賛」の  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に有意な値 ( $\beta = -.31, p < .001$ ) であり、対人欲求の「回避」の  $\beta$  (標

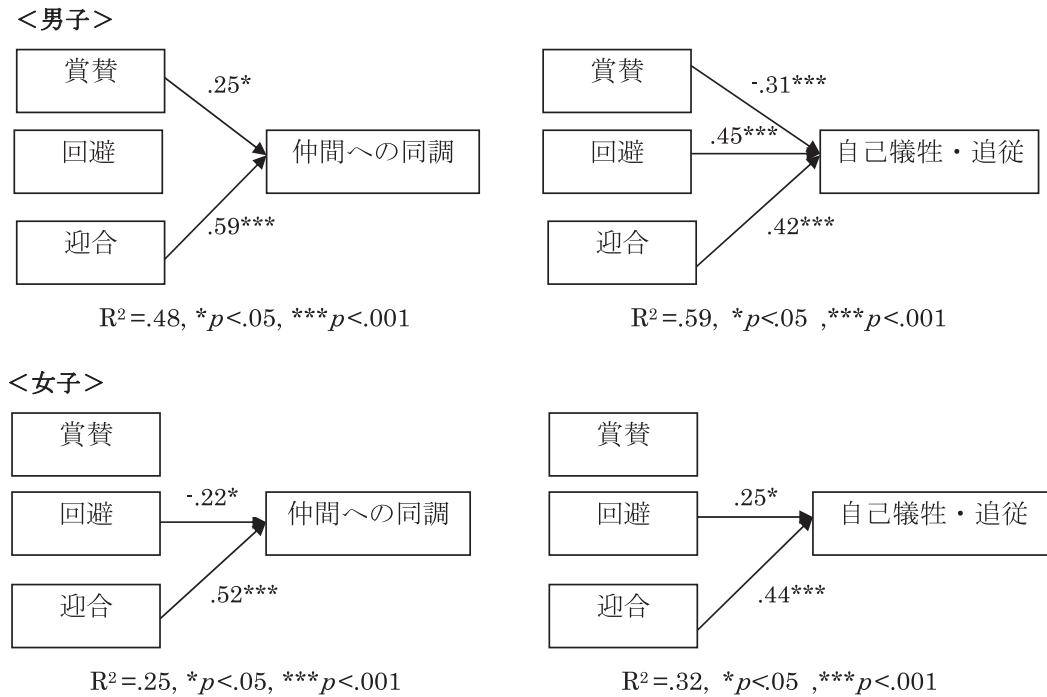


Figure. 2 対人欲求と同調行動の関連 (男女別)

準化偏回帰係数)は正に有意な値 ( $\beta = .45, p < .001$ )であった。また、対人欲求の「迎合」の $\beta$ (標準化偏回帰係数)も正に有意な値 ( $\beta = .42, p < .001$ )であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .59$ であり、有意であった ( $F(3, 59) = 27.7, p < .001$ )。女子においては、対人欲求の「回避」において有意であり、 $\beta$ (標準化偏回帰係数)は正に有意な値 ( $\beta = .25, p < .05$ )であった。また、「迎合」においても有意であり、 $\beta$ (標準化偏回帰係数)は正に有意な値 ( $\beta = .44, p < .001$ )であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2 = .32$ であり、有意であった ( $F(2, 71) = 16.6, p < .001$ )。したがって、同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は、男子は対人欲求の「賞賛」「回避」「迎合」、女子は対人欲求の「回避」「迎合」において有意であるといえる。

### 5. 親への信頼感タイプと性別、対人欲求及び同調行動の関連

次に、父母相互間への信頼感タイプによって同調行動に及ぼす対人欲求の影響について検討を行うため、相関分析を実施した (Table. 10)。

父母間の信頼関係のタイプは以下の方法で分類した。青年期の子どもが母親と父親に抱く信頼感を得点化し、それぞれの平均値からH群・L群に分け、各群の組み合わせから4群を構成した。第1の群は、母親・父親両者への信頼感得点がH群のもので、両者信頼群 (以下HH群,  $n = 66$ )とした。第2の群は、母親に抱く信頼感得点がH群、父親に抱く信頼感得点がL群のもので、母親信頼群 (以下HL群,  $n = 18$ )とし、第3の群は、母親に抱く信頼感得点がL群、父親に抱く信頼感得点がH群のもので、父親信頼群 (以下LH群,  $n = 13$ )とした。第4の群は、母親・父親両者への信頼感得点がL群であり、両者不信群 (以下LL群,  $n = 40$ )とした。

HH群の男子 ( $n = 28$ )では、対人欲求の「回

避」は同調行動の「自己犠牲・追従」と正の相関、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。HH群の女子 (n = 38) では、対人欲求の「回避」は同調行動の「自己犠牲・

追従」と正の相関、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。HL群の男子 (n = 4) では、データ数が少ないため相関関係が検討できなかった (Table. 10)。HL群の女子 (n

Table. 10 親への信頼感タイプと性別による対人欲求及び同調行動の相関関係

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	-.07	.06	.21	-.30
回避		—	.78**	.33	.74**
迎合			—	.61**	.69**
仲間への同調				—	.54**
自己犠牲・追従					—
					** <i>p</i> <.01
<b>HH, 男子(n=28)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.48**	.07	-.26	.12
回避		—	.55**	.20	.56**
迎合			—	.48**	.51**
仲間への同調				—	.49**
自己犠牲・追従					—
					** <i>p</i> <.01
<b>HH, 女子(n=38)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	-.04	.74	.73	.13
回避		—	.61	.47	.59
迎合			—	.94	.61
仲間への同調				—	.76
自己犠牲・追従					—
					** <i>p</i> <.05
<b>HL, 男子(n=4)</b>					
	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.25	.45	.02	.08
回避		—	.05	.21	.29
迎合			—	.41	.54*
仲間への同調				—	.41
自己犠牲・追従					—
					* <i>p</i> <.05
<b>HL, 女子(n=14)</b>					

**LH, 男子(n=11)**

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.51	.25	.38	-.34
回避		—	.70*	.36	.46
迎合			—	.44	.37
仲間への同調				—	-.25
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$

**LH, 女子(n=2)**

データ数不足のため相関関係なし

**LL, 男子(n=20)**

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.12	.39	.45*	.10
回避		—	.15	.38	.51*
迎合			—	.74**	.51*
仲間への同調				—	.51*
自己犠牲・追従					—

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

**LL, 女子(n=20)**

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	回避	迎合	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.37	.22	.08	.42
回避		—	.13	.38	.54*
迎合			—	.48*	.54*
仲間への同調				—	.17
自己犠牲・追従					—

\* $p < .05$

= 14) では、対人欲求の「迎合」は同調行動の「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。LH群の男子 (n = 11), 女子 (n = 2) では、ともにデータ数が少ないため相関関係が検討できなかった (Table. 10)。LL群の男子 (n = 20) では、対人欲求の「賞賛」は同調行動の「仲間への同調」、対人欲求の「回避」は同調行動の「自己犠牲・追従」、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。LL群の女

子 (n = 20) では、対人欲求の「回避」は同調行動の「自己犠牲・追従」、対人欲求の「迎合」は同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した (Table. 10)。

HH群, LL群の男女ごとに、対人欲求が同調行動に及ぼす影響をより具体的に検討するため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「回避」「迎合」を独立変数、同調行動の2つの下位尺度である「仲間への賞賛」「自己犠牲・追従」を従属変数としたステップワイズ重回帰

分析を行った(Table. 11 ~ 14, Figure 3 ~ 6)。HL群の女子において対人欲求と同調行動の相関関係はあったが、データ数が足りないことから一般的にそのような傾向があるとは言い難いと考え重回帰は行わなかった。また、相関関係がなかったHL群男子、LH群男女においても同様に重回帰を行うのに十分なデータ数でないため実施しなかった。

①HH群, 男子, 同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「迎合」においてのみ有意であり(Table. 11, Figure. 3),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .60, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .37$ であり, 有意であった ( $F(1, 26) = 15.0, p < .001$ )。

②HH群, 男子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」においてのみ有意であり(Table. 11, Figure. 3),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .74, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .55$ であり, 有意であった ( $F(1, 26) = 31.8,$

$p < .001$ )。

③HH群, 女子, 同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「賞賛」において有意であり(Table. 12, Figure. 4),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に優位な値 ( $\beta = -.29, p < .05$ ) であった。また、対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 12, Figure. 4),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .50, p < .001$ ) であった。したがって、HH群の女子における同調行動「仲間への同調」に及ぼす影響は、対人欲求「賞賛」「迎合」において有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .31$ であり, 有意であった ( $F(2, 35) = 7.88, p < .001$ )。

④HH群, 女子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」においてのみ有意であり (Table. 12, Figure. 4),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .56, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .31$ であり, 有意であった ( $F(1, 36) = 16.5, p < .001$ )。

⑤LL群, 男子, 同調行動「仲間への同調」に

Table. 11 HH, 男子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数				R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合		
仲間への同調			.60***		.37***
自己犠牲・追従		.74***			.55***

\*\*\* $p < .001$

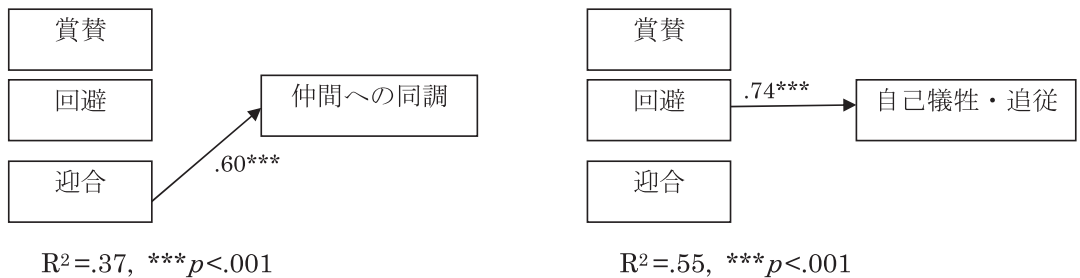


Figure. 3 HH, 男子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)



及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「迎合」においてのみ有意であり (Table. 13, Figure. 5),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .74, p < .001$ ) であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .55$ であり, 有意であった ( $F(1, 18) = 21.8,$

$p < .001$ )。

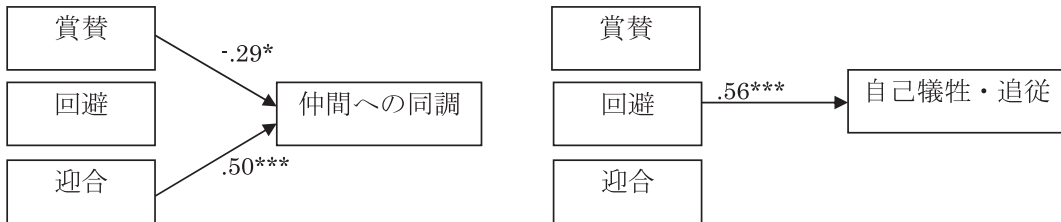
⑥LL群, 男子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」において有意であり (Table. 13, Figure. 5),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .45, p < .05$ ) であった。また,

Table. 12 HH, 女子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調	-.29*		.50***	.31***
自己犠牲・追従		.56***		.31***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$



$R^2 = .31, *p < .05$  \*\*\* $p < .001$

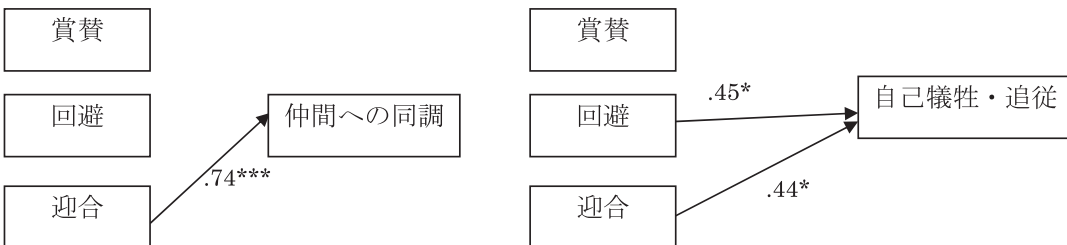
$R^2 = .31, ***p < .001$

Figure. 4 HH, 女子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

Table. 13 LL, 男子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調			.74***	.55***
自己犠牲・追従		.45*	.44*	.45**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$



$R^2 = .55, ***p < .001$

$R^2 = .45, *p < .05$

Figure. 5 LL, 男子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

Table. 14 LL, 女子と対人欲求及び同調行動の関連

従属変数	独立変数			R <sup>2</sup>
	賞賛	回避	迎合	
仲間への同調		-.45*	.54**	.43**
自己犠牲・追従		.47*	.48*	.52**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

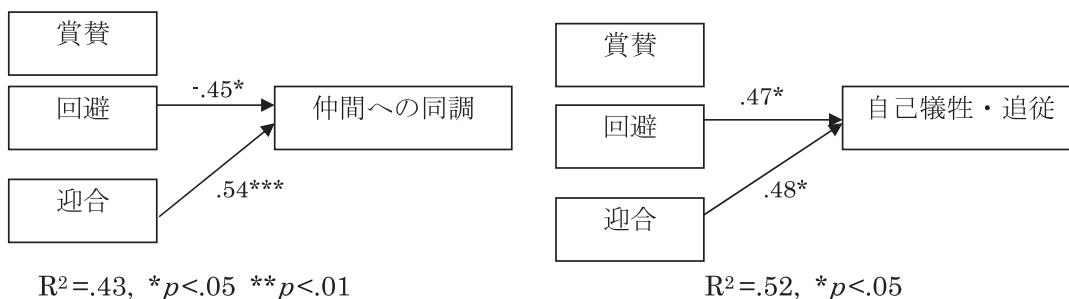


Figure. 6 LL, 女子と対人欲求及び同調行動の関連 (パス図)

対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 13, Figure. 5),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .44, p < .05$ ) であった。したがって, LL群の男子における同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は, 対人欲求「回避」「迎合」において有意であった。なお, このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .45$ であり, 有意であった ( $F(2, 17) = 6.90, p < .01$ )。

⑦LL群, 女子, 同調行動「仲間への同調」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」において有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は負に優位な値 ( $\beta = -.45, p < .05$ ) であった。また, 対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .54, p < .01$ ) であった。したがって, LL群の女子における同調行動「仲間への同調」に及ぼす影響は, 対人欲求「回避」「迎合」において有意であった。なお, このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .43$ であり, 有意であった ( $F(2, 17) = 6.52, p < .01$ )。

⑧LL群, 女子, 同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす対人欲求の影響

対人欲求の「回避」において有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .47, p < .05$ ) であった。また, 対人欲求の「迎合」においても有意であり (Table. 14, Figure. 6),  $\beta$  (標準化偏回帰係数) は正に優位な値 ( $\beta = .48, p < .05$ ) であった。したがって, LL群の女子における同調行動「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は, 対人欲求「回避」「迎合」において有意であった。なお, このときの回帰式全体の説明率は,  $R^2 = .52$ であり, 有意であった ( $F(2, 17) = 9.01, p < .01$ )。

## V. 考察

本研究は, 青年期の両親への信頼感がどのように心理的側面・行動的側面に影響するかについて, 対人欲求および同調行動との関連から検討し, その際性別による影響も検討してきた。

### 1. 性別による対人欲求及び同調行動の関連

男子が積極的に他者の意見, 行動を受け入れる原因には, 賞賛欲求・迎合欲求が関係しているが, 回避欲求は関係していないといえる

(Table. 9, Figure. 2)。それに対し、女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因には、迎合欲求と回避欲求が関係しているが、男子とは異なり賞賛欲求は関係していないといえる (Table. 9, Figure. 2)。また、男女共に対人欲求の「迎合欲求」が同調欲求の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたことから、性別による影響はないと考えられる (Table. 9, Figure. 2)。

このことから、“男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、褒められたいという欲求があるからであって、そこに回避欲求は関係しない”といえる。鈴木・菅原 (2014) が承認欲求と種々のデモグラフィック要因について検討した結果、若年層において男女共に賞賛欲求が高く、且つ男子のほうが女子に比べ賞賛欲求が高く、回避欲求が低かったことが示唆され、その背景として男子のほうが積極的に社会にて活動することが求められることが多いので、より積極的な活躍を促進すると考えられる賞賛欲求が喚起されやすいからではないかと述べている。また、原田・青山 (2011) は、他者から褒められたい人は積極的に行動し、他者の注目を集め集団の中に自分の居場所・役割を確保しようとするとして述べている。

つまり、男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、社会において広い交友関係を求められるので、多くの他者から褒められ注目を集めることで、多くの居場所を確保したいという欲求が背景にあるためではないかと考えられる。回避欲求が関係してしまうと、他者との繋がりが途絶え、広い交友関係や多くの居場所を確保できないので、回避欲求が関係しなかったと解釈する。

それに対し、“女子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者との関係を維持したい欲求があるからであって、そこに賞賛欲求は関係しない”といえる。他者との関係を維持するということは、深く親密な関係を女子は望んでいるともいえる。小塩 (1998) は、深い友人関係は互いに気を使うことなく親密な

付き合いとなり、心理的安定感をもたらすので自尊感情が高くなると述べている。また、女子は共感して共鳴しあうといった他者と1つになるような関係を望み、他者と密着した関係をもつという (泉水・小池, 2011)。

つまり、女子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者と1つになるような親密な関係になりたいという欲求が背景にあるためといえる。また、このような関係を維持することによって心理的安定感をもたらされるので、女子は自尊感情が高いのではないかと考えられる。このような密着した対人関係のありかたは、浮いた存在になることを避け自分を守るために特定の人と密着したいという女子特有の考えが関連していると解釈できる。賞賛欲求が関係しない理由としては、褒められ居場所・役割を確保することよりも、まずは親密な関係を維持することを女子は重視しているためと考える。しかしながら、安心感だけでなく嫌われたらどうしようといった不安感も共存していると思われ極めて不安定な状態である可能性もあるといえる。

男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、賞賛欲求、迎合欲求、回避欲求が関与しているといえる (Table. 9, Figure. 2)。一方で、女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求と迎合欲求が関係しているが、男子と異なり賞賛欲求は関与していないといえる (Table. 9, Figure. 2)。また、男女共に対人欲求の「回避欲求」「迎合欲求」が同調欲求の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていたことから、性別による影響はないと考えられる (Table. 9, Figure. 2)。

このことから、“男子が意見、行動を心から納得できない他者に対して自己を抑え表面的な同調行動を取るのには、他者から褒められたくないという欲求があるからである”といえる。男子は、先にも述べたが積極的に社会にて活動す

ることが求められるので、積極的な活躍を促進すると考えられる他者からの賞賛が重要となる(鈴木・菅原, 2014)。原田・青山(2011)が、他者から褒められたい人は積極的に行動し、他者の注目を集め集団の中に自分の居場所・役割を確保しようとする述べていることから、男子にとって賞賛は向社会的行動において必要であるといえる。また、泉水・小池(2011)によると、男子は他者と自分は異なる存在であるという認識を持ち合わせているという。

つまり、男子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取るのには、自分とは異なる考えを持った存在と認識した他者に褒められ、居場所・役割を確保したくないが、納得できない相手でも社会で活動を共有する相手になるかもしれないので、関わる際にはできるだけ摩擦を少なくするため自己を抑え同調しようという思いが背景にあるためと考えられる。

一方で、“女子は意見、行動を心から納得できない他者に対して自己を抑え表面的な同調行動を取る際において賞賛欲求は影響しない”と考えられる。女子が、意見、行動・態度を心から納得できない他者に対して、表面的な同調行動を取る際に賞賛欲求が関係しないのは何故だろうか。先にも述べたが、賞賛欲求が喚起されると人は積極的に行動し他者の注目を集めることで、集団の中に居場所・役割を確保しようとするという(原田・青山, 2011)。また、田村・石井(2014)によると、女子には“何かあった時に複数の他者から自分を支えてほしい”という思いがあるという。

つまり、女子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取る際において賞賛欲求が影響しないのは、何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思いがあるので、賞賛欲求が関係してしまうと自分の居場所・役割が納得できない他者との間に確保され、深い関係となり自己開示が求められ、何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思惑が気付かれ

てしまうのではないかとこの恐れが背景にあるためと考えられる。

男女ともに「仲間への同調行動」に及ぼす影響が「迎合欲求」と共通していたことから、今の大学生の男女において“他者に気に入られたい”という欲求が仲間への同調行動をする際に重要であるといえる。また、男女ともに「自己犠牲・追従」に及ぼす影響が「回避欲求」「迎合欲求」と共通していたことから、今の大学生の男女において“できれば関わりたくないが関わるのであれば気に入られたい”という欲求が自己犠牲・追従行動をする際に重要であるといえる。

## 2. 親への信頼感タイプと性別、対人欲求及び同調行動の関連

母親、父親を共に信頼している男子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因には、迎合欲求が関与しているが、賞賛欲求と回避欲求は関係していないと考えられる(Table. 11, Figure. 3)。また、母親、父親を共に信頼していない男子が積極的に他者の意見、行動・態度を受け入れる原因も、母親・父親を共に信頼している男子と同様の結果であった(Table. 13, Figure. 5)。

男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者に気に入られたいという思いがあるからであるという特徴は、母親・父親への信頼感の高低による影響(Table. 11, 13, Figure. 3, 5)、性別による影響ではないと考えられる(Table. 9, Figure. 2)。しかしながら、全被験者検討において男子は女子と異なり対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたにも関わらず(Table. 9, Figure. 2)、HH群、LL群の男子では、その影響がなかったことから(Table. 11, 13, Figure. 3, 5)、男子の両親への信頼感の高低は男子における特徴であった同調行動の「仲間への同調」に及ぼす影響である対人欲求の「賞賛欲求」の関与をなくすということが解釈できる。

このことから、“男子の母親、父親への信頼感の高低は、男子が他者の意見、行動・態度を受け入れ同調行動を取る際において賞賛欲求の関与をなくす”といえる。

Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論から、親への信頼感とは他者への信頼感に影響するといえる。つまり、母親・父親への信頼感が高い男子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取る際において賞賛欲求が関与しないのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者との間には既に自分の居場所・役割を確保できているので、わざわざ居場所・役割を確保する行動を起こす必要がないという思いが背景にあるためであると解釈できる。あるいは、信頼している両親から褒められているので、賞賛欲求が満たされているため賞賛欲求が関係しない可能性も考えられる。また、母親・父親への信頼感が低い男子に他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取る際において賞賛欲求が影響しないのは、他者への信頼感が低く、信頼していない他者との間に自分の居場所・役割を確保しようとは思わないので、居場所・役割を確保する行動を起こす必要がないという思いが背景にあるためであると解釈できる。

また、対人欲求の「回避欲求」が同調行動の「仲間への同調」に関与していない特徴が全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) ・親への信頼感の検討 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5) の双方において、男子に共通して見られたことから、親への信頼感の高低に関係なく男子はやはり社会において広い交友関係を求められるので、回避欲求が関係してしまうと、他者との繋がりが途絶え、広い交友関係や多くの居場所を確保できないので、回避欲求が関与しなかったと解釈する。

母親、父親を共に信頼している男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求が関係しているが、賞賛欲求と迎合欲求は関係していないと考えられる (Table. 11, Figure. 3)。また、母親、父親を

共に信頼していない男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求と迎合欲求が関係しているが、賞賛欲求は関係していないと考えられ (Table. 13, Figure. 5)、迎合欲求が関係しているところは、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) における男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因と同じであった。

男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取るのには、他者との関係を回避したいがそれができない場合には自己を抑えるという思いがあるからであるという特徴は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) ・母親、父親への信頼感の高低による検討 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5) でも見られたことから、母親、父親への信頼感の高低、性別による影響ではないと考えられる。しかし、全被験者検討において男子は女子と異なり対人欲求の「賞賛欲求」が同調欲求の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていたにも関わらず (Table. 9, Figure. 2)、HH群、LL群の男子では対人欲求の「賞賛欲求」が同調欲求の「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていなかったことから (Table. 11, 13, Figure. 3, 5)、母親・父親への信頼感の高低は男子における特徴であった同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響である対人欲求の「賞賛欲求」の関与をなくすということが解釈できる。また、対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響は全被験者検討では見られなかったが (Table. 9, Figure. 2)、両親への信頼感の高低によって対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響に差が見られた (Table. 11, 13, Figure. 3, 5)。このことから、“男子の母親、父親への信頼感の高低は、男子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取る際において、賞賛欲求の関与をなくす・男子の母親、父親への信頼感の高さは迎合



欲求の関与をなくす”といえる。

先にも述べたが、Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論から、親への信頼感は他者への信頼感に影響するといえる。また、森下・三原 (2015) によると、親との信頼感によって形成された内的作業モデルは幼少期に形成されるとしても、それは生涯変わらないというような固定したものではなく、その後に関係や体験を通じ、徐々に変容するものであるという。

つまり、母親・父親への信頼感が高い男子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取る際に賞賛欲求と迎合欲求が関与しないのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者との間には既に自分の居場所・役割が確保されており、信頼しているから他者も自分のことを信頼している・気に入ってくれていると思うので、わざわざ居場所・役割を確保する行動や気に入られようとする行動を起こす必要がないという思いが背景にあるためであると解釈できる。母親・父親への信頼感が低い男子が他者の意見、行動を心から納得できないにも関わらず表面的な同調行動を取る際に賞賛欲求が影響しないのは、他者への信頼感が低く、信頼していない他者との間に自分の居場所・役割を確保しようとは思わないので、居場所・役割を確保する行動を起こす必要がないという思いがあるためと解釈できる。男子における両親への信頼感の低さは自己犠牲・追従の際における賞賛欲求の関係をなくす一方で、“男子の母親、父親への信頼感の低さは、迎合欲求と自己犠牲・追従に影響を及ぼしにくい (Table. 9, 13, Figure. 2, 5)” といえ、男子において親への信頼感が迎合欲求、自己犠牲・追従に影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

母親、父親を共に信頼している女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因には、賞賛欲求と迎合欲求が関係しているが、回避欲求は関係していないと考えられる (Table. 12, Figure. 4)。一方、母親・父親を共に信頼していない女子が積極的に他者の意見、行動を受け

入れる原因には、回避欲求と迎合欲求が関係しているが、賞賛欲求は関与していないと考えられ (Table. 14, Figure. 6)、この結果は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) における女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる原因と同じ対人欲求内容が関係していた。

女子が他者の意見、行動を受け入れ同調行動を取るのには、他者に気に入られたいという思いがあるからであるという特徴は、母親・父親への信頼感の高低による影響 (Table. 12, 14, Figure. 4, 6)、性別による影響ではないと考えられる (Table. 9, Figure. 2)。しかし、性差の検討において、女子は男子と異なり対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」に及ぼす影響は見られなかったにも関わらず (Table. 9, Figure. 2)、HH群の女子において対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」に負の影響を及ぼしていたことから (Table. 12, Figure. 4)、女子において親への信頼感が高い場合において、対人欲求の「賞賛欲求」は同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼすと考えられる。また、全被験者検討において、女子は男子と異なり対人欲求の「回避欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたにも関わらず (Table. 9, Figure. 2)、HH群の女子において対人欲求の「回避欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていなかったことから (Table. 12, Figure. 4)、両親への高い信頼感が高い場合において、女子は対人欲求の「回避欲求」は同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼさなくなると考えられる。

このことから、“女子の母親、父親への高い信頼感には、女子が積極的に他者の意見、行動・態度を受け入れる際において、賞賛欲求の低下を生じさせ、回避欲求の関係をなくす”といえる。

Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論から、親への信頼感は他者への信頼感に影響するといえる。また、賞賛欲求が喚起されると人は積極的に行動し他者の注目を集めることで、集団の中に居場所・役割を確保しようとするという (原

田・青山, 2011)。

つまり、女子の母親・父親への高い信頼感が積極的に他者の意見、行動を受け入れる際において原因となる賞賛欲求の低下を生じさせるのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者との間には既に自分の居場所・役割が確保されている、あるいは、信頼している親から十分に褒められているので、他者から褒められることで注目を集め、集団の中に居場所・役割を確保したいという自身の欲求を満たす必要がないからであると解釈できる。また、母親・父親への信頼感が高い女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる際において回避欲求が関係しないのは、他者への信頼感が高いので、共感して共鳴しあうといった他者と1つになるような関係が既にできている・信頼している他者との関係を回避したいとは思わないためであると解釈する。

一方、母親・父親を共に信頼していない女子が積極的に他者の意見、行動を受け入れる因果関係が (Table. 14, Figure. 6), 全被験者女子と同じ因果関係であったことから (Table. 9, Figure. 2), “女子の母親、父親への信頼感の低さは、対人欲求 (賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求) と同調行動 (仲間への同調) に影響を及ぼしにくい” といえる。男子は母親・父親への信頼感の低さが対人欲求と積極的に他者の意見、行動・態度を受け入れる行動といった仲間への同調行動に影響を及ぼしているにも関わらず (Table. 13, Figure. 5), 女子において親への信頼感が影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

母親、父親を共に信頼している女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求が関係しているが、賞賛欲求と迎合欲求は関係していないと考えられる (Table. 12, Figure. 4)。それに対し、母親・父親を共に信頼していない女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因には、回避欲求と迎合欲求が関与しているが、賞

賛欲求は関与していないと考えられ (Table. 14, Figure. 6), この結果は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2) における女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず、自己を抑え表面的に他者と同じ行動を取る原因と同じ対人欲求内容が関係していた。

女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取るのには、他者との関係を回避したいがそれができない場合には自己を抑えるという思いがある、そして、賞賛欲求が関係しないという特徴は、全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2)・母親、父親への信頼感の高低による検討 (Table. 12, 14, Figure. 4, 6) でも見られたことから、母親、父親への信頼感の高低、性別による影響ではないと考えられる。しかし、対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響が全被験者検討では見られたが (Table. 9, Figure. 2), HH群の女子ではその影響がなかったことから (Table. 12, Figure. 4), 両親への信頼感が高い場合において女子は、同調行動の「自己犠牲・追従」に及ぼす影響である対人欲求の「迎合欲求」の関与をなくすと考えられる。

このことから、“女子の母親、父親への高い信頼感、女子が他者の意見、行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取る際において、迎合欲求の関与をなくす” といえる。

Bowlby (1973) の内的作業モデルの理論によると、親への信頼感とは他者への信頼感に影響するといえることから、母親・父親への信頼感が高い女子が他者の意見、行動・態度を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取る際において迎合欲求が関係しないのは、他者への信頼感が高く、信頼している他者も自分のことを信頼している・気に入ってくれていると思うので、気に入られたいという思いが湧かないためであると解釈できる。

一方、母親・父親を共に信頼していない女子が他者の意見、行動を心から納得していないに

も関わらず表面的に他者と同じ行動を取る因果関係が (Table. 14, Figure. 6), 全被験者女子と同様の因果関係を示したことから (Table. 9, Figure. 2), “女子の母親, 父親への信頼感の低さは, 対人欲求 (賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求) と同調行動 (自己犠牲・追従) に影響を及ぼしにくい” といえる。男子は母親・父親への信頼感の低さが対人欲求と表面的な同調行動といった自己犠牲・追従に影響を及ぼしているにも関わらず (Table. 13, Figure. 5), 女子において親への信頼感が影響を及ぼさないのはなぜなのか, 更なる検討が今後必要になってくるであろう。

また, 対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「自己犠牲・追従」に関係しない特徴が全被験者検討 (Table. 9, Figure. 2), 両親への信頼感の検討 (Table. 12, 14, Figure. 4, 6) の双方において女子に共通して見られたことから, 両親への信頼感の高低に関係なく女子には, 先にも述べたが “何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思いがある” という特徴があるので, 賞賛欲求が関係してしまうと自分の居場所・役割が納得できない他者との間に確保され, 深い関係となり自己開示が求められ, 何かあった時にだけ自分を支えてほしい・助けてほしいという思惑が気付かれてしまうのではないかとこの恐れが背景にあるためと考えられる。

男女ともに “他者の意見, 行動を受け入れ同調行動を取るの, 他者に気に入られたいという思いがあるから” という特徴が, 母親・父親への信頼感の高低による影響 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5), 性別による影響 (Table. 9, Figure. 2) でも見られたことから, 母親・父親への信頼感の高低に関係なく, 今の大学生の男女において “他者に気に入られたい” という欲求が仲間への同調行動をする際に重要であるといえる。

また, 男女ともに “他者の意見, 行動を心から納得していないにも関わらず表面的に他者と同じ行動を取るの, 他者との関係を回避した

いがそれができない場合には自己を抑えるという思いがあるから” という特徴が, 母親, 父親への信頼感の高低による影響 (Table. 11, 13, Figure. 3, 5), 性別による影響 (Table. 9, Figure. 2) でも見られたことから, 母親・父親への信頼感の高低に関係なく, 今の大学生の男女において “納得できない他者との関係は避けたい” という欲求が自己犠牲・追従行動をする際に重要であるといえる。

## VI. おわりに

青年期の両親への信頼感がどのように心理的側面・行動的側面に影響するかについて, 対人欲求および同調行動との関連から検討し, その際性別による影響も検討してきた。

男女という性別が, 対人欲求及び同調行動に及ぼす影響に違いを生じさせることがわかった。男子が「仲間への同調」を取るのには褒められたいからであって, 女子とは異なり関係を維持したい・回避したいという欲求は関与しないことがわかり, 女子が「仲間へ同調」を取るのには関係を維持し親密な関係になりたいからであって, 男子とは異なり褒められたいという欲求は関与しないということがわかった。また, 男子が「自己犠牲・追従」を取るのには褒められたいという思いがない時であって, 女子は「自己犠牲・追従」の際に男子とは異なり賞賛欲求が関与しないということがわかった。

次に, 両親への信頼感が対人欲求及び同調行動に及ぼす影響が見られるか検討を行った。HL群・LH群においてはデータ不足のため, 今回検討が行えなかったため, 今後データ数を増やし検討を行う必要があるであろう。

男子において両親への高い・低い信頼感は「仲間への同調」を取る際に「賞賛欲求」の関与をなくすことがわかった。また, 男子において両親への高い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際に「賞賛欲求」「迎合欲求」の関与をなくすこと, 男子において両親への低い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際に「賞賛欲求」の関与

をなくすことがわかった。しかし、男子の母親、父親への信頼感の低さは、迎合欲求と自己犠牲・追従に影響を及ぼしにくいことがわかり、影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

一方、女子において両親への高い信頼感は「仲間への同調」を取る際に「賞賛欲求」の影響を生じさせ、「回避欲求」の関与をなくすことがわかった。しかし、女子において両親への低い信頼感が対人欲求（賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求）と仲間への同調に影響を及ぼしにくいことがわかり、女子において両親への信頼感の低さが影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。また、女子において両親への高い信頼感は「自己犠牲・追従」を取る際に「迎合欲求」の関与をなくすことがわかった。しかし、女子において両親への低い信頼感が対人欲求（賞賛欲求・回避欲求・迎合欲求）と自己犠牲・追従に影響を及ぼしにくいことがわかり、女子において両親への信頼感の低さが影響を及ぼさないのはなぜなのか、更なる検討が今後必要になってくるであろう。

全体を通し、男女ともに対人欲求の「迎合欲求」が同調行動の「仲間への同調」に影響を及ぼしていたことから、母親・父親への信頼感の高低による影響、性別による影響ではないと考えられる。今の大学生の男女において“他者に気に入られたい”という欲求が仲間への同調行動をする際に重要であると解釈できるが、なぜ現代の大学生男女は仲間への同調行動をする際に他者に気に入られたい欲求があるのか、今後更なる検討が要るだろう。また、男女ともに対人欲求の「回避欲求」が「自己犠牲・追従」に影響を及ぼしていたことから、母親・父親への信頼感の高低による影響、性別による影響ではないと考えられる。今の大学生の男女において“できれば関わりたくない”という欲求が自己犠牲・追従行動をする際に重要であると解釈した。やはり、納得のできない他者との関係は男女ともに避けたいようである。

さらに、女子においては対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」に関係しないという特徴が、全被験者検討で見られたことから、女子にとって同調行動の際に「賞賛欲求」は重視していないといえるが、両親への信頼感によって重視されることもあることがわかった。また、男子においては対人欲求の「賞賛欲求」が同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」において重要であったが、両親への信頼感によって「賞賛欲求」は重視されなくなることがわかった。

本研究において、仮説とはやや異なる結果となったが、両親への信頼感是对人欲求及び同調行動に影響を及ぼすことがわかった。また、上記で挙げた以外の今後の課題として以下のことをあげる。本研究において、大学生を対象に質問紙調査を行ったが、親元を離れ一人暮らしをしている学生も多数いるかと思われる。また、離婚家庭においては一人親の場合もあるであろう。よって、母親・父親への信頼感を想起するのが難しかった学生もいるのではなかろうか。その点を考慮し、今後は家族との同居の有無・親の離婚の有無といったデモグラフィック要因に着目した研究が必要となるであろう。さらに、母親もしくは父親のみを高く信頼している場合の影響も調べる必要があるといえる。

## 謝 辞

修士論文の執筆にあたり、お忙しい中丁寧なご指導・ご指摘をしていただいた指導教授である小田切紀子教授に心より感謝致します。

副査を引き受けてくださった大矢泰士准教授に厚くお礼を申し上げます。

また、質問紙調査に協力してくださった東京国際大学小田切紀子教授、大矢泰士准教授、および貴重な講義時間を割いてくださった学生の皆様に深く感謝致します。

最後に、質問紙調査時に配布を手伝って頂いたゼミの皆様、辛い時に心の支えになって下さった同期の皆様、本当にありがとうございます。



## 引用・参考文献

- 青木多寿子・竹嶋飛鳥・戸田真弓・谷口弘一 (2007). 両親の養育態度, 生活体験が小学生の社会的スキル, 生活充実感に及ぼす影響. 広島大学大学院教育学研究科紀要1 (56), 21-28.
- Bowlby, J (1973). Attachment and loss.Vol. 2: Separation: Anxiety and anger. New York: Basic Books. 黒田実朗 (訳) (1977). 母子関係の理論Ⅱ——分離不安——. 岩崎学術出版社.
- 張 愛子 (2014). 大学生の自己愛傾向に関する研究——親の養育態度と友人関係との関連から——. 学校教育学研究論集 (29), 1-13.
- 浜崎隆司・田村隆宏・吉田和樹・吉田美奈・岡本かおり・安藤ときわ・倉成正宗 (2012). 親子の信頼関係尺度に関する予備的研究. 鳴門教育大学研究紀要 (27), 2012.
- 原田克己・青山智恵 (2011). アサーションと対人感情・対人欲求との関連. 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 (3), 15-30.
- 橋本泰子 (2010). 大学生における父親との愛着関係と社会性に関する一考察——愛着尺度・EQT・SWT・WXT——. 心理学研究, 創刊号, 92-103.
- 五十嵐透子・野村珠紀・岩崎真和 (2014). 大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連. 上越教育大学研究紀要 (33), 107-114.
- 石橋茉奈・石田 弓 (2013). 中学生の養育者への信頼感と攻撃性の関連. 広島大学心理学研究 (13), 171-190.
- 石田靖彦・中村友一 (2013). 中学生のいじめ体験に関する研究——いじめの立場における心理的特徴——. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 (3), 123-130.
- 泉 玲・石田 弓 (2012). 特定の他者ごとに特有な内的作業モデルを想定した愛着スタイルと対人不安の関連の検討. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 (11), 55-70.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連. 社会心理学研究 (3) 22, 274-284.
- 金政祐司 (2009). 青年期の母——子ども関係と恋愛関係の共通性の検討——青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就——. 社会心理学研究 (1) 25, 11-20.
- 姜 信善・南 朱里 (2014). 友人関係満足と信頼感および個人志向性・社会志向性との関連: 性差に焦点を当てて. 富山大学人間発達科学部紀要9 (1), 17-33.
- 葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動. 鳴門教育大学研究紀要 (25), 189-202.
- 金 美伶 (2006). 青年期の同一性形成に影響を及ぼす重要な他者との関係性. 人間文化論 (9), 325-333.
- 小林 真 (2011). 中学校時代の両親の養育態度が青年期の友人関係のあり方に及ぼす影響——自己概念を媒介変数として——. とやま発達福祉学年報 (2), 21-28.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 日本教育心理学研究 (46), 280-290.
- 廣崎 陽・瀬戸美奈子 (2013). 青年期における完全主義が学校への適応感に及ぼす影響. 三重大学教育学部研究紀要 (64), 教育科学2013, 239-246.
- 松永真由美・岩元澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究. 久留米大学心理学研究 (7), 77-86.
- 松寄洋子 (2008). 小学校から中学校への移行期における友人関係. 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇) 8, 213-219.
- 三輪雅子・三浦正江・上里一郎 (1999). 大学生のシャイネスと信頼感, および精神的健康の関連性の検討. ヒューマンサイエンスリサーチ (8), 121 ~ 137.
- 森下正康・三原まどか (2015). 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響——内的作業モデルと自己受容を媒介として——. 発達教育学研究 (9), 31-42.
- 中間玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義. 兵庫教育大学研究紀要 (44), 9-21.
- 野中公子・永田俊明 (2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響——体験の時期と発達の関連——. 九州看護福祉大学紀要12 (1), 115-124.
- 大鷹円美・菅原正和・熊谷 賢 (2009). 母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 (8), 119-129.
- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係——内的作業モデル尺度作成の試み——. 性格心理学研究2 (9), 59-70.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・



- 北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. 教育心理学研究 (50), 12-22.
- 酒井 厚 (2005). 対人信頼感の発達——児童期から青年期へ——. 川島書店.
- 坂田美和子・横川和章 (1998). 思春期・青年期における信頼感に関する研究——依存欲求及び特定の他者の存在からみた信頼感の再確立の可能性——. 日本教育心理学会総会発表論文集 (40), 8.
- 泉水清志・小池庸生 (2011). 現代青年の友人関係に及ぼす要因. 育英短期大学研究紀要 (28), 23-32.
- 菅原正和・田村和香奈・嶋野重行 (2005). 青年期の信頼感形成に及ぼす心理学的要因. 岩手大学教育学部研究年報 (64), 39-52.
- 鈴木公啓・菅原健介 (2014). 承認欲求と種々のデモグラフィック要因——性別, 年齢, 体系, 結婚, そして職業——. 東京未来大学研究紀要 (7), 89-99.
- 武田裕子・石田 弓 (2013). 青年期における両親への相談行動について——利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて——. 広島大学心理学研究 (13), 191-209.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. 教育心理学研究 (52), 310-319.
- 竹村和久・高木 修 (1988). “いじめ”現象に関わる心理的要因——逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性——. 教育心理学研究 (1) 36, 57-62.
- 田村未来・石井 徹 (2014). 友人付き合いにおけるグループ志向の構造. 社会文化論集, 島根大学法文学部紀要, 社会文化学科編 (10), 27-41.
- 田中花香理 (2013). 他者依存性がソーシャル・サポートのストレス緩衝効果に及ぼす影響. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 (12), 90-99.
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. 日本パーソナリティ心理学会2005, 2 (13), 156-169.
- 田島祐奈・山崎洋史・岩瀧大樹 (2015). 青年期における対人欲求および同調行動に関する研究. 学苑・人間社会学部紀要 (892), 105-111.
- 富永幹人・田中あゆみ (2014). 青年期における学校段階の移行と親友人との友人関係——親友人に求める理想と現実およびそのズレの検討——. 福岡女学院大学紀要, 人間関係学部編 (15), 29-35.
- 上山喜寛・米澤好史 (2006). 他者による自己評価意識尺度作成の試み——対人欲求・対人ストレスとの関係——. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 (16), 135-144.
- 渡部玲二郎 (1999). 対人関係能力と対人欲求の関係. 心理学研究2 (70), 154-159.
- 山本彩留子・岡本裕子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性. 広島大学心理学研究 (8), 107-120.
- 山下美実子・石 玲・桂田恵美子 (2010). 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討. 臨床教育心理学研究 (36), 21-26.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012). いじめの被害——加害経験と自尊感情との関係——大学生を対象とした遡及的調査研究——. 「人間科学研究」文教大学人間科学部 (34), 169-182.

# 青年期の SNS 利用における自己開示と その心理的要因

渡 邊 菜 保 子

## 要 約

この数年で利用者が急激に拡大した SNS は、利便性と共にトラブルに巻き込まれる報告も後を絶たない。そこで、本研究では、現代の青年が SNS を利用する心理的要因を対人場面と比較するとともに、自己開示量や満足度の側面も検討することを目的として、大学生を対象に、自己開示尺度、対人恐怖心性尺度、自尊感情尺度、アイデンティティ尺度を用いて質問紙調査を実施した。

調査の結果、SNS 利用時、対人場面時、双方とも自己開示量が高い人ほど対人恐怖の特徴を示し、青年期は方法問わず他者への自己開示時は、相手の自分に対する評価が気になることが明らかとなった。このほか、SNS 利用と自尊感情やアイデンティティの関連は見られなかった。一方、対人場面時の自己開示量が高い人ほどアイデンティティが確立されている特徴が見られ、Face to face の交流では自分への信頼感が必要であることが改めて示された結果となった。

## I. 背 景

### 1. SNS について

1990 年代後半からインターネットが家庭にも普及し始め、パソコンのソフトには企業や団体などのホームページである Web ページを閲覧できるソフトが標準搭載された。また、個人

の日記などを公開するブログの出現によりインターネットの利用は一気に広がりを見せた。2006 年には、140 文字以内で自分の気持ちや情報を発信する Twitter がサービスを開始し（佐藤ら、2015）、2011 年にはそれまでの電子メールに変わり、友達登録をするだけでアドレスの指定や件名などの入力をしなくてもメッセージのやり取りが手軽にできる LINE が登場し（高橋ら、2015）、利用者数が急増した。総務省（2014）によると、現在、インターネットの利用率は 13 歳から 59 歳で 9 割を超え、幅広い世代で利用されており、年代別利用率では 10 代から 20 代が上位を占めている。中でも、LINE や Twitter などを含む SNS（Social Networking Service；以下 SNS と記す）の利用はめざましく上昇している。佐藤ら（2015）は、SNS を「共通の話題や興味のある人同士が情報を共有したり意見を交換できるようなインターネット上の会員制のサービスのこと」としている。

ICT 総研（2014）の調べによると、日本国内における SNS の利用者数は、2013 年末には 5,487 万人、2014 年末には 6,023 万人の見込みで、年々増加し、その利用目的を「人とのコミュニケーションのために SNS や通話・メールアプリを利用している」と 64.9% が回答している。また、ネットユーザーに占める LINE の利用率は 47.6%、続いて Twitter の 41.9%、Facebook の 39.9%、となっている。SNS は、パソコンだけでなく携帯型端末にも対応したアプリを提供することで利用者を拡大させ、気軽にいつでも

\*臨床心理学研究科 博士課程（前期）

他者と繋がることのできるツールとなった。総務省 (2013) によると、スマートフォンおよびフューチャーフォンをほぼ毎日利用する形態として、大学生では「SNSを見る」が65.9%、「SNSに書き込む」が43.8%と上位を占めている。このことから、SNSは、他者とのコミュニケーションや自己を表現するために利用されていると考えられる。

インターネットを利用したコミュニケーションを行う要因として、尾上(2007)は、インターネットは対面ではないため、初対面でも比較的落ち着いて対応ができるので、抑うつ傾向や精神面での不健康さがあっても自己開示を高めることができるとしている。また、田淵・則定(2013)は、インターネットで自己開示を行う人は実生活でのネガティブな感情をインターネット上で発散させるため、対面でのコミュニケーションを多くとる人に比べて情緒安定傾向にあるとし、インターネット利用による自己開示の有用性を述べている。一方で、田淵・則定(2013)の同研究では、インターネットを一日5時間以上利用する人は、5時間未満の利用者より対人恐怖が高く、誠実性、調和性が低いことを示している。また、ネット依存症の調査(総務省, 2013)では、高校生、大学生の共に4割近くが「自分はネット依存であると感じている」と答えている。この他、インターネット利用によるネガティブな側面として、投稿に対する批判・攻撃による「炎上」や不特定多数の人へ情報がばらまかれてしまう意図しない「拡散」、また、個人情報流出という危険性もはらんでいる。総務省(2014)の調査では、インターネット利用によって生じる不安として、8割を超える人が「個人情報漏れはしないか」と感じている。また、6割近くの人が「インターネットを利用するために犠牲にしている時間がある」とし、学齢別では高校生の48.1%、大学生の47.5%が睡眠時間を削っている(総務省, 2013)。大沼ら(2012)の青年期を対象としたSNSと友人関係の研究では、調査参加者の70%が既存の友人とのSNSの利用による人間

関係のトラブルを経験していると回答(原因はつぶやきや日記などの日常報告型ツールにおける否定的発言)し、否定的発言そのものは、SNS利用時よりも対面時のほうが多いが、否定的発言を多くする者は、対面時よりSNSを利用して否定的発言をする傾向があった。小此木(2005)は、インターネットがもつ5つの魅力を、①匿名の別人格になれる、②全知全能的な自分を感じられる、③自分の気持ちを純粹に相手に伝えられる、④匿名性により特定の人と親密な一体感が持てる、⑤特定な人と一体感を持ってそこには義務や責任が伴わないので嫌になったらいつでもやめられる、としている。そして、「ネット型引きこもり」は、精神医学でいう「引きこもり」の延長線上に位置づけられる心性であるとし、インターネットによるバーチャルな世界でのハンドルネームや文字によるやり取りは、日常とは違った精神状態になるため、その扱い方に警鐘をならしている。樋口(2013)は、日本を含めた先進国では、人間関係が年々希薄になる傾向があり、同じ職場で隣に座る同僚にさえメールで連絡を入れることが日常的に行われ、ネット依存を作る要因の一つになっていると述べている。

このように、インターネットの適度な利用は精神的な健康状態を維持させる有益な側面がある一方で、利用時間の増加や使用方法の偏りにより、インターネットに過度にのめり込んでしまうと、精神的な健康状態は損なわれてしまう危険性がある。

## 2. アイデンティティと青年期の対人関係について

### A. 基本的信頼と基本的不信

Erikson, E.H. (1959) は、人間の生まれてから死ぬまでを8つの段階に分け、それぞれに発達課題を設けた。

乳児期：基本的信頼と基本的不信

幼児期：自律性と恥・疑惑

遊戯期：積極性と罪悪感

学童期：生産性と劣等感

青年期：アイデンティティの確立と拡散

初期成人期：親密さと孤独

成人期：生殖性と停滞性

老年期：自我の完全性と絶望

発達課題はそれぞれの段階で固有のものであるが、個々に独立しているものではなく他の段階に影響を与えている。そして、発達課題の解決と失敗という両方を経験することが望ましく、解決の割合が多いことが重要であるとしている。Erikson, E.H. (1959) は、健康なパーソナリティを構築するための基本的な要素を「基本的信頼感」と名付けた。この「信頼」は他者を信頼するだけでなく、自分は信頼されるに値する人間であると実感することを意味している。このため、乳児は、発達に合わせた母親の育児や躰などの適切な対応を通して自分は養育されるに値する人間であるという信頼感を得る。その一方で、思い通りにならない母親に対して内的葛藤がおこるが、沸き起こる欲求や衝動に対して乳児自身が対応できるようになることで自分自身への信頼感を獲得する。このように環境との相互作用により「基本的信頼」が「基本的不信」を上回ることによって、自分は価値ある唯一無二の存在であるという、その後の統合したアイデンティティの基礎が作られるのである。つまり、アイデンティティの形成は青年期に始まるのではなく、乳児期から作られていくのである。

### B. 青年期のアイデンティティ形成

青年期は第二次性徴期により心身共に変化し、他者の自分に対する評価が気になり、また、それまで身に付けた自分の役割や能力を自分が理想とするものにどのように近づけていくか模索していく時期である。Erikson, E.H. (1959) は、アイデンティティを「内的な斉一性と連続性を維持する個人の能力が、他者に対して自分が持つ意味の斉一性と連続性に調和するという自信」としている。つまり、自己の一貫性と連続性を主体的に意識し、他者からも自己の一貫性と連続性を受け入れられ認知さ

れるという相互性に基づいてもたらされる確信である。アイデンティティの形成は、生涯を通して行われるものであるが、青年期は、特に幼児期から培ってきた自己に対する信頼感や他者からの評価を改めて現在の自己に対する信頼感や評価へ統合するための自我の再編成が必要となり、そのためには同世代の同性の友人や社会との関わりが大きな課題となる。これまでの基本的価値観に新しい価値観が加わることで、過去に得た価値観や報酬を疑わしく思え、葛藤が生まれ、試行錯誤を行う猶予期間・モラトリアムがあるのも青年期の特徴である。そして、これらを経験することで自我は再編成されていくのである。Bros, P は、青年期を「第二の分離個体化期」とし、家族という殻から脱し、社会の一員となるためにこれまでのパーソナリティ構造の一部を壊し、新たな人間関係を再構築する時期であるとした(山本, 2010)。このように、青年期は、今までの家族という枠組みから抜け出して他者と関わるのがとても重要な時期であり、この時期の友人との間に形成される親密な人間関係がアイデンティティの獲得に大きな影響を与えるのである。

### C. 現代青年の友人関係

岡田 (1992) は青年期の友人関係について、①両親などの大人の生活や規範に疑問を持ち始め、自分自身のあり方を模索する時期であるため、両親より同世代の人間と一緒にいることを好む、②身体と精神の発達のアンバランスさから情緒が不安定になりやすい、③友人との深い情緒的な関係は、不安定さから立ち直るために重要な役割を果たす、④親密な友人関係が両親からの心理的離乳と自立を促す、としている。また、宮下 (1995) は青年期には、自分を理解し、支えてくれる友人が必要であるとし、その意義を①悩みを打ち明けることによる情緒的安定、②自己を客観的に見ることで長所や短所の気付きや内省の深まりが得られる、③人間関係の学び、としている。このように、友人との親密な関わりにより不安の軽減や情緒的安定が得



られ、他角度からの視点を得ることで自分を客観的に見ることができ、長所や短所などの自己認識が深まる。また、自分の意見や考えを率直に表現して相手に受け入れられる経験をする事や相手の気持ちを受け入れることにより、相互理解が深まり、幼児期に得た「基本的信頼」とは異なる他者に認められた自分や自分らしさを構築していくのである。しかし、岡田(2002)は、中・高・大学生を対象にした研究で、現代青年の友人関係には「侵入回避的關係」と「軽躁的關係」がみられるとし、他者との内的な関わりを避ける「侵入回避的關係」は年代が上がるにつれ高くなり、大学生では対人関係の不適応感が高くなっていくため、表面的には円滑な人間関係を形成しつつ、自己内省ができないという発達過程において未熟な傾向の存在を示した。また、当たり障りのない人間関係を求める「軽躁的關係」をとる青年は、適応感が高く健康であるが、現実自己と理想的自己のギャップがあり、自己不一致を感じているとしている。

このような現代青年の対人関係に影響をあたえる心性として、岡田(1993)は大学生を対象にした研究で、対人場面において円滑にふるまえないという不適応を感じながらも他者の視線や自分の内面の不安定さをあまり感じない新しい対人恐怖症の型を示した。対人恐怖とは、日本では森田正馬が1932年に始めて論文で用いたが、その後、病理としての対人恐怖症だけではなく、健康な人が持つ心性としての対人恐怖の研究が多くされてきた。永井(1994)は、健常者でも対人恐怖心性を持つ者は多く、その構造は大きく分けて3つの次元になるとし、①対人状況における自分自身の行動、態度、話し方、振舞いなどにおける支障、②自分が他者から評価的観点を含みつつ、どのように見られているかという問題意識(関係的自己意識)、③自己評価の低さや劣等感(内省的自己意識)、としている。また、堀井・小川(1996・1997)も一般青年に対人恐怖傾向者は一定数存在しており、対人恐怖が一部の発症者のみのものではないということを示している。

このほか、青年期の自我形成の一側面には自尊感情があり、これまで青年期を対象に多くの研究がされてきた。自尊感情とは、常に意識されているものではないが、言動や意識態度を基本的に方向づける自己に対する評価感情であり、自己を価値あるものとする感覚である(遠藤, 1999)。Pope, W. Alice, ら(1988)は、自尊感情を他者からの客観的な情報とその情報に基づいて本人が行う主観的評価の組み合わせにより構成されるとし、自尊感情の形成を「知覚された自己：自分の特徴や性質についての客観的な見方」と「理想の自己：自分はこうありたいとするイメージ」の2つの側面から検討し、「知覚された自己」と「理想の自己」が一致しているとき自尊感情は肯定的になるとしている。また、自尊感情の程度は、「知覚された自己」と「理想の自己」のズレから生じるとし、自尊感情の高い人は自己受容ができており健康的に自己を捉えていると考えられ、自尊感情の低い人は自分には誇れるものがなく、他者に対して自己を誇大に見せようとするとしている。中間(2013)は大学生を対象とした研究で、自尊感情が他者や環境に対する肯定的な感情と共存している場合、心理的健康は最も高くなるとしている。岡田(2011)は、青年期の友人関係と自尊感情の研究で、自他共に傷つかないように配慮することで相手から受容される経験は、自尊感情を維持し高めるとし、友人関係において相手を気遣うことは、自尊感情を保つ上で必要であるとしている。

これらのことから、対人恐怖心性や自尊感情は、青年期の友人関係に大きな影響を与えていると考えられる。

### 3. 自己開示

自己開示の研究はJourard, S.M.により始められ、その後、多くの研究が行われている。Jourard, S.M. (1971)は、人間は自分自身について自発的に他者に自己開示することで自己というものを理解していき、自己開示が促進されるには愛と信頼の態度により相手のことを知



り、知らせたいと思う相互性が必要であるとしている。榎本（1997）は、自己開示を「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」と定義し、その意義を①自己洞察を深める、②心にたまった情動を発散する、③親密な人間関係の促進、④不安の低減、としている。研究においては、大学生の自己開示の特徴として、最も親しい友人への自己開示量が多く、精神的にも影響が大きいとしている（榎本、1997）。また、自己開示が多い人は、人生に前向きで自分の過去にも肯定的であり、疲労感や抑うつ感が乏しく自尊感情が高いとし、自己開示を抑制する傾向のある人は、自分の過去に否定的な感情を抱き、今後の人生に迷いがあり、疲労感や抑うつ感、不安感が強いとしている（榎本、2005）。大学生を対象とした自己開示とアイデンティティの研究では、アイデンティティが確立していると自己開示度は高く、アイデンティティが拡散していると自己開示度は低く、モラトリアムは平均的な自己開示であることを示唆した（榎本、1991）。東・榎本（2006）は、自己開示を積極的に行う人は対人不安に陥らないとしている。このように、自己開示が促進されるには、精神的健康が必要であり、自我が確立されていることも要因の一つであると考えられる。一方、榎本（1997）は、自己開示を抑制する要因として、①現在の関係以上に深い関係性を必要としない、②相手の反応に対する不安、③相互理解に対する否定的感情を挙げている。吉岡（2001）は、現代の中高生は積極的に自己開示できるほどの付き合いをしていないと感じているとし、斎藤・野中（2011）も自分や他人を信頼しない人は人間関係に警戒心を抱き、結果として自己開示が抑制され、相手の様子をうかがいつつ付き合うとしている。これらのことから、自己開示は、自己と他者に対して信頼感が持てなかったり、不安感を抱くことで抑制されると考えられる。

現代において自己開示は、対面による対人場面だけでなく、インターネットを利用して行われることもある。佐藤・吉田（2008）は、イ

ンターネットは匿名性により不安が低減されリラックスして相互的交流が行える可能性を示した。川浦ら（1999）は、Web日記による自己開示の研究において、Web日記は他者に対して自己がうまく表現され、自分の内面が読者に理解されているという満足感が得られることで書き続けられるという読者とのコミュニケーションを意識した自己開示の行動であるとしている。西村（2003）は、CMC（Computer-Mediated Communication；以下CMCと記す）を高評価している人は、対人不安が高くてもインターネット上の人間関係に満足していることを示している。対人不安の高い人は、対面時では自己表現が抑制されるが、匿名性の高いインターネットは安心して新しい自己を表現する場として活用し、また、他者との相互性によりその利用は支えられていると考えられる。野口（2011）は、インターネットでの自己開示と孤独感の研究で、インターネットは匿名性などの理由から自己開示しやすいが、インターネット自己開示満足感と孤独感の関係では、インターネットを利用することで孤独感が低減されるのではなく、孤独感に効果を与えるのは、対面時の自己開示のほうが大きいと示している。これらのことから、自己開示は対面やインターネット利用に関わらず、開示する相手との関係性や親密度などの対人関係の深さによって、その量も質も変化すると考えられる。

## Ⅱ．問題と目的

### 1. 問題

いつでも他者とつながれる手軽なコミュニケーションツールである SNS の利用拡大により、青年期の友人関係は大きく変化していると考えられる。青年期は、両親から離れ、友人と関わり合うことによる共感や同一化を通し、自分自身に対する内省を高めることで、健康な成熟が促進される時期であるとされている（西平、1988）が、現代の青年は、岡田（1995）が示すように内面的な関わり合いを避け、表面的な楽

しさを求める傾向も指摘されている。一見、当たり前障りのない人間関係を求めるため SNS によるコミュニケーションが盛んであるようにも考えられるが、「誰かとつながっている安心感」を求めるため、他者からのアクションに対し即座に応答できるようスマートフォンを手放せないといった新たな友人関係が生まれているようにも考えられる。そこにどのような心理的要因が関係しているかを知ることは、彼らを援助する心理臨床場面において役立つと考える。

## 2. 目的

本研究では、歴史が浅く研究の少ない SNS 利用による自己開示に対し、青年期の発達と深くかかわると考えられ、また多くの先行研究でも取り上げられている「対人恐怖心性」, 「自尊感情」, 「アイデンティティの形成」がどのような影響与えているか、SNS 利用時と対面時とを比較し、自己開示の量的側面としての自己開示量と質的側面としての満足度をもとに、以下の仮説を検証する。

仮説1：SNS 自己開示と対面自己開示では、自己開示の内容が異なる。

仮説2：SNS 自己開示は、対人恐怖心性が正の影響を、自尊感情が負の影響を与えている。

仮説3：対面自己開示には、自尊感情とアイデンティティの形成が正の影響を与えている。

仮説4：自己開示の満足度は、SNS 自己開示に比べ、対面自己開示の方が、満足度が高い。

## Ⅲ. 方 法

### 1. 調査対象

関東圏内の大学に在学する大学生282名中 SNS を利用している人266名（男性160名、女性106名、18歳～24歳、平均年齢19.4歳）。

### 2. 調査期間

2015年5月～7月。

### 3. 手続き

大学の講義開始前または講義終了後に調査内容の説明や調査協力の依頼およびプライバシーについての説明を文書と口頭で行った後、質問紙を配付、その場で回収を行った。回答はどれも無記名で行われた。質問紙の構成は以下の通りである。

#### A. フェイスシート

年齢、性別、学年、SNS 利用の有無、SNS の一日の利用時間、利用している SNS の種類、SNS を利用するための使用媒体

#### B. 自己開示尺度

榎本（1997）は、自己開示の概念を精神的自己（知的側面・情緒的側面・志向的側面）、身体的自己（外見的側面・機能／体質的側面・性的側面）、社会的自己（私的人間関係〔異性・同性〕の側面・公的人間関係の側面）、物質的自己、血縁的自己、実存的自己の12側面と、直接自己についてのものではないが、特に親しくない相手や初対面の相手に対して開示度の高い（趣味）、（意見）、（うわさ話）の3側面を加えた15側面を設定し、各側面に具体的な質問項目を3項目ずつ用意し、計45項目からなる質問紙（ESDQ）を作成した。本研究では、大学の講義中に行われる集団調査という観点から回答者の負担を考慮し、性的側面を削除、また、わかりにくいと思われる語句を一部修正し、全40項目を「SNS 利用時の自己開示」と「対面時の自己開示」の2場面についてそれぞれ質問を行った。回答は「全く伝えない」から「よく伝える」までの5件法で評価を求めた。

#### C. 自己開示満足度

「対面における自己開示」と「SNS 利用における自己開示」の満足感を主観的にどのようにとらえているか測定するため、吉岡（2001）を

参考に「SNS利用時の自己開示」と「対面時の自己開示」の2場面についてそれぞれ質問を作成し、「非常に満足している」から「全然満足していない」の7件法で評価を求めた。

#### D. 対人恐怖心性尺度

堀井・小川(1996)は、対人恐怖心性を日本人の一般的な対人関係様式や対人意識であるとし、6つの下位尺度(①集団に溶けこめない悩み、②目が気になる悩み、③自分や他人が気になる悩み、④社会的場面に当惑する悩み、⑤自分を統制出来ない悩み、⑥生きることに疲れている悩み)に分類し、それぞれに5項目ずつ計30項目の質問を作成した。回答は「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7件法で評価を求めた。なお、本研究では、質問項目の中でわかりにくいと思われる語句の一部を修正して用いた。

#### E. 自尊感情尺度

山本ら(1982)により邦訳されたRorsenberg, M.の開発した自尊感情尺度である。この尺度は、他者との比較によって生じる優越感や劣等感ではなく、自分自身が自己の能力や価値を評価する程度のことを自尊感情とし、その程度を測定するものである。10項目に対し、「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法による評価を求めた。

#### F. アイデンティティ尺度

下山(1992)は、日本の大学生を対象にモラトリウム心理とアイデンティティの確立度との関連を検討するために尺度を開発し、「アイデンティティの基礎」と「アイデンティティの確立」の2尺度に分類した。2尺度のうち、「アイデンティティの基礎」は、アイデンティティ形成の基礎となる自己への安定感が得られず、不安感や孤独感に苛まれる気持ちを反映した内容となっている。「アイデンティティの確立」は、自己の主体性や社会性、自己への信頼が形成されていることを表す内容となっている。これら

2尺度10項目ずつ計20項目の質問に対し、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法による評価を求めた。

#### 4. 分析方法

質問紙によって得られたデータに統計ソフトSPSSを用いて統計的処理を行った。

### IV. 結果

#### 1. SNS利用者の実態

回答者282名中SNSを利用している人は266名(94%)であった。一日のSNS利用時間は、約1~3時間が112名(42.1%)といちばん多く、次いで約1時間未満が61名(22.9%)と約3時間以下の利用が約65%を占め、半数以上が3時間以下の利用であるとされた。利用しているSNS(複数回答可)は、LINEが262名、Twitterが210名と上位を占め、次いでFacebook、Skypeであった。その他として、カカオトーク、Vine、Xix channel、ニコニコ、Youtube、ツイキャス、QQ、wechat、wechatなど新しいアプリが続々と登場していることがうかがえる。SNSを利用するために使用する媒体は、スマートフォン(iPhone含む)が257名で全体の97%を占め、圧倒的な携帯型端末の利用が示された。

#### 2. 自己開示内容

SNS自己開示と対面自己開示の内容を見るため、下位尺度の平均点を算出し、t検定を行ったところ、全ての項目において対面自己開示の項目の平均点が高く、0.01%水準において有意な差が示された。また、SNS自己開示と対面自己開示の内容の違いを上位20項目について検討したところ(表1)、両場面とも1位「趣味としていること」、2位「休日の過ごし方」と並び、3位以下から順位の変動は見られたがSNS自己開示の15位以内に入っている項目の多くが対面自己開示の15位以内に入る結果となった。違いとしては、SNS利用時17位「人生における虚しさや不安」は対面時27位、SNS利用時

表1 SNS利用時と対面時の自己開示内容（上位20項目 数字は平均値）

SNS利用時			対面時	
1	36.趣味としていること	3.41	36.趣味としていること	3.64
2	15.休日の過ごし方	3.08	15.休日の過ごし方	3.44
3	26.芸能やスポーツに関する話題	3	1.現在持っている目標	3.43
4	3.知的な関心ごと	2.9	3.知的な関心ごと	3.3
5	14.生きがいや充実感に関する事	2.82	11.将来についての悩み	3.3
6	1.現在持っている目標	2.59	26.芸能やスポーツに関する話題	3.29
7	39.自分の持つ価値観	2.57	2.興味を持って勉強していること	3.15
8	11.将来についての悩み	2.46	39.自分の持つ価値観	3.14
9	34.目標としている生き方	2.42	6.異性関係における悩みごと	3.13
10	2.興味を持って勉強していること	2.41	14.生きがいや充実感に関する事	3.11
11	27.最近の大きな事件に対する意見	2.35	32.関心のある異性の話	3.08
12	32.関心のある異性の話	2.31	17.友達のうわさ話	3.01
13	5.服装の趣味	2.3	27.最近の大きな事件に対する意見	3.01
14	8.運動神経	2.28	38.好きな異性に対する気持ち	3.01
15	38.好きな異性に対する気持ち	2.28	5.服装の趣味	3
16	18.知的能力に対する自信あるいは不安	2.28	22.友人関係に関する悩みごと	2.96
17	25.人生における虚しさや不安	2.26	10.過去の恋愛経験	2.95
18	9.友人に対する好き・嫌い	2.25	7.容姿・容貌の長所や短所	2.93
19	23.感情面で幼いと思われる点	2.23	34.目標としている生き方	2.87
20	12.おこづかいの使い道	2.22	8.運動神経	2.85

18位「友人に対する好き・嫌い」は対面時39位、SNS利用時19位「感情面で幼いと思われる点」は対面時30位となっている。一方、対面時9位「異性関係における悩みごと」はSNS利用時には28位、対面時16位「友人関係に関する悩みごと」はSNS利用時23位、対面時17位「過去の恋愛経験」はSNS利用時36位であることが示された。

### 3. 各尺度の因子分析結果

自己開示尺度（SNS利用時・対面時）、対人恐怖尺度、自尊感情尺度、アイデンティティ尺度、それぞれの因子構造を検討するため、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。各項目には、因子負荷量の絶対値が.35以上であるものを選択した。また、下位尺度ごとにCronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果、全ての下位尺度において十分な信頼性が確認された。

自己開示尺度では、榎本（2005）の研究を参考にし、SNS利用時と対面時共に1因子構造（SNS： $\alpha = .96$ 、対面： $\alpha = .94$ ）と判断できる

結果となった。

対人恐怖尺度では、29項目6因子を抽出し、堀井・小川（1996）を参考に第1因子を「生きることへの疲労感」、第2因子を「集団に入れない悩み」、第3因子を「社会的場面での困惑」、第4因子を「人との視線の悩み」、第5因子を「自分や他人のことが気になる悩み」、第6因子を「自分を統制できない」と命名した。また、29項目を合算したものを対人恐怖心性得点（以下「対人恐怖心性」と記す： $\alpha = .95$ ）とする。

自尊感情尺度は、10項目2因子を抽出し、第1因子を「前進的自己（前向きな自己）」、第2因子を「後退的自己（後ろ向きな自己）」と命名した。また、10項目全てを合算したものを自尊感情得点（以下「自尊感情」と記す： $\alpha = .76$ ）とする。

アイデンティティ尺度は、19項目2因子を抽出し、下山（1992）の因子命名と同様に第1因子を「アイデンティティ確立」、第2因子を「アイデンティティ基礎」と命名した。また、19項目を合算したものをアイデンティティ得点

(以下「アイデンティティ」と記す： $\alpha = .83$ ) とする。

4. 自己開示（量と満足感）と対人恐怖，自尊心感情，アイデンティティの関係

A. 相関関係

SNS 自己開示量，対面自己開示量，SNS 自己開示満足度，対面自己開示満足度，対人恐怖心性，自尊心感情，アイデンティティの各尺度間の相関係数を求めた。結果，SNS 利用については，自己開示量は対面自己開示量とやや強い正の相関 ( $r = .61, p < .01$ )，SNS 自己開示満足度に弱い負の相関 ( $r = -.22, p < .01$ ) が見られ，SNS での自己開示量が多い人は対面での自己開示量も多くなるが，SNS で自己開示することにやや満足していない傾向を示す結果となった。しかし，SNS 自己開示量，SNS 自己開示満足度共に対人恐怖心性，自尊心感情，アイデンティティとの相関は見られなかった。対面では，自己開示量と満足度にやや弱い負の相関 ( $r = -.24, p < .01$ ) があり，SNS 自己開示満足度と対面自己開示満足度にやや弱い正の相関 ( $r = .34, p < .01$ ) がみられたことから，対面で

の自己開示を多く行っているがやや満足できず，対面での自己開示に満足していない人は SNS 利用においても満足していない傾向を示す結果となった。また，対面自己開示満足度と対人恐怖心性にやや弱い正の相関 ( $r = .23, p < .01$ )，自尊心感情にやや弱い負の相関 ( $r = -.27, p < .01$ )，アイデンティティにやや弱い負の相関 ( $r = -.30, p < .01$ ) が見られたことから，対面での自己開示に満足する傾向のある人は対人恐怖心性をもち，自尊心感情が低い傾向で，アイデンティティが確立途中である傾向を示す結果となった。この他，尺度間では対人恐怖心性と自尊心感情にやや強い負の相関 ( $r = -.56, p < .01$ )，対人恐怖心性とアイデンティティに強い負の相関 ( $r = -.72, p < .01$ )，自尊心感情とアイデンティティに強い正の相関 ( $r = .74, p < .01$ ) がみられた。(表2)

B. 重回帰分析

自己開示量（SNS と対面），自己開示満足度（SNS と対面）と対人恐怖心性・自尊心感情・アイデンティティの下位尺度の関連を検討するため，SNS 自己開示量，SNS 自己開示満足度，対

表2 尺度間の相関係数

	N=266				
	SNS自己開示量	対面自己開示量	SNS自己開示満足度	対面自己開示満足度	対人恐怖心性
SNS自己開示量	—	.61**	-.22**	-.01	.08
対面自己開示量	.61**	—	-.06	-.24**	.05
SNS自己開示満足度	-.22**	-.06	—	.34**	.06
対面自己開示満足度	-.01	-.24**	.34**	—	.23**
対人恐怖心性	.08	.05	.06	.23**	—
自尊心感情	-.03	-.01	-.01	-.27**	-.56**
アイデンティティ	.01	.10	-.03	-.30**	-.72**

	自尊心感情	アイデンティティ	平均	SD
SNS自己開示量	-.03	.01	91.25	30.32
対面自己開示量	-.01	.10	114.37	28.11
SNS自己開示満足度	-.01	-.03	3.30	1.37
対面自己開示満足度	-.27**	-.30**	2.59	1.24
対人恐怖心性	-.56**	-.72**	99.91	32.13
自尊心感情	—	.74**	30.94	6.21
アイデンティティ	.74**	—	48.79	8.10

\*\* $p < .01$



面自己開示量, 対面自己満足度のそれぞれを目的変数, 対人恐怖心性・自尊感情・アイデンティティの下位尺度を説明変数として強制投入法による重回帰分析を行った。その結果, 全てにおいてR2は僅かであったが, SNS自己開示量では, 対人恐怖心性の「自分や他人のことが気になる悩み」(R2 = .03,  $\beta = .23$ ,  $p < .01$ ) が SNS自己開示量を1%水準で有意に説明することができた ( $F = 1.9$ ,  $p < .05$ ) (表3)。一方, SNS自己開示満足度は下位尺度において, 有意

な係数は見られなかった。続いて, 対面自己開示量では, 対人恐怖心性の「自分や他人のことが気になる悩み」(R2 = .14,  $\beta = .19$ ,  $p < .05$ ) が5%水準で, 自尊感情の「後退的自己」(R2 = .14,  $\beta = -.25$ ,  $p < .01$ ), アイデンティティの「アイデンティティ確立」(R2 = .14,  $\beta = .25$ ,  $p < .01$ ) が1%水準で有意に説明することができた ( $F = 4.0$ ,  $p < 0.01$ ) (表4)。続いて, 対面自己満足度では, アイデンティティの「アイデンティティ確立」(R2 = .13,  $\beta = -.30$ ,  $p$

表3 SNS自己開示量に対する下位尺度の重回帰分析

	SNS自己開示量( $\beta$ )
<対人恐怖心性>	
生きることへの疲労感	.10
集団に入れない悩み	-.12
社会的場面で困惑	-.13
人との視線の悩み	.03
自分や他人のことが気になる悩み	.23**
自分を統制できない	.16
<自尊感情>	
前進的自己	.02
後退的自己	.01
<アイデンティティ>	
アイデンティティ基礎	.07
アイデンティティ確立	.12

\*\* $p < .01$

表4 対面自己開示量に対する下位尺度の重回帰分析

	対面自己開示量( $\beta$ )
<対人恐怖心性>	
生きることへの疲労感	.00
集団に入れない悩み	-.10
社会的場面で困惑	.03
人との視線の悩み	-.04
自分や他人のことが気になる悩み	.19*
自分を統制できない	.12
<自尊感情>	
前進的自己	.09
後退的自己	-.25**
<アイデンティティ>	
アイデンティティ基礎	0.17
アイデンティティ確立	.25**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

<.001) が0.1%水準で有意に説明することができた ( $F = 4.9, p < .01$ )。(表5)

5. 自己開示量と自己開示満足度の検討

A. SNS 自己開示量と対面自己開示量の比較

SNS 自己開示量と対面自己開示量では、どちらの満足度が高いか検討するため、各得点合計の差のt検定を行った結果、対面自己開示量が SNS 自己開示量よりも高いことが示された。( $t = -14.65, df = 265, p < .01$ ) (表6)

B. SNS 自己開示満足度と対面自己開示満足度の比較

SNS 自己開示満足度と対面自己開示満足度では、どちらの満足度が高いか検討するため、各得点合計のt検定を行った結果、SNS 自己開示満足度が対面自己開示満足度よりも高いことが示された。( $t = 7.80, df = 265, p < .01$ ) (表7)

C. 性差について

自己開示量と自己開示満足度の性差を検討するため、男女別に SNS 自己開示量と対面自己開示量、SNS 自己開示満足度と対面時自己開示

表5 対面自己開示満足度に対する下位尺度の重回帰分析

	対面自己開示満足度 ( $\beta$ )
<対人恐怖心性>	
生きることへの疲労感	.01
集団に入れたい悩み	.07
社会的場面で困惑	-.05
人との視線の悩み	.08
自分や他人のことが気になる悩み	.00
自分を統制できない	.06
<自尊感情>	
前進的自己	-.06
後退的自己	-.01
<アイデンティティ>	
アイデンティティ基礎	.07
アイデンティティ確立	-.30***

\*\*\* $p < .001$

表6 SNS 自己開示量と対面自己開示量の平均およびt検定の結果

	平均	SD	t値	df
SNS自己開示量	91.2	30.3	-14.65**	265
対面自己開示量	114.4	28.1		

\*\* $p < .01$

表7 SNS 自己開示満足度と対面自己開示満足度の平均およびt検定の結果

	平均	SD	t値	df
SNS満足度	3.30	1.37	7.80**	265
対面満足度	2.59	1.24		

\*\* $p < .01$

表8 男女別 SNS 自己開示量・対面自己開示量の平均値およびSNS自己開示満足度・対面自己開示満足度の平均値（標準偏差）

	SNS自己開示量	対面自己開示量	SNS自己開示満足度	対面自己開示満足度
男性(N=160)	86.7(28.7)	109.3(27.6)	3.4(1.4)	2.6(1.2)
女性(N=106)	98(31.3)	122.1(27)	3.2(1.3)	2.6(1.3)

満足度の平均と標準偏差の算出を行った（表8）。その結果，自己開示量はSNS時，対面時とも女性の方が高かった。しかし，自己開示満足度では，SNS時は男性が高く，対面時は男女に違いは見られなかった。

## V. 考 察

### 1. SNSの利用実態について

本研究では，SNSを利用している人は94%と，総務省（2014）の調べによる年齢階層別インターネット利用率13～19歳97.9%，20～29歳98.5%に比べやや低いに近い結果となった。使用する媒体としては，97%がスマートフォンなどの携帯型端末を利用していた。1日の利用時間は約1～3時間が全体の半数にのぼり，3時間を越える人は約35%，1割を超える人が5時間以上の利用をしていた。総務省（2013）の調べでは，青年の3割ほどが「自分はネット依存だと思う」と回答しており，利用時間だけでネット依存とは言えないが，依存傾向と思われる人が少数存在する可能性が示された。利用しているSNSは，1位LINEに続いて2位Twitterとなり，ICT総研（2014）調べによる利用実態と同様の傾向が示された。LINEやTwitterは，アプリをダウンロードするだけで無料で利用できるリーズナブル感がある他，複数の人と同時に会話をできる多様な活用方法があることも利用率が高くなった要因であると考えられる。また，LINEスタンプや「いいね！」スタンプなど，1クリックで他者からのメッセージや投稿に対応することができるので，手軽にコミュニケーションがとれるアイテムであるこ

とも上位を占めた要因と考えられる。本研究では，2010年からサービスが開始されたSNS無料画像共用アプリのインスタグラム（Instagram）の利用もみられ，自分で自分を撮影する「自撮り」の流行もあり，言葉だけではなく画像による自己表現の場がインターネット上に新たに加わったことを物語っている。これらのことから，多くの青年は利用時間は長くないが，いつでも手軽にSNSを利用して自己表現をし，他者とコミュニケーションを図っていることがうかがえる。

### 2. 自己開示内容について

自己開示内容は，SNS利用時，対面時共に1位「趣味としていること」，2位「休日の過ごし方」で，他，上位15項目においては両者にほとんど違いはなく，仮説1は支持されなかった。自己開示内容を検討すると，上位を占める項目は，趣味や休日の過ごし方などで，無難な，会話が広がるきっかけとなる話題や自分の考え方に関するもの，将来に関するものが挙げられ，表面的には当たり障り無い会話の一方で，これから人生の重要な選択をしていく青年にとって，未来への希望や不安が垣間みえる結果となった。SNSと対面時の違いがある項目を検討すると，対面時では，対人関係における具体的な悩みなどの開示が多かった。これらは開示後に相手の反応が気になるため，言葉だけではなく表情その他から相手の反応がうかがうことができ，瞬時に対応ができる対面を選択する傾向があると考えられる。一方，SNSでは，漠然とした不安や自分でも処理出来ない混沌とした感情，または攻撃性などを表出させることで

息抜きを図っていると考えられる。これらのことから、SNSと対面では、頻発する話題には差がないが、内容により使い分けを行っていると考えられる結果となり、SNSの持つ匿名性との関連もどうかえるものとなった。

### 3. SNS利用と対面時における心理的要因について

#### A. 自己開示量と自己開示満足度の関係について

SNS自己開示を多く行う人は対面においても自己開示を多く行うことが示された。このことから、他者とのコミュニケーションを求める人は形態を問わず、交流を求めていると考えられる。しかし、SNS利用時、対面時共に自己開示後の満足感は得られないことが示された。この他、自己開示量では対面の方が多いが満足度はSNS利用時の方が高いことが示された。このことから、仮説4の「満足度はSNS利用時より対面時の方が高い」は支持されなかった。自己開示量がSNS利用時より対面時の方が多きことは、相手の顔を見て会話することで相手の反応を確かめながら即座に場に応じたやり取りが行えるため、自己開示が促進されると考えられる。Jourard, S.M. (1971) も自己開示は相手との相互性により促進されるとしている。しかし、満足度が逆転したことは、SNSでは相手の自己開示に瞬時に対応する必要がないことが考えられる。これにより、自分の表情などから相手に対する感情その他の情報を悟られることがないので後々の関係性を考慮しながらコミュニケーションが行える。また、匿名性により本来の自分を隠し、脚色して情報を公開することができるので、時には感情を発散するための一方的な自己開示も行える。これらのことから、SNS利用満足度が高くなった可能性が考えられる。この他、対面満足度の低下の要因として、対面時には、空気を読んでコミュニケーションを取ることも要求されるので、これを苦手とする青年には満足度が低くなったのではないかと考えられる。倉八 (1999) は、他者とのコミュ

ニケーションは場の空気を共有することによって成立する可能性が高く、コミュニケーションの道具である“ことば”は自己を表現するものであるが、“ことば”の発達は他者との信頼関係と会話で体得していくものとし、現代青年の多くは“ことば”で自己を表現することを苦手とする傾向があるとしている。この結果からも他者との信頼関係が構築されていないか、実感できていない可能性があると考えられる。また、これは、岡田 (1999) が示した現代の青年の友人関係である親密さを求める一方で、自分が傷つかないために互いに相手に対して侵入し過ぎない配慮をしながら楽しさを求める表面的な関係と似た傾向を示している。

#### B. SNS自己開示の心理的要因

SNS自己開示の心理的要因を検討すると、重回帰分析により対人恐怖心性の「自分や他人のことが気になる悩み」が弱いながらも影響を与えていることが示された。この結果から、仮説2の対人恐怖心性の影響はかろうじて支持されたが、自尊心については支持されなかった。太宰・佐野 (2012) は、対人恐怖心性と攻撃性の研究で、対人恐怖心性の「自分や他人が気になる悩み」は、自己の欠点ばかりが目につき、自分は人に迷惑かけているのではないだろうかと加害者感情があるため、他者からの評価を過剰に意識するとしている。このような対人恐怖心性を持つ人にとって他者と顔を合わずにコミュニケーションがとれるSNSは、自分の考えや感情を整理しながら対応でき、他者と一定の距離感を保てるので互いに侵襲的になることを避けられ、比較的リラックスして利用できるのではないかと考える。このほか匿名性という特性も対人恐怖心性が影響する要因の一つとして考えられる。小此木 (2005) の示すように、匿名性は義務や責任を伴わず、時には特定の他者との一体感が得られる。匿名であることで加害感情を持たずに日常生活で抑制しているものを容易に発散出来る面もあるのかもしれない。

### C. 対面自己開示の心理的要因

対面自己開示の心理的要因を検討すると、重回帰分析により対面自己開示量は対人恐怖心性とアイデンティティが弱いながらも正の影響を与えていることが示された。対面自己開示満足度は、対人恐怖心性と弱い正の相関、自尊感情とアイデンティティに弱い負の相関が示され、重回帰分析では、アイデンティティが弱くではあるが負の影響を与えていることが示された。この結果から、仮説3は自己開示量において支持されたが、満足度という質の側面では支持されなかった。自己開示量、満足度ともに、対人恐怖心性は弱い正の関わりが示され、アイデンティティは自己開示量では正の影響、満足度では負の影響が示されるというねじれた現象が確認された。自己開示量に対する対人恐怖とアイデンティティの影響が同じ正のベクトルを指すことは、通常見られる影響とは逆のものであると考えられるが、今回使用した対人恐怖心性尺度は、病的な対人恐怖を示すものではなく、健康な人の持つ心性の程度を表すものであり、岡田 (1993)、永井 (1994) が示すように青年期の心性には対人恐怖傾向が存在することから、今回の弱い影響も通常範囲の影響であると考えられる。その中でも、対人恐怖心性の「自分や他人のことが気になる悩み」が対面自己開示量に影響していることを検討すると、顔が見えることで一層他者からの評価が気になり、相手の気持ちに先回りして積極的に自己開示を行うためと考えられる。岡田 (2010) も、対人恐怖心性を持つ青年は友人関係に困難を感じながらも維持に努めているとしている。この他、開示内容を含めて検討すると、対面では特定の人物を相手に対話することが前提となるので、相手を信頼して本当に話したいことを話せる安心感があることも考えられる。続いて、アイデンティティの影響を検討すると、アイデンティティが確立していることは、自分という存在に自信を持ち、また相手の存在を認めることが出来るのでFace to Faceでの会話が弾み、開示量も増えると考えられる。これは榎本 (1991) の

アイデンティティが確立していると自己開示が高まるという研究結果とも一致している。対して、満足度に負の影響を与えていることは、アイデンティティが確立しているからこそ、自分の中で解決できる悩みなどを他者に打ち明けても、求めている対応と異なっていたり、自分の考え方と違うアドバイスを受けることは、却って満足感が得られないことにつながると考えられる。自尊感情についても、アイデンティティと強い正の相関がみられたことから、同様の傾向が考えられる。

### D. 性差について

自己開示量における男女差については、SNS 利用時、対面時共に女性の方が高く、これは Jourard, S.M. (1971) のいう女性の方が男性より自分自身についての情報を他者に多く伝えるということや榎本 (1997) の対面時では女性の方が自己開示を多く行うという結果とも一致している。本研究では、SNSにおいても女性の方が自己開示量が多く、女性はいかなる時にも自己を表現する場を求めていることがうかがえる。男性の自己開示量の低さについて Jourard, S.M. (1971) は、男性は自分に鎧を着せ、弱さや傷つきやすさを出さないようにし、また、その社会において道具的役割を引き受けているので、必要以上に自分をさらけ出すことなく、社会的役割を演じているとしている。SNS を利用しても男性は積極的に自己開示を行わないが、満足度は女性より高い。これは、直接顔を合わせず SNS というフィルターを一枚かけて交流ができるので、当たり障りのない、時には臨機応変な自己開示が行える点で、社会的役割の保持ができるものと考えられる。この他、女性は学校生活等の集団の中にグループを作り、その中で交流が生活の中心となる傾向があるが、男性は女性ほどグループを形成しての交流は少ないとみられ、個々でのやり取りが主流であるため、自己開示量は少ないが情報を開示したい相手に開示できることで満足度が高まると考える。また、本研究では自己開示内容の性差の検



討がなされなかったので断定はできないが、対面との違いとして示された漠然とした不安や攻撃性の発散も男性の方が SNS を利用して多く行われているのかもしれない。

### E. 総合的考察

本研究では、青年期が SNS を利用して自己開示する心理的要因として、対人恐怖心性、自尊感情、アイデンティティがどのように関連しているか、対面時との比較も交え、その満足度と共に検討した。その結果、SNS を利用して自己開示を行うことには対人恐怖心性の「自分や他人のことが気になる悩み」が弱く影響していることが示された。これは対面自己開示量に対しても影響している。このことから、青年期はいかなる方法でも他者に自分のことを開示する時は、相手の自分に対する評価が気になることが示された。これは青年期の発達課題に相当すると考えられることから、当然の影響であるのかもしれない。また、自尊感情やアイデンティティの関連が見られなかったことは、SNS の利用が青年にとって特別なものではなく、日常的なこととして生活に密着した情報伝達ツールの一つであることが示されたといえる。一方、対面時の自己開示には、自分自身への信頼感（自信）が必要であることが改めて示される結果となった。

今後の課題として、本研究では自己開示の満

足度を程度で評価したが、相手の顔を見て自己開示を行うことと SNS を利用して見ず知らずの人に自己開示を行うことでは、その満足感の質は大きく異なると考えられることから、この質の違いを検討する必要がある。この他、SNS の特性でもある匿名性が心理的要因に関わっている可能性を示唆したが、記名時と匿名時での自己開示内容やそこに影響を与える心理的要因も変化することも考えられる。また、SNS 利用の自己開示方法として、言葉による自己開示の側面を検討したが、写真や動画の投稿など必ずしも言葉ではない自己開示が増加していることは今後の注目点になるかもしれない。この他、今回の調査では SNS を自らの情報発信のためには利用せず、情報収集の目的で利用している人も存在した。これらの心理的要因について検討することは、情報化社会を生きる青年を理解するため臨床場面においても意義あるものになると考える。

### 付 記

本論文は、2015 年度提出の修士論文に加筆・修正を加えたものです。修士論文の執筆にあたり、多くのご助言を賜りました中村留貴子先生、副査を快く引き受けて下さいました大矢泰士先生には深く感謝申し上げます。また、調査にご協力いただきました先生方、学生の皆様には感謝いたします。

### 文献

- 東奈々子・榎本博明 (2006). 自己開示および自己呈示とふれあい恐怖の関係. 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (15), pp. 108-109.
- 太宰瑞希・佐野秀樹 (2012). 大学生の対人恐怖と攻撃性の関連について. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 63, pp. 187-194.
- 榎本博明 (1991). 自己開示と自我同一性地位の関係について. 中京大学教養論叢, 32, pp. 187-199.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究. 北大路書房.
- 榎本博明 (2005). 自己開示傾向と自己開示を抑制する心理——短縮版自己開示質問紙を用いて——. 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (14), pp. 115-116.
- Erikson, E.H. (1959). Identity and the Life Cycle. New York: Psychological Issues Vol. I. 1 Monograph 1, International Universities Press, Inc. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.
- 遠藤由美 (1999). 自尊感情. 中島義明ら (編). 心理学辞典. 有斐閣, pp. 343.
- 樋口 進 (2013). ネット依存症. 株式会社 PHP 研究所.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度作

- 成. 上智大学心理学年報, 20, pp. 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度作成 (続報). 上智大学心理学年報, 21, pp. 43-51.
- ICT総研 (2014). 2014年度SNS利用動向に関する調査 <http://ict.co.jp/report/20150729000088-2.html> (2015年1月22日取得)
- Jourard, S.M. (1971). *The Transparent Self*. Van Nostrand Reinhold. 岡堂哲雄 (訳) (1974). 透明なる自己. 誠信書房.
- 川浦康至・山下清美・川上善郎 (1999). 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか: コンピュータ・ネットワークにおける自己表現. 社会心理学研究, 14, (3), pp. 133-143.
- 倉八順子 (1999). ころとことばのコミュニケーション. 明石書店.
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係. 落合良行・楠見 孝 (編). 講座 生涯発達心理学4 自己への問い直し 青年期. 金子書房. pp. 155-184.
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析. サイエンス社.
- 中間玲子 (2013). 自尊感情と心理的健康の関連再考——「恩恵享受の自己感」の概念提起. 374. 教育心理学研究, 61, pp. 374-386.
- 西平直喜 (1988). 青年心理学研究の当面の課題. 西平直喜・久世敏雄 (編). 青年心理学ハンドブック. 福村出版. pp. 3-42.
- 西村洋一 (2003). 対人不安, インターネット利用, およびインターネットにおける対人関係. 社会心理学研究, 19, (2), pp. 124-134.
- 野口恵美 (2011). 大学生の自己開示満足感とインターネット上の自己開示特徴および孤独感との関連. 九州大学心理学研究, 12, pp. 121-128.
- 尾上恵子 (2007). 女子学生の人間関係構築における諸要因について. 一宮女子短期大学紀要, 46, pp. 15-22.
- 岡田 努 (1992). 友人とかかわる. 松井 豊 (編). 対人心理学の最前線. サイエンス社. pp. 22-26.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係. 発達心理学研究, 第4巻, 第2号, pp. 162-170.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, 43, pp. 354-363.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について. 教育心理学研究, 47, pp. 432-439.
- 岡田 努 (2002). 友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究. 金沢大学文学部論集. 行動科学・哲学編, 22, pp. 1-38.
- 岡田 努 (2010). 青年期の友人関係と自己——現代青年の友人認知と自己の発達——. 世界思想社.
- 岡田 努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について. パーソナリティ研究, 20, (1), pp. 11-20.
- 小此木啓吾 (2005). 「ケイタイ・ネット人間」の精神分析. 朝日文庫.
- 大沼美由紀・木村 敦・佐々木真紀・武川直樹 (2012). SNSは友人関係を悪化させるか——若者を対象としたSNS利用における既存友人との対人トラブル実態調査——. 電子情報通信学会技術研究報告書. HIP. ヒューマン情報処理, 112, (46), pp. 115-160.
- Pope, W. Alice, ・McHale, M.Susan, ・Craighead, W. Edward (1988). *Self-Esteem enhancement with children and adolescents*. Pergamon Press. 高山 巖 (監訳) 佐藤正二・佐藤容子・前田健一 (訳) (1992). 自尊心の発達と認知行動療法——子どもの自信・自立・自主性を高める——. 岩崎学術出版社.
- 斎藤英理香・野中弘敏 (2011). 高校生・大学生の友人関係における自己切替と信頼感——「親友」観との関連で——. 山梨学院短期大学研究紀要, 31, pp. 47-59.
- 佐藤広英・吉田富二雄 (2008). インターネット上における自己開示——自己-他者の匿名性の観点からの検討——. 心理学研究, 78, 6, pp. 559-566.
- 佐藤義弘・辰巳丈夫・中野由章・清水哲郎・岩本直久・大島 篤・勝村幸博 (2015). 久野 靖・佐藤義弘・辰巳丈夫・中野由章監修. キーワードで学ぶ最新情報トピックス2015. 日経BP社.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で——教育心理学研究, 40, pp. 121-129.
- 総務省 (2014). 平成25年通信利用動向調査の結果 [http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/140627\\_1.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/140627_1.pdf) (2015年6月18日取得)
- 総務省・情報通信研究所 (2013). 青少年のインター

- ネット利用と依存傾向に関する調査 <http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internet-addiction.pdf> (2015年7月8日取得)
- 高橋慈子・原田隆史・佐藤 翔・岡部晋典 (2015) 情報倫理 ネット時代のソーシャル・リテラシー. 技術評論社.
- 田淵優沙・則定百合子 (2013). 大学およびインターネットにおける自己開示に関する研究——不  
適応傾向, 性格特性, インターネット利用時  
間との関連——. 和歌山大学教育学部紀要.  
人文科学, 63, pp.205-213.
- 山本 晃 (2010). 青年期のころと発達 プロス  
の青年期理論とその展開. 星和書店.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知  
された自己の諸側面の構造. 教育心理学研  
究, 30, (1), pp.64-68.
- 吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及  
び自己受容から捉えた友人関係の満足感. 青  
年心理学研究, 13, pp.13-30.



## 青年期以降の移行対象（その2）

### —女性ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の比較を通して—

王 怡 今

#### I. 問題

##### 移行対象とは

イギリスの精神科医ウィニコット (Winnicott, D. W.) が「移行対象と移行現象」という論文を1953年に発表して以降、移行対象 (transitional object) という概念は乳幼児の精神内界の発達を示す一つの現象として理解され、これまで様々な研究者によって調査がなされてきた。移行対象とは、乳幼児が肌身離さず持ち歩くことで母親の不在時に起こる著しい不安を和らげる、最初の自分ではない所有物である。具体的なものとしては、毛布、人形やぬいぐるみあるいはその他の無生物が該当する。また、この現象はほどよい (good enough) 母と子の関係性の中でのみ現れる現象であり、乳幼児は母親との心理的な分離の際の不安や抑うつ感情に対する防衛として移行対象を使用する。子どもにとって移行対象とは内的世界と外的現実の間の中間領域にあり、情緒の発達を促す役割を持っている。

##### 移行対象研究の概観

ウィニコットの影響を受け、多くの発達研究者は移行対象が幼児の健全な発達の意味を持つものとして、異なる地域でこの現象をめぐる実証的な研究を行った。Stevenson (1954) はイギリスの43人の子どもを対象に研究し、33人の子どもに移行対象を認め、Buschら (1973)

はアメリカで調査した結果67.5%と高い確率を出しており、Mahalski (1983) もニュージーランドの都市部での調査で74%、Shafii (1986) はアメリカで行った調査によって80%の出現率を認めた。また精神病理学の観点からは、移行対象が出現しなかった子どもは母親の不在や母子関係の歪み、発達の遅れ、人格障害などが精神疾患につながりやすいと結論付けた研究も行われている (Stevenson, 1954; Gaddini, 1979; Arkema, 1981)。このような研究はウィニコットの見解を裏付けることとなり、一般的な子どもの多くは移行対象を経験していると支持されている。しかし、異文化における研究として、日本での発現率は藤井 (1985) 31.1%、遠藤 (1990) 38%、井原 (1997) 31.7%、黒川 (2004) 33.4%と平均30%台の出現であり、中国や韓国も20%未満の結果 (Hong, 1976; 井原, 1997) となっており、欧米圏よりもアジア圏での移行対象の出現率は低く、都市型の文化圏のほうが移行対象が出現しやすい (Gaddini & Gaddini, 1970) ということがわかっており、移行対象の出現には文化的な要素が影響していると考えられる。

以上の結果に影響した要因として、Hong (1976, 1978) は①就寝環境②就寝時の様子③授乳様式④身体接触という四つの違いを主張している。また、西洋文化の育児態度は子どもを早い時期に自立させる姿勢であるのに対し、東洋文化や農村部においては素朴な子育て様式をしているため、母親との接触時間が比較的に多

\*臨床心理学研究科 博士課程 (後期)



く行われていると考えられている（井原，2006；王，2016）。つまり乳幼児を取り巻く環境やその文化に根付いた子育てに対する価値観が子育て中の母子の接触時間や就寝環境，授乳様式などの違いとして表れ，乳幼児の母親不在に伴って生じる不安を慰める存在として移行対象が出現しやすくなったということである。他には，移行対象に対する定義の違い（Gardini & Gardini, 1970；Hong, 1978；Horton, 1981）や子ども自身の不安に対するストレス感受性の気質的な違い（遠藤，1991；池内・藤原，2004），入眠儀式的有無（黒川，1999），出生順位やきょうだい構成（富田，2007）などの要因も移行対象の出現に影響すると指摘されている。

#### 移行対象の出現と性差

移行対象の出現する要因について調べる中で，子育てに対する文化的価値観の違いからアジア圏の調査ではこれまで移行対象の出現率に関して欧米圏のそれと比べて低い出現率が明らかにされてきた。しかし近年の調査において，日本での移行対象出現率が高くなったという報告がなされている（清水，2012；王，2016）。これは，日本社会の欧米化や共働き家庭・シングルマザーの増加により，子育て環境の変化やメディアの発達により子どもにとってストレスフルな場面の増加によるもの（清水，2012）と考えられ，Hong（1976）が主張した母親との「身体接触」時間の減少による結果であると考えられている（王，2016）。つまり女性の社会進出

が進み，家庭内では性別役割分業がなくなりつつある中で，子どもは以前より母親と十分に触れ合う時間が少なくなり，むしろ一人で過ごす時間が増えている。それは子供にとって外の世界から取り残されるような孤独感，不安感にさらされる時間が増えることとつながる。そのため自分を慰める存在，外界へ移行していくための中間領域としての移行対象の出現が増えたと考えられる。また，森定（1999）は母親の中に移行対象に対してネガティブなイメージをもつ母親もいるため，母親を対象に調査するより本人を対象にしたほうが出現率が高くなると指摘しており，実際に本人を対象にした調査は，Shafii（1986）は80%，中根（1994）は54.9%，森定（1999）は62%，信田（2009）は85.5%，王（2016）は63%など高い出現率を報告している。このことから，本人を対象にした調査を今後取り入れていくことでより正確な移行対象の出現率を導き出せると思われる。

ウィニコット（1953）は子どもが使う移行対象は男の子が硬い対象物を使う傾向にあり，女の子はぬいぐるみや人形遊びという家族の概念とつながる対象物を使いやすいという違いがあると言及しているが，移行対象の出現そのものには男子と女子の差はないと主張した。そのため，これまで移行対象の出現にまつわる研究は多数存在しているものの，性差については言及されているものは少なく，詳細な検討をする研究はなかった。しかし表1に示されているように，多くの研究結果においては女子の出現率は

表1 男女移行対象発現率

調査者	調査時期	調査場所	調査対象	発現率
Shafii	1986年	アメリカ	中学生本人	女子88%男子71%
遠藤	1990年	日本	母親	女子44%男子33%
森定	1999年	日本	大学生本人	女子77%男子35%
森定	2001年	日本	中学生本人	女子48%男子24%
梅村	2002年	日本	母親	女子49%男子41%
池内・藤原	2004年	日本	母親	女子41%男子39%
山本	2008年	日本	大学生本人	女子42%男子22%
Erkolahti et al.	2009年	フィンランド	中学生本人	女子37%男子18%
王	2011年	台湾	母親	女子79%男子58%
王	2016年	日本	大学生本人	女子67%男子52%

男子より高い傾向があることがわかっており、それは移行対象の機能と関連づけて考えられることが多い。遠藤（1991）は移行対象の感触など感覚的な要素が子どもを慰めるという重要な機能を担っており、女子のほうが男子よりも生得的な感受性が強いいため、移行対象への愛着が相対的に多く見られやすいと説明している。森定（1999）も移行対象は母性性の発達を促進する側面があると言及している。また、王（2011）は女子のほうが柔らかい愛着物を与えられやすい文化環境にあると男子より出現率が高くなると報告している。他にも、性的な役割意識が影響し、親の男女の育て方も異なりやすく、遅く育てられた男子は移行対象に対しての愛着が生じにくい（王, 2016）などと考えられている。以上のことから、移行対象を調査するにあたってその国や地域の子育てに対する文化や性別による移行対象の持ちやすさに関係しており、そうした要因を考慮に入れた調査方法を検討することが重要であると思われる。

#### 青年期以降の移行対象

乳幼児期に自分を慰める存在としてあった移行対象はその後の発達につれてどうなるのだろうか。森下（2006）は男の子の遊びの精神の核は「戦うこと」と指摘しているように、小学生になると男の子は、移行対象の代わりにミニカーや機関車、カードゲームなどに興味を抱きやすく、友達と戦いながら遊べるように常にポケットに入れるようになる。それに対して、女の子はハンカチという柔らかいものや赤ちゃん人形などを持って友達と遊ぶことがある。ウィニコット（1953）は、乳幼児期以降の移行対象を以下のように説明している。

健康な発達において、移行対象は“内側に入る”こともないし、それに対する感情が抑圧される必要もないということである。忘れられることもなく、悲しがられることもない。それは意味を失うのである。なぜなら、移行対象は拡散していった“内的心的現実”

と“2人の個人に共通に知覚される外的世界”の間の中間領域全体に、いわば文化的分野に広がってしまうからである。（ウィニコット, 1953, pp. 91；橋本訳2000, p. 7）

つまり、乳幼児期以降の移行対象は徐々に心的エネルギーの備給が撤去され、文化領域全体に拡散していくという。またウィニコット（1953）は、中間領域は乳幼児の体験の大きな部分を占め、生涯を通じて保持されると指摘し、この中間領域は生きている限り内なる現実と外なる現実を関係づけるという重荷を背負わねばならない人間にとって、重荷を軽減してくれるものとなると述べている。移行対象に対して注がれていた心的エネルギーが、拡散しさまざまな文化領域に対し配分される。そこには内なる世界と現実世界を結びつける中間領域がそのまま残り続けている。つまり形を変えていくのである。しかし移行対象を使用し続け、大切に持ち続ける人がいることもわかっている。Shafii（1986）による中学生に行った移行対象についての調査では、女子21%、男子13%が移行対象を持ち続けていたことがわかり、Erkolahti *et al*（2009）も平均14.5歳の中学生に調査を行い、28.7%が現在も移行対象を所有していると言及している。また、王（2016）は41%の大学生は未だに移行対象を使用していると報告している。このことから、移行対象物の所持自体は決して乳幼児期特有の現象ではなく、その後も所持し続ける場合があることが分かる。Tolpin（1971）は、移行対象所持児の観察から、多くの幼児が分離個体化の終わりの時期に、毛布を所持しなくなるにもかかわらず、何人かの子どもは「何かあった時のために」毛布を取っておき、寝るときやストレスのある時に元気づけてくれるものとして使用していると報告している。以上のことから考えると、青年期以降の移行対象は常に持ち歩く必要性がなくなったとしても現実生活から突如として消えることはなく、使用の頻度が減りつつも「何かあった時のために」使用するものとして存在し

続けていると考えられる。その例としてTabin (1992) は、成人でも旅行の際などに居心地が悪くなり、特別の持ち物を旅行に持って行くことで心細い気分にならずに安心できることがあると言及している。そのように青年期以降も形を変えずに所持しつづけている移行対象も中間領域の役割を果たし続けており、生涯にわたって慰めの要素が重要な存在であるということが考えられる。

### アニミズムと移行対象

移行対象という概念を考えたウィニコットは大人のファンタジーを大切にしているイギリスに生まれ、彼の理論はイメージを大切にし、保存するという、まさにイギリスの文学的風土に強く影響されている（井原，2006）。彼が残した重要な思想の中で、移行対象をはじめ中間領域、錯覚－脱錯覚など、多くのものはイメージの中で膨らませる考えであり、彼の理論を理解するためにはイメージを遊ぶ心をもつことが必要であり、大人のアニミズム思考とも関係している（王，2016）。心理学の分野において、Piaget (1929) はアニミズムを子どもが外の世界のすべての物事を生きているとか意識があると見なす現象だという。しかし、この現象は大人にも存在していることが確認されている（牧野，1992；市川，1977；布施，2004；池内，2010）。池内（2010）は大人のアニミズムを「実際に生を認めているわけではないが、無生物に対して神性や生命の存在を感じる現象」と再定義している。それは、大人がアニミズムに多様な意味を与えている可能性があるから（布施，2004）と指摘しており、この大人のアニミズム思考という考えは多くのファンタジーの世界に使われていることから移行対象の概念を理解する時にも役に立つと思われる。また日本文化の伝統的な自然観はアニミズム的であり（阿部，2002），それは日本の伝統宗教「神道の存在」が大きい（池内，2010）としていることから、日本人の自然やモノに対する考え方にはアニミズム思考が根付いていると考えられる。そのこ

とからも日本の成人の移行対象を理解するために、アニミズム思考との関係を調べることで重要な示唆が得られるのではないと思われる。

### 対人様式と移行対象

移行対象は「ほどよい母親」と乳児の間に生まれる産物（ウィニコット，1964）であり、牛島（1982）も母子関係が希薄である場合と濃密である場合に移行対象が発現されにくいと言及した。藤巻（2005）が大学生を対象に調査をした結果、乳幼児期に移行対象を経験した人は母子関係が良好で移行対象を経験しなかった人よりも有意に友人関係の確立が良好と報告している。従って、幼少期の愛着関係は移行対象の出現と強く関係していることが考えられ、移行対象の経験の有無が大人になってもその人の対人様式に現れていると考えられる。対人様式を測定する際に、戸田（1988）が発表した内的作業モデル（IWM）が多く用いられている。それは他者と自己の関係を測る尺度であり、乳幼児期の発達に伴い愛着対象との間での愛着が個人の中に内在化され、内的ワーキングモデルとしてその人の内部に存在する。このモデルは人生に渡って外界と関わる時に対人様式として現れるという考えである。

以上を踏まえてウィニコットらの主張と内的作業モデルを合わせて考えると、乳幼児期に母親とほほよい関係にあった移行対象経験者はその愛着関係がその後の対人関係の基礎となり、移行対象を経験しなかった人よりも安定した対人様式を持ちやすいと仮定することができると考えられる。

## II. 目的

移行対象の出現にまつわる多くの実証的な調査や意見が発表されているが、青年期以降も移行対象を継続して使用している人についての詳細な検討は存在しなかった。そこで幼少期より移行対象を継続して使用している方を対象に調査していくことで移行対象研究の新たな視点か

得られるのではないかと考えた。

そのうえで、文化的や生得的に移行対象を持ちやすく、出現率の高い女性に対象を絞る。また、青年期以降ということで成人女性にアンケートを行う。そこで得られたデータと2016年に行った女子大学生（王，2016）の移行対象の調査結果を比較，検討し，その差を見出していくことを目的とする。またここでは，既存研究の知見に基づいて導出した下記1，2の仮説の検証を中心に，移行対象のアニミズム思考および対人様式との関連について検討していくことにする。

「仮説1：青年期以降の移行対象の継続にはアニミズム思考が強く影響しているだろう」

「仮説2：青年期以降の移行対象の継続者はより対人様式が安定しているだろう」

仮説1について，青年期以降の移行対象継続者のアニミズム尺度の下位尺度ごとの結果がその他と比べて高いと考えられる。仮説2について，青年期以降の移行対象継続者はIWM尺度の下位尺度においてその他と比べて，安定尺度の傾向が高いと考えられる。

なお，本調査を行う際に，Gaddini & Gaddini (1970) が先駆物と主張した手や指といった乳幼児自身の身体の一部や母親の身体の一部，おしゃぶり，哺乳瓶等を移行対象から除外し「幼い頃から持ち続けて，自己を慰める機能をもつ愛着物」と定義して調査を行った。

### Ⅲ. 方法

#### 調査対象者

今後の基礎資料とするため青年期以降も移行対象を所持し，使用している女性のデータを多く収集できるように，調査対象は比較的移行対象を所持しているであろうと思われる集団を選出し，調査を依頼した。そのため，NPO法人主催のぬいぐるみ愛好者向けのイベントに参加した76名を対象に質問紙調査を行った。そのうち，未回答項目等によって2名の回答と男性14名の回答を分析対象から除外し，最終的に女性

の協力者60名（平均年齢31.53 ± 14.5歳）を分析対象とした。

#### 調査期間

2015年3月のイベント参加者に調査の協力を依頼し，その場で回答してもらい回収した。

#### 質問紙内容

アニミズム思考に関する質問項目は池内(2010)が作成した成人用アニミズム尺度を使用した。内的作業モデル(internal working model：以下IWM)の質問項目は戸田(1998)が発表した成人の内的作業モデル尺度を使用した。

## Ⅳ. 結果

#### 移行対象の出現率

移行対象を経験した成人女性（以下，ぬいぐるみ愛好者という）は80%（60名中48名）であった。女子大学生を対象に調査した結果67%（303名中203名）と高い出現率が見出され（王，2016），本研究の結果においても同様に高い傾向が見られた。また，青年期以降あるいは現在も移行対象を所持し，使用していると回答したぬいぐるみ愛好者は56.3%（48名中27名）と高い出現率であり，女子大学生を対象とした調査結果では42%（203名中85名）であった（王，2016）。

#### 移行対象の分類と内容

移行対象の経験の有無と使用時期から，調査対象者を「移行対象経験あり」，「移行対象経験なし」，「移行対象継続」の3群に分けた。そのうち，「移行対象あり」群と「移行対象継続」群が具体的に使用した移行対象の項目をそれぞれ表2～表4で表示した。なお，これらのカテゴリーに分類した際，移行対象を複数記入した回答者については各々の項目を1つとして加算している。

表2～表4で示したように，ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群はぬいぐるみという回答が一番多く全体の72%（N = 21）を占めた。



表2 ぬいぐるみ愛好者「移行対象あり」群の具体的内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	13
タオル	5
毛布・ブランケット	3
人形	1
お布団	1
合計	23

表3 ぬいぐるみ愛好者「移行対象継続」群の具体的内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	21
タオル	4
毛布・ブランケット	2
人形	1
まくら	1
合計	29

表4 女子大学生「移行対象継続」群の具体的内容

移行対象	人数
ぬいぐるみ	58
タオル	20
毛布・ブランケット	13
まくら	5
布団	4
人形	2
合計	102

また女子大学生の「移行対象継続」群においてもぬいぐるみという回答が一番多く、全体の57% (N = 58) を占めた。これを統計的に検討した結果、ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群は女子大生の「移行対象継続」群よりもぬいぐるみの使用率が有意に高いことが分かった ( $\chi^2 = 4.91$ ,  $df = 1$ ,  $p < .05$ )。また、ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群と「移行対象あり」群はともにぬいぐるみを移行対象として使用していた人が最も多く、「移行対象あり」群

は全体の57% (N = 13) を占めた。統計的に検討した結果、ぬいぐるみ愛好者の「移行対象継続」群は「移行対象あり」群より有意にぬいぐるみの使用率が高いことが分かった ( $\chi^2 = 4.91$ ,  $df = 1$ ,  $p < .05$ )。

#### アニミズムとIWM尺度

「移行対象経験あり」、「移行対象経験なし」、「移行対象継続」の3群からアニミズム尺度とIWM尺度の得点を算出し、下位検定を行った。アニミズム尺度は池内(2010)が行った分析方法に従って、アニミズム尺度の項目を「自然の神格化」、「所有者の分身化」、「所有物の擬人化」の3つの下位尺度に分け、3群から得られたデータを用いて一要因分散分析を行った(表5, 表6)。ぬいぐるみ愛好者の結果では、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(順に $F(2, 57) = 0.02$ ,  $F(2, 57) = 1.80$ ,  $F(2, 57) = 1.66$ , すべて $n.s.$ )。

また、ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の結果(王, 2016)を比較するために、二要因分散分析を行った(表5, 表6)。その結果、アニミズム尺度の下位尺度「所有物の擬人化」において、ぬいぐるみ愛好者は女子大学生よりも平均値が有意に高かった( $F(1, 357) = 11.98$ ,  $p < .001$ )。また、「自然物の神格化」と「所有物の分身化」について、ぬいぐるみ愛好者は女子大学生よりも平均値が高い傾向があった(順に $F(1, 357) = 3.51$ ,  $p < .10$ ,  $F(1, 357) = 3.16$ ,  $p < .10$ )。

また、移行対象使用経験の3群をIWMの下位尺度「安定尺度」、「回避尺度」、「アンビバレント尺度」ごとに分けて、一要因分散分析を行った(表7, 表8)。ぬいぐるみ愛好者の結果において、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(順に $F(2, 57) = 0.15$ ,  $F(2, 57) = 0.04$ ,  $F(2, 57) = 0.57$ , すべて $n.s.$ )。ぬいぐるみ愛好者と女子大学生の結果(王, 2016)を比較するために、二要因分散分析を行った(表7, 表8)。その結果、IWM尺度の3つの下位尺度「安定尺度」、「回避尺度」、「アンビバレント尺度」のすべてにおいて、ぬいぐるみ愛好者と女



表5 ぬいぐるみ愛好者のアニミズム尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象(N=60)	所有者の分身化	所有物の擬人化	自然物の神格化
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(12)	12.33±1.23	19.33±1.50	11.33±2.27
移行対象経験あり(21)	11.62±2.36	18.00±4.57	11.48±1.86
移行対象継続(27)	12.67±1.57	19.89±3.36	11.41±2.00

表6 女子大学生のアニミズム尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象(N=303)	所有者の分身化	所有物の擬人化	自然物の神格化
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(100)	11.17±2.30	15.63±4.15	10.29±2.96
移行対象経験あり(118)	11.68±2.06	16.75±3.89	10.38±2.78
移行対象継続(85)	12.12±1.98	18.94±3.50	11.26±2.84

表7 ぬいぐるみ愛好者のIWM尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象(N=60)	安定尺度	回避尺度	アンビバレント尺度
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(12)	22.00±3.95	19.00±4.45	20.25±4.65
移行対象経験あり(21)	21.14±4.07	18.86±3.72	21.43±3.88
移行対象継続(27)	21.67±5.28	18.63±3.97	22.15±6.14

表8 女子大学生のIWM尺度の得点平均値と標準偏差

移行対象(N=303)	安定尺度	回避尺度	アンビバレント尺度
	M±SD	M±SD	M±SD
移行対象経験なし(100)	20.33±4.52	18.82±4.18	22.44±4.55
移行対象経験あり(118)	21.33±4.21	17.85±4.05	21.82±5.30
移行対象継続(85)	21.89±4.30	19.54±4.55	22.80±5.16

子大学生との間に有意差は見られなかった（順に $F(1, 357) = 0.41$ ,  $F(1, 357) = 0.22$ ,  $F(1, 357) = 2.08$ , すべて $n.s.$ ）。

## V. 考 察

本研究は女性のみデータを使用し、移行対象の使用経験によるアニミズム・対人様式などの違いについて検討を試みた。以下、主な結果について考察していきたい。

### 移行対象の内容と出現

今回の結果からぬいぐるみ愛好者の移行対象出現率は80%であり、女子大学生（王, 2016）と同じく高い傾向であることが分かった。これ

までの日本での移行対象の出現率平均30%から比べるとかなり差があることがわかった。これは前述したように、日本社会における子育て環境の変化によるものと考えられる。また、ぬいぐるみ愛好者は移行対象としてぬいぐるみを使用している人が一番多く、次いでタオルや毛布など柔らかい素材のものを使用していたことがわかった。この結果に関しては、ウィニコット（1953）の主張にあるように、女子のほうが柔らかくて、家族的な概念なものを使用しやすいという見解と一致しているといえる。他の研究においても似たような結果が見出された（森定, 1999；池内・藤原, 2004；王, 2011；王, 2016）。ぬいぐるみ愛好者の移行対象出現率がこれまでの調査の結果より高く、ぬいぐるみが

最も使用されていたものであることがわかった。そのことについて考察する。調査中である被験者は移行対象のぬいぐるみを「モノ」で例えた質問紙の項目に嫌悪感を抱く人もいたり、「モノ」に対しての定義に戸惑いを感じるため回答に困る人がいた。井原ら（2006）は、ぬいぐるみなどの移行対象は人格をもったものとして扱われる傾向があると言及しており、池内（2014）もモノは時にかけがえのない家族であったり、大切な友人であったりすると述べている。使用状況の調査の中でも実際に「移行対象あり」群の人は、「一人遊びの相手」「寝る時はいつも一緒でした」といった友人や仲間要因としての回答することが多く、「移行対象継続」群は「一緒に生活（暮らし）している」「出かける時にこっそり連れていったり、写真を撮ったりする」といった家族的な要因と思われる答えが多く見られた。またある高齢の被験者は「私は幼い頃にぬいぐるみというものが存在しなかったので、使う機会がなかったけど、娘が小さい頃からぬいぐるみが大好きで、私と会話する時にぬいぐるみを通して話したりしていることが多くなり、ぬいぐるみは私と娘の間に常に存在しているし、会話を膨らませてくれるなど無くてはならない家族の一員だと思っている」と語った。つまり移行対象を持つ人にとって、その対象物は「モノ」という認識ではなく、家族や友人、仲間として「生きている者」という認識である。以上のように、ぬいぐるみ愛好者のぬいぐるみを移行対象として使用した人は移行対象を擬人化し、まさに「家族の一員」や「友達」としてみなしている傾向があると考えられる。そのためにヒトに投影されやすく、擬人化されやすいぬいぐるみが移行対象として多く出現したと考えられる。また本研究の調査はぬいぐるみ愛好者の集うイベントで行った調査であるため、ぬいぐるみへの親和性も高く、元々ぬいぐるみが「好き」という集団を対象に行った調査ということや移行対象の使用者に直接アンケートを行う方法を取ったことが移行対象としてぬいぐるみを使用していた人の割合が

高くなる結果に繋がったと考えられる。

#### アニミズム思考と対人様式についての検討

今回の結果はぬいぐるみ愛好者の移行対象経験の有無によるアニミズムとIWM尺度の違いに関していずれも有意な差がみられなかった。また女子大学生（王，2016）と下位尺度ごとと比較した結果においても有意な差は見られず、本研究の目的であった移行対象使用による対人様式およびアニミズム思考の影響は見られなかったことになる。その結果を踏まえ、移行対象の青年期以降の使用に至る長期使用の意味について考察していきたい。

#### 青年期以降の移行対象継続とアニミズム思考

まず、移行対象の使用経験によるアニミズム思考に有意な差が見られなかった結果を考えると、「仮説1の青年期以降の移行対象継続群にはアニミズム思考が強く影響している」は実証されなかったことになる。ぬいぐるみ愛好者の3群間の平均値と標準偏差を比較しても大きな差は見られず（表5）、ぬいぐるみ愛好者は、移行対象の有無に限らず、アニミズム思考が平均的に高く、またぬいぐるみ愛好者全体のアニミズム思考が女子大学生より高い傾向がないとは言いきれず、「所有物の擬人化」においては差が見られた。今回はぬいぐるみ愛好者という集団で調査を行ったため移行対象の経験とは関係なく、被験者全員がぬいぐるみに対する親和性が高かったと思われる。ぬいぐるみ愛好者はぬいぐるみをまるで「家族の一員」や「友人」のように人格化していることが、使用状況の調査の中でも明らかであり、ぬいぐるみという「モノ」に対し、まるで命が宿っているように認識していることからアニミズム思考が強いことが窺える。加えて、そうした命が宿ったモノとの関わりの中で、ぬいぐるみ愛好者のぬいぐるみに対する親和性は相対的にアニミズム思考を高めたのではないかと考えられる。そのため女子大生のアニミズム思考より高い傾向が認められたのではないだろうか。日本人には昔か

らアニミズム的自然観をもち（山縣，1999）、モノを大切に長く使う（庄司ら，2014）文化が根付いている。ぬいぐるみを大切に扱ってきたぬいぐるみ愛好者だからこそ、ぬいぐるみという「モノ」に命を感じ、アニミズム思考が育っていったのではないだろうか。また、山縣（1999）がアニミズム思考の強さは多くの研究において加齢によりさらに高まると結論づけたものを支持する結果となったともいえる。それは自ら長い人生経験のうえに立ってたどり着いた境地の違い（山縣，1999）であるとしている。このように、年齢による影響も考えられる。

#### 青年期以降の移行対象継続者の対人様式

移行対象の使用経験によるIWMに有意な差が見られなかった結果を考えると、「仮説2の青年期以降の移行対象継続者は対人様式が安定している」は支持されなかったといえる。つまりIWMにおいても移行対象の使用経験による対人様式の違いを統計的に見出すことができなかった。この結果について考察してみたい。Erikson（1963）の発達理論からぬいぐるみ愛好者の発達の課題を考えると、女子大学生が青年期で重要な課題が自我同一性の確立であるのに対し、成人期の課題は親密性と世代性である。この二つを達成するために他者との関係性が重要となる。つまり、成年期の女性は獲得した自我同一性をもとに現実生活の中で他者と親密な関係を築けるかが大切になってくる。ここに移行対象の使用がどんな影響を及ぼしているのか。井原ら（2006）は移行対象との関わりが対人関係のシミュレーションやイメージする力を発揮する機会になると考えている。青年期以降も移行対象を所持し続ける人はこうして移行対象と対人的なシミュレーションをしながら、対人的に安定を図り、現実での傷つきが移行対象との間で慰められ、その上で現実の他者と関わっていくと考えられる。今回の調査の結果を踏まえると、ぬいぐるみ愛好者の移行対象経験者には対人様式において際立った特徴は見られなかったが、それよりも移行対象の慰めの機能

により内的な安定性を得られているのではないかと考えられる。移行対象との関係は対人様式の在り方を決めるものではなく、他者との関係の取り方からくる傷つきや不安を慰め、心の安定を図ったり逃避する場所としての機能を果たしているのではないかと考えられる。また岡本（1997）は成人期女性のアイデンティティ発達を「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」と分類し、両者が相互に影響を及ぼしながら、同等の重要性をもつと指摘している。つまり、親密性段階では他人と交流し、体験を共有したり、お互い尊重しあうことでより成熟した関係を築きながら、個としてのアイデンティティが成長、発達していく。移行対象はそうした親密性を養う役割を果たしていたのではないだろうか。そして、世代性の段階で他人の世話や成長を助けながら他者の役に立つことを体験し、自己確信や自信をつけていく。成人期の女性はこうして自己から他者へ関心をもち、他者から自己に繋がり、結果的に自己と他者の関係が良いバランスとして保っていくこととなるともいえる。また、成人期の女性は社会で色々な経験をし、職場や家庭、ママ友や近所の付き合いなど、さまざまな人間関係のなかで挫折を乗り越えながら成熟した対人関係様式を構築してきたため、移行対象経験の要因による対人様式の影響が見出されにくくなる結果となったと考えられる。

その他、今回調査で得たサンプル数は全体的に少数であるため、統計的に有意な差を見出すことの難しさがあると考えられる。サンプル数を増やして、さらなる検討の余地があると思われる。

#### 青年期以降の移行対象について

ここまで移行対象を持ち続ける人の特徴について考察してきた。以下は、移行対象の所持という「愛着物をもつ」ことの意味について触れていきながら、今回の結論をまとめていく。

移行対象を長く所持し使用し続けることは、長く愛着物をもつことである。後藤ら（2011）

はモノに抱く愛着感について調査を行い、その結果の一つは愛着物を持つ人はそのモノとの繋がりを強く意識しており、そのモノはその人にとって「成長の一因」となる存在であり、ある目的を遂行する際に行動を共にする「パートナー」のような存在であることを示している。松本ら（2003）の研究では、人形型玩具に対して肯定的評価・愛着感情を感じた中高年ユーザに関して、玩具が人工物であると認識しつつ、同時に共存者としても認識していること、また、自らの心身状態の改善と対人活動の広がりにつながる可能性をみている。庄司ら（2014）はモノの意味について研究し、モノが単に物理的な対象ではなく、人は愛着を感じるモノとの相互作用によって自己の存在や他者との関係性に大きく影響する可能性があり、モノへの愛着が生じることで人の自己の発達に大きな影響を及ぼすことを報告している。以上のように、「モノ」は所有者にとって形や持つ機能以上に共存者として存在する意味があり、愛着物が常

に存在しているということはその人にとって成長や発達的に肯定的な影響を及ぼしている。また感情面に働きかけやすく、対人的な領域の広がりにも効果が見られることが考えられる。

今回、移行対象の調査対象を青年期から成人期の女性にまで広げた。これまで移行対象の研究において女性のデータのみを扱い分析されているものはなかった。この点から移行対象研究に新たな研究の方向性をもたらしたといえる。また、長期にわたる移行対象の使用に対しての執着心は何らかの精神病理と結びつけて考えられることが多かった（池内, 2014; Mahler, 1963）が、むしろ個人の成長、発達的な面や対人関係に肯定的な評価があることはこれまでの研究でも示唆しており、移行対象の長期間における保持が病的現象であるとは一概に言えないのではないかと考えられる。今後、移行対象継続者については量的調査では測れない質的な要素をさらに突き詰めて検討していく必要があると思われる。

## 参考文献

- 阿部 一（2002）. 現代日本文学に見られるアニミズム的自然観の位相空間モデル 東洋学園大学紀要, 10, 138-148.
- 阿部哲郎（2006）. 乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響 法政大学大学院紀要, 56, 281-282.
- Arkema, P.H. (1981). The borderline personality and transitional relatedness. *The American Journal of Psychiatry*, 138 (2), 172-177.
- Busch, F., Nagera, H., McKnight, J., & Pazzarossi, G. (1973). Primary transitional objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 12, 193-214.
- 遠藤利彦（1989）. 移行対象に関する理論的考察—特にその発現の機序をめぐって— 東京大学教育学部紀要, 29, 229-241.
- 遠藤利彦（1990）. 移行対象の発生の解明——移行対象と母性的関わり—— 発達心理学研究, 1 (1), 59-69.
- 遠藤利彦（1991）. 移行対象と母子間ストレス 東京大学教育学部紀要, 39, 243-252.
- 遠藤由美（2000）. 青年の心理——ゆれ動く時代を生きる—— サイエンス社.
- Erikson, E.H. (1963). *Childhood and society*. New York: Norton 仁科弥生（訳）(1980). 幼児期と社会 みすず書房.
- Erkolahti, R., & Nystrom, M. (2009). The prevalence of transitional object use in adolescence: is there a connection between the existence of a transitional object and depressive symptoms? *European Child & Adolescent Psychiatry*, 18 (7), 400-406.
- 藤井京子（1985）. 移行対象の使用に関する発達的研究 教育心理学研究, 33, 106-114.
- 藤巻英徳（2005）. 乳幼児期の移行対象と青年期における自立 法政大学大学院人間社会研究科紀要, 54, 346.
- 布施光代（2004）. 生物概念と生命概念の階層構造 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 215-222.
- Gadini, R., & Gadini, E. (1970). Transitional objects and the process of individuation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 9, 347-365.



- 後藤真一・椎塚久雄 (2011). モノにまつわる体験とモノに抱く愛着感との関連 工学院大学研究報告, 100, 97-103.
- Hong, K.M. (1978). The transitional phenomena: A theoretical integration. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 33, 47-79.
- Hong, K.M., & Townes, B.D. (1976). Infant's attachment to inanimate objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61.
- Horton, P.C. (1981). *Solace: The Missing Dimension in Psychiatry*. The University of Chicago Press.
- 児玉憲典訳 (1985). 移行対象の理論と臨床——ぬいぐるみから大洋体験へ 金鋼出版.
- 市川千秋 (1977). 老人のアニミズムに関する研究 三重大学教育学部研究紀要, 28, 57-61.
- 井原成男 (1996). ぬいぐるみの心理学——子どもの発達と臨床心理学への招待 日本小児医事出版社.
- 井原成男・橋爪千恵子・日浅美由紀・森定美也子・吉野美緒 (2006). 移行対象の臨床的展開——ぬいぐるみの発達心理学 岩崎学術出版.
- 井原成男・木村涼子 (1986). 移行対象の発達の意味——移行対象がさまざまな現れ方をした3症例からの検討 小児の精神と神経, 26, 57-63.
- 井原成男・汪 玲・庄司順一 (1997). 移行対象と気質の日中比較 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 170.
- 池内裕美 (2010). 成人のアニミズム的思考：自発的喪失としてのモノ供養の心理 社会心理学研究, 25 (3), 167-177.
- 池内裕美 (2014). 人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性検討 社会心理学研究, 30 (2), 86-98.
- 池内裕美・藤原武弘 (2004). 移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から 社会心理学研究, 19, 184-194.
- 木野和代・岩城達也 (2008). 贈り物に付与された価値とモノへの愛着——贈り主による認知の分析—— 感情心理学研究, 16, 73-86.
- 北川歳昭 (2005). 発達段階と発達課題 平山諭・鈴木隆男 (編) (2005) 発達心理学の基礎 I ライフサイクル ミネルヴァ書房 pp. 63-67.
- 黒川嘉子 (1999). 幼児の就眠時行動の心理学的考察——狭義の移行対象論から自己調節論へと視点をうつして 京都大学大学院紀要, 45, 342-352.
- 黒川嘉子 (2004). 移行対象・移行現象に関する二つの視点 心理臨床学研究 22 (3), 285-296.
- Mahler, M.S. (1963). Thoughts about development and individuation. *Psychoanalytic Study of the Child*, 18, 307-324.
- 牧野圭子 (1992). 大人におけるアニミズム的イメージの持ちやすさについて 日本教育心理学会総会発表論文集 34, 70.
- 松本斉子・平井葉子・往住彰文 (2003). 共存的人工物としての人形玩具 認知科学, 10, 385-400.
- 森定美也子 (1999). 乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在 心理臨床学研究, 16, 582-591.
- 森定美也子 (2001). 思春期における慰める存在——移行対象の観点から 19 (5), 535-541.
- 森下みさ子 (2006). 児童学からの出発：現代おもちゃと子どもの世界の文法（その一）：性差（セクシャリティ）／仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）／感受性（センシティブティ） 幼児の教育, 105 (7), 40-48.
- 中根淑子 (1994). 移行対象経験と青年期の母親イメージとの関係 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 97.
- 信田 敦 (2009). 移行対象・移行現象からみる大学生における分離不安に関する研究 心理相談センター年報 4, 21-28.
- 岡本裕子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.
- 岡本裕子 (編) (1999). 女性の生涯発達とアイデンティティ——個としての発達・かかわりの中での成熟 北大路書房.
- 大元 誠・秋山 弥 (1988). 「感」的認識としてみたアニミズムに関する発達の研究 佐賀大学教育学部研究論文集, 35 (2), 59-69.
- Piaget, J. (1929). *The child's conception of the world*. London: Routledge & Kegan Paul.
- 大伴 茂 (訳) (1955). 児童の世界観——ピアジェ臨床児童心理学 II 同文書院.
- Shafii, T. (1986). The prevalence and use of transitional objects: a study of 230 adolescents. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 25, 805-808.
- 清水幸子 (2012). 移行対象経験が青年期の対人様式や自尊感情に与える影響 人間科学研究,



- 25 (1), 150.
- 庄司市子・簡 浚祐・崔 玉芬・山田有芸・新井雅・江角 周子 (2014). 「モノの意味」に関する研究 筑波大学発達臨床心理学研究, 25, 39-48.
- 園田雅代・平木典子・下山晴彦 (2007). 女性の発達臨床心理学 金鋼出版.
- Stevenson, O. (1954). The first treasured possession. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 9, 199-217.
- Tabin, J.K. (1992). Transitional objects as objectifies of the self in toddlers and adolescents. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 56, 209-220.
- 寺内文雄・久保光徳・青木弘行・橋本英治 (2005). 愛着の発生に関わる因果モデルの構築 デザイン学研究, 51, 45-52.
- 戸田弘二 (1998). 内的作業モデル尺度 堀 洋道・山本真理子・松井 豊 (編) (1994) 心理尺度ファイル——人間と社会を測る—— 垣内出版 pp. 109-114.
- Tolpin, M. (1971). On the beginnings of a cohesive self, an application of the concept of transmuting internalization to the study of the transitional object and signal anxiety. *Psychoanalytic Study of the Child*, 23, 316-352.
- 富田昌平 (2007). 乳幼児の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究 中国学園紀要, 6, 127-138.
- 梅村かおり (2002). 母親の養育意識と母子移行対象の性質に関する調査研究 静岡大学心理臨床研究, 1, 3-10.
- 牛島定信 (1982). 過渡対象をめぐって 精神分析研究, 26(1), 1-19.
- 王 怡今 (2011). 台湾における移行対象の出現・消失に関する研究：生育環境の視点から 東京国際大学臨床心理学研究科修士論文 (未刊).
- 王 怡今 (2016). 青年期以降の移行対象——アニミズム的思考と対人様式との関係から—— 東京国際大学臨床心理学研究, 14, 1-17.
- Winnicott, D.W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97. 北山 修監訳 (2005). 小児医学から精神分析へウィニコット臨床論文集 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D.W. (1964). *Further thoughts on babies as persons. In the child, the family and the outside world*. Penguin Books. 猪股丈二 (訳) (1985): 子どもと家族とまわりの世界——赤ちゃんはなぜなくの, 子どもはなぜ遊ぶの 星和書店.
- 山縣喜代 (1999). 現代日本女性の生き方——宗教的・倫理的価値意識と心情—— ミネルヴァ書房.
- 山本美知子 (2008). 移行対象が青年期の友人関係に及ぼす影響 桜美林大学大学院心理学研究科修士論文 (未刊).

## 編 集 後 記

早いもので、臨床心理学研究科が西早稲田のキャンパスから第2キャンパスに移転して、5年の歳月が流れた。新しい臨床心理センターに相談者が来るかどうか心配であったけれど、ようやく地元に着いたようで、院生たちに経験を積ませるのに十分な相談件数が確保できるようになった。

私事になるが、キャンパスの移転とセンターの新設の準備に始まった6年間の研究科長の仕事を終える年に、このような力作ぞろいの紀要を送り出せたことを嬉しく思う。発達障害という視点から歴史的業績のある人物を論じた綾田論文、コラージュを通して母性イメージを探ろうとした申論文、青年期について、様々な視点から論じた新井、田村、渡邊、王の論文と、ぜひ目を通していただきたい。

編集委員 田中信市

---

臨床心理学研究 東京国際大学臨床心理学研究科 第15号

2017 (平成29) 年 3月31日発行

【非 売 品】

編 集 者 東 京 国 際 大 学 大 学 院  
臨 床 心 理 学 研 究 科 紀 要 編 集 委 員

発 行 者 高 橋 宏

発 行 者 東 京 国 際 大 学  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-6-1  
TEL (03) 3005-7727  
FAX (03) 3205-7074

印 刷 者 株 式 会 社 東 京 プ レ ス  
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18

---

# ○東京国際大学大学院紀要編集及び刊行に関する規程

2016年9月30日制定

## (目的)

第1条 この規程は、東京国際大学（以下、「本学」という）大学院における教育研究を助長し、学術的な教授研究の成果を学会及び広く社会に公表する手段として刊行する学術雑誌（以下、「大学院紀要」という）の編集・刊行に関する事項及びその他関連事項を定めることを目的とする。

## (名称)

第2条 本学が編集・刊行する大学院紀要は、次の2編とする。

(1)『人文・社会科学研究—東京国際大学大学院』（英語名称：The Graduate School Bulletin of Social Sciences and Humanities, Tokyo International University）

(2)『臨床心理学研究—東京国際大学大学院臨床心理学研究科』（英語名称：The Graduate School Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo International University）

## (編集・刊行組織)

第3条 大学院紀要の編集及び刊行は、本学FD委員会（以下、「委員会」という）の責任において行う。

2 委員会の下FD委員及び研究科長により構成される「大学院紀要編集会議」（以下、「編集会議」という）を置き、委員長の指示により編集及び刊行の実務を担当せしめる。

3 「大学院紀要編集会議」の責任者は、FD委員の中から委員長が推薦し学長が指名するものとし、本規程における委員長の職務を都度委嘱することができる。

## (掲載する学術的な教授研究成果の種類)

第4条 大学院紀要に掲載する学術的な教授研究の成果は、学術論文、研究ノート及びその他学術研究の成果と委員長が編集会議の意見を徴し判断したもの（以下、「大学院紀要掲載論文等」という）とする。

## (査読制度等)

第5条 大学院紀要掲載論文等のうち「学術論文」については、査読制度により掲載の可否を判定するものとする。

2 学術論文の査読は、委員長の囑託する査読審査委員が行う。

3 委員長は、査読審査委員の中の主査から提出された委員長宛て査読審査結果報告及び各査読審査委員の報告書に基づき、編集会議の意見を徴し掲載の可否を判定する。

## (査読制度の非適用)

第6条 学術論文を除く大学院紀要掲載論文等については、前条の査読制度は適用しない。但し、編集会議は、大学院紀要掲載論文等の形式等につき、著者に修正を指示することができるものとし、当該指示に正当な理由なく著者が従わない場合、掲載を認めないことがある。

## (寄稿資格)

第7条 大学院紀要への寄稿資格を有する者は、次の各号に定める者とする。

(1) 本学大学院研究科に所属する学生

(2) 本学大学院研究科修了後3年以内の者

(3) 前各号の他、編集会議の意見を徴し委員長が適当と認めたる者

## (大学院紀要掲載論文等の形式等)

第8条 大学院紀要掲載論文等の形式、提出方法等に係る詳細は、別に定める「東京国際大学大学院紀要掲載論文等執筆・提出要領」（以下、「要領」という）による。

- 2 大学院紀要掲載論文等の形式等は、原則として APA (American Psychological Association) 方式とするが、当該論文等の分野において確立した標準の書式・形式等がある場合には、それに従うことも可とする。
- 3 大学院紀要掲載論文等の原稿は、著者の責任において作成された完成原稿とし、形式が整っていない原稿若しくは完成原稿とみなし得ない原稿は、受理しない。
- 4 大学院紀要掲載論文等の掲載原稿の校正等は、著者の最終責任においてこれを行う。

(使用言語)

第 9 条 大学院紀要掲載論文等の執筆に使用する言語は、日本語又は英語とする。

(発行の形態)

第 10 条 大学院紀要の発行の形態は PDF 等の電子媒体とし、本学ホームページ等において公表する。

- 2 刊行された大学院紀要は、「国立情報学研究所 (NII : National Institute of Informatics) が運営する学術論文や図書・雑誌等の学術情報データベース」CiNii での公開、国立国会図書館の NDL-OPAC への取載、海外における同様な方法での公表等により、適切に周知するものとする。

(発行者)

第 11 条 大学院紀要の発行者は、東京国際大学学長とする。

(発行時期等)

第 12 条 大学院紀要の刊行は、各編とも原則として毎年度 1 回とし、編集会議において発行予定期日、原稿締切日等を設定する。

(転 載)

第 13 条 大学院紀要に掲載された大学院紀要掲載論文等を執筆者が他所に転載する場合には、委員長の了解を得るとともに、初出が大学院紀要であることを明示しなければならない。

(改 廃)

第 14 条 この規程の改廃は、常務会の議を経て理事長が行う。

附 則：

1. この規程は、2016 年 9 月 30 日より施行する。
2. この規程の施行に伴い、以下に記載する「東京国際大学大学院研究科紀要刊行に関する規程」は廃止する。
  - (1) 「商学研究—東京国際大学大学院商学研究科」刊行に関する規程
  - (2) 「国際関係学研究—東京国際大学大学院国際関係学研究科」刊行に関する規程
  - (3) 「応用社会学研究—東京国際大学大学院社会学研究科」刊行に関する規程
  - (4) 「経済研究—東京国際大学大学院経済学研究科」刊行に関する規程
  - (5) 「臨床心理学研究—東京国際大学大学院臨床心理学研究科」刊行に関する規程

# THE STUDY OF CLINICAL PSYCHOLOGY

Graduate School of Clinical Psychology  
TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

No.15

---

Articles

- |  |                 |
|--|-----------------|
| Relationship between Sense of Authenticity, Object Relations and Acceptance of<br>Self and Others in University Students                     | ARAI, Kazunori  |
| The Study of Historic People with Developmental Disorders  | AYATA, Sumire   |
| Exploratory Research on the Images of Motherhood Expressed in Collage (Report 1)<br>– Focusing on Formal Analysis –                          | SHIN, Jin-Ah    |
| The Effect of Reliability to Parents and Gender in Adolescence on<br>Interpersonal Needs and Conformity Behaviors: Among College Students    | TAMURA, Mana    |
| Self-disclosure in the SNS use of the Youth and the Psychological Factors  | WATANABE, Naoko |
| The Transitional Objects After Adolescence (Part2):<br>Through the Comparison of Female Stuffed Toy Lovers<br>and Female University Students | WANG, Yi-Chin   |

---

2 0 1 7